白騎士物語～魔法少女と騎士たちの目覚め～

ねぎとろどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白騎士物語～魔法少女と騎士たちの目覚め～

【Ｎコード】
Ｎ３２０４Ｙ

【作者名】
ねぎとろどん

【あらすじ】
死を迎えた青年は、神様の計らいでレナードの後輩、ソード・ホワイトナイトとして『白騎士物語』の世界に転生した。紆余曲折を得て、皇帝マデラスを倒すことに成功するも、マデラスの最後のあがきで時空の穴に落ちてしまう。……そして気が付くと、そこは見知らぬ世界だった……。空を見上げると、満天の星空で交差する紫と金色の光……さらに、マデラスに吸収されたはずの『アーク』に異変が！？ねぎとろどんが贈るクロスオーバーファンタジー第一弾、堂々と開幕！

プロローグ～冒険者の回想～

オレの名前は、ソード・ホワイトナイト。

現実世界で死を迎えたオレは、生き様を神様に褒められ、『白騎士物語』の世界へアバターとして転生させられた。

神様いわく、「お前にはまだ一つだけ足りないものがある。この物語の中で、それを見つけることができるじゃろう」との事……そう言われても、前世の記憶もないからよく分からないけどね……

平和な国である『バランドール王国』に転生したオレは、ひょんなことからワイン商のラパッチさんに拾われ、彼のワイン商の手伝いをすることになったのだが……

初仕事である城へのワイン搬入……先輩であるレナード、その幼馴染であるユウリと一緒に城にワインを運び込んだ後、「ちょっとだけ舞踏会の雰囲気を満喫していこう」というレナードの言葉につられて、城に入り込んでみたのだが……

……その直後、いきなり黒い鎧の軍団が、城に攻め込んできたんだ！

そこから後はとんでもない事の連続だった……謎の老魔法剣士エルドアに助けてもらったり、レナードが古代の戦闘兵器、シンナイトである『白騎士』に変身したりして、なんとかその場を乗り切ることができた。

だが、その戦いで国王のヴァルトス王は殺害されてしまい、王女であるシズナ姫もまた、『ウィザード』と名乗った謎の組織に連れ去られてしまった……

幼いころにシズナ姫と面識があったらしいレナードは、エルドアの言葉に導かれてシズナ姫を救う旅に出ることになった。

当然、オレもそれをほっとくことはできない！冒険で鍛えた我流の剣術を武器に、レナードに付いて行くことにした！

それからは、すごい冒険の数々だった……レナードの『白騎士』と対照的な敵側のシンナイト、『黒騎士』と戦ったり、砂漠の都の『アルバナ』ではカーラ、巨大生物の上に建造された中立自由都市の『グリード』では、シーザーという頼もしい仲間に出会っりもした。

シーザーは『白騎士』と同じシンナイトである『竜騎士』の力を手に入れたが、実はカーラは『ウィザード』のスパイで『黒騎士』だったことをオレ達に明かすと、『ウィザード』へと戻っていった……

カーラの裏切りにあったオレ達だったけど、それでもオレ達はカーラを信じて戦い続けた。

短い間とはいえ、カーラは苦楽を共にした仲間だったから……なにより、シーザーはカーラを気にしてたみたいだったし……

そして、ついに決戦の舞台である『ドグマホール』へと足を踏み入れたオレ達……その時、エルドアがこの戦いの真実を語った。

この戦いは、はるか昔、シンナイト時代の戦争である『ドグマ戦争』がきっかけだということ……

その昔、魔法国家『アスヴァーン』に、武力国家である『イシュレニア帝国』が戦争を仕掛けてきた。

戦いは熾烈(しれつ)を極めたが、アスヴァーンに味方した『白騎士』が最強最悪のシンナイト『太陽王』に変身した皇帝マドラスを倒し、戦いは終結した。

だが、その代償に『白騎士』の契約者であるワイルドと、アスヴァーンの王女ミューレアスが命を落とした……

しかし、マドラスは邪悪な意思を持ち、遠い未来に復活してミューレアスの生まれ変わりであるシズナ姫を狙うと予言され、エルドアは遥か昔から、禁呪と呼ばれる魔法を使ってこの時代に来たらしい……

……余談だけど、エルドアはその禁呪の代償として老人の姿になってしまったらしく、心はまだ青年らしい……

その話を聞いたオレ達は、決意を新たにしてドグマホール神殿へと足を踏み入れた！だが、その時にはすでに、『ウィザード』の首領グラーゼルが『太陽王』の封印を解き、オレ達に戦いを挑んできた！

シズナ姫の協力で、なんとか『太陽王』を退けることには成功したけど、その代償に絆を取り戻したカーラが殺され、神殿は崩壊、太陽王も奪われてしまった……

それは、間違いなくオレ達の完全敗北だった……

……そして、それから一年後……

『ウィザード』は『新生イシュレニア帝国』と名前を変え、数々の国を滅ぼし侵略を繰り返していた。

オレ達は、バランドール王に即位したシズナ姫の指揮のもと、まずはフォーリア公国に協力を取り付けるためにフォーリア公国に向かった……

そこで出会ったのは、和平を結ぼうとしていた穏健派筆頭ダラム総裁の娘、ミウとその護衛であるスカーダインと呼ばれる蒼い騎士だった。

ミウとスカーダイン、そして穏健派のみんなの協力を得て、オレ達はフォーリア公国を新生イシュレニア帝国と手を組んでいた過激派の手から解放することに成功する。

その後、自由都市グリードに戻っていたシーザーと再会したオレ達は、グリードを病を振りまくモンスターの手から守ることに成功した。

シーザーを再び仲間に加えたオレ達だが、今度はその矢先にレナードが倒れてしまう。

レナードを治すための薬草を探している途中、オレ達は風の民や

バランドール王国の騎士団長サイラスと再会。一緒に戦うことを了承してくれた。

そしてさらに、その戦いの中で記憶を取り戻したユウリが最後のシンナイト『月姫』の契約者となり、ついに五体のシンナイトがすべて出揃った！

シンナイトの契約者……レナード、ユウリ、カーラ、シーザー、グラーゼルの五人は、イシュレニア帝国に支持を得たグライブ＝レダムがシンナイトを動かすために用意しておきながら、そのまま遺跡ごと封印された子供たちであり、当時は小さいながらも同じ村で育った幼馴染のような存在だったんだ。

その後、オレ達は『太陽王』を倒すための秘策として、かつての『白騎士』が『太陽王』を倒した伝説の剣『ファルシオス』を手に入れるため、スカーダイン達の力を借りて過去の世界へと飛んだ。

そこで、ミウは祖父から、シーザーとサイラスはそれぞれの父から『ファルシオス』の力を封印した『証』を受け継いだ……

さらに、過去での戦いでスカーダインの正体が死んだはずのカーラだったことが分かった。彼女は、一度死んだ後にフォーリアにいる『大賢者ユグラ』の力で生き返っていたのだ。

現代に戻り、シズナ姫の力で三つの『証』を一つに合わせ、『聖剣ファルシオス』を手に入れたオレ達は、とうとうフォーリア帝国、風の民、バランドール正規軍と協力して『新生イシュレニア帝国』との戦いに挑んだ！

エルドアはこの戦いを『第二次ドグマ戦争』と呼んだ……

『新生イシュレニア帝国』の本拠地である『レッドホーン島』を攻略したオレ達だが、グラーゼルはさらに奥の手を用意していた！

それこそ、巨大移動要塞『ガルマンタ』……グラーゼルは、その力を使って世界を破壊し、自分が世界の王に君臨することをもくろんでいた！

それを止めるために『ガルマンタ』に乗り込んだオレ達は、その最深部でついにグラーゼルとカーラから『黒騎士』の力を奪ったシャプールと対峙する！

白騎士、竜騎士、月姫ＶＳ黒騎士、太陽王の戦いが繰り広げられる中、突然すべての騎士が共鳴し合い、強力な力があふれ出した！

そこに、元バランドール王国の宰相であるサルベインこと、新生イシュレニア帝国のレダム司祭が現れ、自らの野望を口にした。

彼は、エルドアと同じ時代から来た『古人』であり、その目的は五体のシンナイトの共鳴によって皇帝マドラスを復活させることだった！

利用されたことに怒ったグラーゼルだが、すぐにレダム司祭に倒されてしまった……そして、ついにその邪悪な意思が、白騎士の中からあふれ出した！

レナードごと白騎士を飲み込んで、古代の暴君マドラスがついにその姿を現したんだ！

マドラスは、レダム司祭を無造作に葬り去ると、今度はオレ達を

始末しようと襲いかかってきた！

シンナイトの力をすべて奪われた絶体絶命の状況……それでも、オレ達はあきらめるわけにはいかない！

レナードを助けるため、今も外で戦っている多くの仲間たちを救うため！オレ達は力を合わせて皇帝マドラスに挑んだ！

そして今、決着の時……

～～～？～～～

『ハァ……ハァ……』

禍々しい姿に変わった白騎士が、ボロボロになりながら肩で息をしている。オレ達の攻撃で満身創痍になった、皇帝マドラスその人だ。

『な、なぜだ……この私が、まさか……』

マドラスは、信じられないといったように俺たちを見る。……こっちの戦力ももうボロボロだ……でも！

「これが、最後の一撃だ！」

オレは叫ぶと、剣を構えて走り出す！今まで、幾多の戦いを乗り越えてきたオレの相棒『時空剣クロニクル』を構えて！

「ぶちかませぇッ！ソードーーーッ！」

血まみれになりながらも叫ぶシーザー……手にした槍は穂先が砕けて使い物にならなくなっているけど、それでも目は死んでない！

「ソードッ！セティ兄様の仇をとってくれッ！」

ボロボロのカーラが叫ぶ……セティ、それはグラーゼルの中にいる彼の本当の優しい人格……だが、古代の力に魅せられ誕生した別意識、グラーゼルのせいで、今はもういない……

「今度こそ、ドグマの悪夢を終わらせるのだッ！」

変な方向に曲がっている腕をかばいながら、エルドアが力いっぱい叫ぶ……あいつの時代から続く悪夢、今ここで断ち切る！

「あんな腐った暴君、ぶっとばせーーーッ！」

ユウリが半分になってしまった弓を杖代わりにして立ちながら叫ぶ……ああ、力の限り全力でぶっとばしてやるよ！

「お願いします……レナードを、救ってください！」

ここまで来たシズナ姫が両手で祈りを捧げるようにしながらつぶやく……まかせとけって、結婚式にはオレも呼んでくれよ！

「うおおおおおおーーーーーーッ！！！」

オレは力の限り叫びながら飛び上がり、クロニクルをマドラスの中心部にある力の源、紫のクリスタルに突き立てた！

『ギャアアアアアアアアアアアアーーーーーッ！！！！！』

その瞬間、マドラスがまるで獣のような絶叫を上げた！すると、オレが剣を突き立てたクリスタルの中に、うっすらとレナードの姿が浮かんできた！

「レナードッ！」

「……」

「ぐっ、おもっ……」

近くまで上がってきたレナードの手をつかんで引っ張り出すが、傷だらけの腕では体重を支えきれずにレナードは気を失ったまま下へ落ちてしまった！

「しまった！」

あわてて下を見ると、落ちたレナードをシーザーとカーラが下でキャッチしたのが見えた。ナイスキャッチ！♪

『ぬ、ぐおおおおおッ！！！』

「なにっ！？」

だが次の瞬間、オレは動き出したマドラスの腕につかまってしまった！……こいつ、まだこんな力が……ッ！

『おのれ……我が内に取り込んだ騎士たちの力が暴走を始めている……だが、我一人では死なんぞ！』

「「「ッ！！！！」」」

それを聞いた瞬間、シーザーたちは目を見開き、オレは恐怖に背筋を震わせた。こいつ、まさか！

『ふはははッ！勇敢な冒険者よ！貴様も道連れだ！！！』

「なにッ……ぐあっ！？」

その瞬間、クリスタルからすさまじい力があふれ出すと、マドラスの背後の景色が歪み、やがて空間に緑色の穴が開いた！

「あ、あれは……ッ！？」

『時空の歪みから生まれた次元の穴だ……ここに落ちたら最後、どんな時空のどんな世界のどんな時間の飛ばされるか見当もつかん、それ以前に、体ごと消滅するかもしれんなぁ！』

「くっ……！」

冗談じゃない！オレは手の中であがくが、マドラスがしっかり掴んでるせいでビクともしない！

「ソードッ！」

「待ってろ、今助ける！」

「みんな！」

それを見たシーザーたちが、自分たちの武器を構えて走ってくる！だめだ、このままじゃみんな……

「来るな！来ると飲み込まれる！」
「っ！だが……ッ！」

オレの声に、みんな一瞬足が止まる……その瞬間、ついにマドラスの体が時空の穴の重力に負けて浮かび上がり、吸い込まれ始めた！

「くっ……うわあああああああああああッ！！！」
『ふはははははッ！はははははははははッ！！！！！」

狂ったように笑うマドラスと一緒に、オレは時空の穴に飲み込まれた。……景色が、みんなが小さくなっていく……

「「ソードーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！」」

シーザーとカーラの叫びを最後に、時空の穴は閉じてしまった……これで、もうオレは帰れない……

「……ん？」

だがその時、オレの目の前に五つの光が舞い降りてきた……それを見て、オレは思わずつぶやいた。

「アーク……？」

それはレナードたちがシンナイトに変身する際に使う変身アイテム、『アーク」だった……多分、マドラスの中に吸収されたものが、この時空で吐き出されたのだろう。

五つのアークは、オレを取り囲んで輝き始めた。それは、まるで新しい物語の始まりのように見えた。

『な、なんだ！？ぎ、ぎゃあああああああああああああああッ！！！！！』

「……」

オレをつかんでいたマドラスが、光に包まれて消えてしまった。そして、オレもその光に飲み込まれた瞬間、目の前が真っ白になった……

？～つづく～？

プロローグ～冒険者の回想～（後書き）

まずはプロローグです、楽しんでいただけたでしょうか？

この話は、白騎士物語を知らない人のために概要を伝えるものにしました。次回からは、いよいよＡｓ本編に乱入です！

第一話　魔法少女、大ピンチ！？

「ん……んん？」

冷たい風が頬を撫でて、オレの目を覚ましてくれた。この風はよく知ってる、夜特有の冷たくもやさしい風だ……

「ん？」

いや、ちょっと待て……オレはどうなったんだ？確か、マドラスと一緒に時空の穴に落ちて、それから……そうだ『アーク』が来て……

「そうだ、アークは！？」

オレは飛び起きて周りを見回してみる。すると、オレの周りに無造作に散らばっているアイテムを見つけた！

白騎士の変身用アークの白いガントレット、竜騎士のベルト、月姫の弓、黒騎士の盾と剣、太陽王の仮面……

「全部ある……」

いや、これがあるのは不思議じゃない……あの時空の中で、オレを守ってくれて、一緒についてきたんだと思う……あくまでオレの推測だけど……

オレはそっと白騎士のアークに触れてみるが、問題なく触れることができた……普通なら、契約者以外が触れると、拒絶反応を起こ

すはずなのに……

「どうなってるんだ……？」

不可解なことが色々と重なって、オレの頭じゃ処理が追いつかない……くそう、エルドアのおっさんがいれば、分かりやすく説明してくれるのに……

「とにかく、このあたりの事調べてみるか……っと、お？」

その時、オレは妙な感覚に気が付いた。自分の体が、なんだかいつもと違うような……なんとなく振り返ってみると、その違和感の正体に気が付いた。

「影が……短い？」

後ろを見ると、そこには光を受けて伸びるオレの影……でも、明らかに小さい！小さすぎる！

着ている物は、間違いなくオレが愛用してた『白竜の法衣』だ……だけど！

「手も体も小さくなってる……十歳くらいの子供みたいだ……」

しかもよく見たら、あれだけひどかったケガもすっかり治ってるし！？どうなってる？もう何度目かわからない疑問符が、オレの頭の中を駆け抜ける……だが、その時オレは、マドラスの言葉を思い出した。

『この時空に吸い込まれたら最後、どの時空のどの世界のどの時間

に飛ばされるか見当もつかん……それ以前に、体ごと消滅するかもしれんなぁ！』

さっきの時空は、時間や体にも影響を与える……つまり、そのせいでオレの体がこんなんなってしまったと！？

「おいおいおいおい、一度転生した時にもこういうのあったから驚きはしないけど、いくらなんでも縮みすぎだろ！？」

ちなみに、レナードたちと旅をした時のオレは十六歳。一気に六歳も若返ってしまいましたよ！

「まいったなぁ……まぁ、あんま不自由もないし、気にしないでおこう……」

グチグチ言ってても仕方ない！オレは周りに落ちてるアークを拾い集めて道具袋に仕舞い込んだ。

その時……

……ガギィンッ！……ギィンッ！……

「ん？」

かすかにだが、確かに音を聞いた。よく慣れた音だが、どこか少し違う……

「剣と剣を打ち合わせたような音……いやでも……」

音は次第に大きくなっていく……人同士の戦闘でよく聞く、剣と剣をぶつかり合わせたような音だけど、なんか、どこか違和感が……

「この音はどこから……」

キョロキョロと周りを見回すが、そこには誰もいない……いや……

「上か！？」

ほとんど直感だったが、それは的中した！そこでは、紫と金色の二色の光が、何度もぶつかり合いながら交錯していた！

「人が……空を飛んでるーーーーッ！？」

オレはあまりに不思議なその光景に、思わず叫んでいた。

～～～？～～～

その声は、私、高町なのはの耳にも届きました。

「えッ！？」

一瞬でしたけど、聞き間違いなんかじゃない！確かに今、誰かの声が……

その時、目の前に透明なスクリーンが映し出されました。誰かからの通信です。

『なのは、聞こえる？』
「うん、大丈夫だよ、ユーノ君」

スクリーンに映ったのは、金髪の優しそうな男の子……半年前、何も知らない小学生だった私に、魔法の力を与えてくれた不思議な男の子、ユーノ・スクライア君です。

『今の声、なのはにも聞こえたよね？』
「うん！男の声が聞こえたよ！」

ユーノ君が真剣な顔で聞いてきたから、私も真剣にうなづきます。やっぱり、聞き間違いじゃなかったんだ！

『どうもこの結界内に、誰かが入り込んじゃったみたいなんだ！ボクとフェイトとアルフは、この子達の相手で動けないから……うわッ！』
「ユーノ君！？」

突然、画面が揺れてユーノ君が消えました！どうやら、何かに吹っ飛ばされちゃったみたいです！誰も映らなくなった画面から、まだ声が聞こえてきます。

『てめぇ、一対一の戦いの最中に通信たぁいい度胸じゃねぇか！騎士としては最高の侮辱だぜ！』
『くっ……シールドを力ずくで破るなんて……なのは！』
「は、はい！」

ユーノ君の大声にびっくりして、私は思わず正座をしてしまいました！

『さっきも言った通り、ボク達は彼女たちの相手で動けない！アースラは指定位置まで来れてないし……君があの男の子を安全な場所に避難させてくれ！』
「はい、了解しました！」
元気よく答えて敬礼すると、ユーノ君は笑ったまま通信を切りました。
「急がないと……大丈夫、レイジングハート？」
『もちろん、大丈夫です』
私の手にあるピンク色の杖が答えてくれました。それを聞いて少し笑うと、私は今までいたビルから魔法で空に飛び上がりました。

〜〜〜?〜〜〜

……半年前、私は何も知らない普通の小学四年生でした。そんな中、私はユーノ君と出会い、魔法の存在を知りました……
私はユーノ君を助けたい一心で魔法少女になり、『ジュエルシード』っていうアイテム集めをしていました。
そんな事件の中、フェイトちゃんと出会い、戦って、つらいこともあったけど……その事件でお友達になったユーノ君、フェイトちゃん、フェイトちゃんの使い魔でオレンジ色のオオカミのアルフさん……みんなと一緒に戦って、事件は一応終わりを迎えました……
そして、普通の小学生として暮らしていた私は……

今日突然、赤い服を着た謎の女の子に襲われて、負けてしまったのです！

だけど、負けてボロボロになった私を助けてくれたのは、半年ぶりに会うお友達、フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさんでした！

今、フェイトちゃんとアルフさんは赤い服のこのお仲間さん達と、ユーノ君は私のケガを治してくれた後、赤い服の女の子と戦っています。

そして、私は……

〜〜〜?〜〜〜

「う〜む、これはまさか……」

上空で戦い続ける二つの光を見ながら、オレは自分の置かれた状況を大体察した……

ここは、バランドール国のあった世界じゃない……多分、もっと文明の発達した異世界なんだろう。

転生した経験があって助かった……あんまり動揺もなく事態を飲み込めてる自分が、ちょっと怖いけど……

「さて、どうするか……」

『相棒、巨大なエネルギーの歪みを確認！何か来るぜ！』

「えっ……？」

これからどうするかと立ち上がった瞬間、何か機械めいた声が聞こえてきた！しかもかなり近くから……キョロキョロとあたりを見回してみても、誰もいない……

『どこ見てんだ相棒、ここだぜ、ここ！』

「いや、だから「ここ」って言われても……ん？」

よく聞いてみると、声はオレの腰のあたりから聞こえてくる……そこには、いつも一緒にいる相棒の魔法剣クロニクルが……

『よう相棒！気分はどうだい？』

「……は？」

クロニクルの柄の中心にはめ込まれた宝玉が光り、そこから陽気な男の声が飛び出してきた。

……一瞬、オレの頭脳は完全に停止した……そして……

「クロニクルがしゃべったーーーーーッ！！！！」

事態を認識した瞬間、オレはこの世界で二度目の絶叫を上げた……

〜〜〜?〜〜〜

あの男の子がまた何か叫んでいます……どうしたんだろう?まぁ、私も魔法に出会ったばかりの頃は、叫びまくっていた気がしないでもないの……

でも、あの男の子変わってるの……

髪の色は遠目からでも分かるくらいきれいな青で、着てる服も白と青を基準にした変わった服……ちょうど、ＲＰＧのゲームで神官さんが着てるような服です……

「まるで、ゲームの世界の人みたいなの……」

『なのはちゃん、聞こえる!?』

「ひょえあッ!?」

私が思わずつぶやいていると、目の前に突然、通信用のスクリーンが映し出されました!気が抜けてたから、びっくりした〜〜〜……

「な、なんですか、エイミィさん?」

スクリーンに映ったのは、髪の短い女の人でした。名前はエイミィさん、半年前の事件でお世話になった人なの!

だけど、スクリーンに映ったエイミィさんは次の瞬間とんでもないことを告げてきた！

『大変だよ！そっちの結界内に、超強烈なエネルギー反応があったの！まるで何かを召喚するような……とにかく、早く一般人を連れてそこから離れて！』

「え、は、はいぃ！」

エイミィさんの説明は、半分以上よく分からなかったけど、とにかく急いで逃げなきゃダメってことだよね！

「え～と……そ、そうだ！あの男の子……ふえっ！？」

ゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！

通信を切った瞬間、結界内にすごい衝撃が走りました！まるで、空間そのものが揺れているような……

「な、なに！？」

『マスター、魔力反応上昇！何か出てきます！』

「ッ！？」

バリィィィィィィンッ！！！！

レイジングハートから告げられた次の瞬間、空の一部がガラスみ

たいに割れて、その中の緑色の空間から、何かが降りてきました……

それは、とてもへんてこな姿でした……

蒼いおっきな人の顔の上に、小さな人の顔が生えていて、背中には羽、両側には腕の代わりみたいに動き回る変な柱……

こっちも、まるでＲＰＧのゲームに出てくるモンスターみたいです。でも、私には分かります。いえ、今はモンスターの出現で動きを止めている、フェイトちゃんも、アルフさんも、ユーノ君も、さっきの赤い女の子や、そのお仲間さん達も……みんな分かっているはずです……

それが、とっても危ないものだってことッ！！！

『うそ……魔力値ＳＳ＋！？それにこの反応は……みんな、逃げてぇッ！！！！！』

「『『っ！！！』』」

エイミィさんの声で、私たちは一斉に動こうとしました！なんでか分かんないけど、頭や胸の奥にある何かが、逃げろって言ってる気がするの！

でも、それは遅かった……

そのモンスターさんの羽が光った瞬間、確かに私はこんな言葉を聞きました……

……メテオ・ブレイク……

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！！！！！！！！

その瞬間、空に開いた大きな穴から、たくさんの隕石が私を……

いえ、そこにいたみんなを襲いました……

そして私は、体がちぎれ飛びそうな衝撃と、目も開けていられないような光に包まれて、気を失ってしまったのです……

（つづく）

第一話　魔法少女、大ピンチ！？（後書き）

第一章です、主人公、介入してません！でもモンスターは介入しました！

ちなみに、モンスターは白騎士物語に登場するモンスター、魔像王ベヒモスです！

次回は、ついにシンナイトが登場します！お楽しみに！

第二話　ヴォルケンリッター、その名に懸けて！

「うっ……くぅ……」

目を覚ました私は、ガレキをどかしながら立ち上がった……見上げると、さっきとんでもない攻撃をしてきた見たこともないモンスターがどこかのビルの上に浮かんでいる。

「ちっくしょう、なんなんだよあれ……」

「……ぐぬっ……」

声に振り返ると、赤い服を着た少女と筋肉質な大男が立っていた。二人とも、私の信頼する仲間だ。

「ヴィータ、ザフィーラ……無事だったか……」

「おう、まーな……」

「なんとか、だがな……」

大男、ザフィーラが無表情で答えた。二人とも、さっきの攻撃をくらったせいでボロボロだ。

……まぁ、私も同じような状態ではあるがな……

『みんな、大丈夫！？』

「ああ、シャマルか……」

頭の中に、知った声が響いてきた……バックアップを得意とする

我が仲間、シャマルだ……

「こちら何とか全員無事だ……それよりも、あの魔物の事は何か分かるか？」

『ううん、とんでもない魔力を持っていることくらいよ……多分、この世界の魔物じゃないんじゃないかしら……』

「なるほど、な……」

シャマルが言う「この世界」というのは、この地球だけではなく、管理局が管理する『次元世界』すべてということだろう……なるほど、未知の世界の魔物ということか……

「なぁ、シャマル……あいつってリンカーコア持ってんのか？」

『ううん、その反応はないわ……残念だけどね……』

「そうか……」

ヴィータの質問に、シャマルが肩をすくめるように答える。

『リンカーコア』……魔法を使う者が体内に宿す特殊な器官……その収集こそが、我らの目的……

「それならば、戦うだけ無駄……と、言いたいところだが……」

私は周りを見回しながらつぶやく……さっきの一撃だけで、この辺り一面が焼け野原になってしまった……ヴィータの結界の上に張られた結界のおかげで、現実世界への被害は免れているが、もしこ

れが外に出たら……

「これが外に出たら、海鳴市そのものが吹き飛ぶな……」

「それじゃあッ！？」

「……主にも、危険が及ぶだろうな……」

驚いて声を上げるヴィータに、ザフィーラが顔をしかめたまま答える。

そう……そうなれば、この海鳴市に住む我が主まで危険にさらされることになる。かりに逃げおおせたとしても、心優しい主は泣いてしまうだろう……

主に涙を流させては、意味がない……そして！

「我らベルカの騎士に後退の文字はない！」

「おう！絶対守るんだ！あたし達に大切な時間をくれた、あの笑顔を！」

「……盾の守護獣の名に懸けて、主の危険は排除する！」

『私は結界内に入れないから、バックアップしかできないけど……みんな、必ず勝って帰りましょう！』

「「「おうッ！！！」」」

我らはそれぞれのデバイスを手に立ち上がる。……騎士の名に懸けて、主とこの街を、守ってみせる！

「闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターが烈火の将……シグナム、参る！」

「同じく鉄槌の騎士ヴィータ！いくぜぇ！」

「盾の守護獣ザフィーラ！いざッ！」

私が名乗りを上げながら空へ飛びだすと、ヴィータとザフィーラも同じように飛び上がった！

……必ずあれを倒す……我が主と、主が愛するこの街を守るために……

我ら、ヴォルケンリッターの名に懸けて！

〜〜〜?〜〜〜

……え〜と、どうなったんだ？

クロニクルがしゃべったことに驚いて固まっていたオレは、あのモンスターの出現に気づくのが遅れた……

結果、その攻撃への対応が遅れたけど、クロニクルが突然『ホワイトフライ』って叫んだ瞬間、オレの靴に青い羽が生え、オレの体は空中に飛び上がって攻撃をくらわずに済んだ……でも……

「あ〜、死ぬかと思った……」

現在、オレは空を飛ぶ感覚をつかむことができず、空中で逆さまなまま浮いている……これ、一体どうすればいいんだ？

……というか……

「あれって、ベヒモスだよな……？」

オレは塔みたいな建物の上で自分の眷属である土の精霊『グノーム』を生み出し続けてるモンスターを見ながらつぶやいた。

オレの世界にいたモンスター『魔像王ベヒモス』……土の精霊が進化した姿で、グノーム達の親玉だ。

その魔法の威力はすさまじく、前に一度戦った時も、危うくやられそうになったのを覚えている。

「なんでこの世界にいるんだ……っと！」

オレは浮いてる足を軸に『くるっ』と回転して、何とか立ち上がることができた。なんかあれだ、水に浮く靴を履いて海の上に立ってる感じだ……

『器用だな、相棒』

「おう、クロニクルか」

オレの腰に引っ付いてる剣が呆れたようにつぶやいたのを聞いて、オレは笑って返す。すると、クロニクルは意外そうに返してきた。

『もうオレがしゃべることには驚かないのか？他にもベヒモスの事とか、あの女の子たちの事とか……』
「ん～、後で聞くよ。お前は全部知ってるんだろ？だったら焦ることはないさ」

ていうか、女の子たちって誰の事だ？あの光ってたのは遠すぎてよく分からなかったし……

『チェ、つまらねぇな……』
「なんか言ったか？」
『イエイエ、ナニモイッテナイデスヨ～？』

……こいつ、意外と性格悪いな……

「まぁ、まずはあいつを何としないとな……」

オレはそう言ってベヒモスを見た。あれをこのまま放っておいたら、それこそ町が丸ごと消滅しちまう！

問題は、どうやって倒すかだ……前の時は、白騎士に変身したレナードが一刀両断してなんとかなったけど、今回はオレ一人……とても個人で勝てる相手じゃない……

「せめて、オレも変身できたらな……ん？」

そうつぶやいた瞬間、オレはベヒモスに向かっていく一団を見つけた。

一人はピンク色の髪をポニーテールにした女性、一人は赤いドレスを着た女の子、最後は手甲を付けた大柄な男だ……

何をする気だ？……まさか！？

ドガアアアアアアアアアアンッ！！！

次の瞬間、予感は確信へと変わった……

なんと三人は、各々の武器を使ってベヒモスの周りにいるグノーム達と戦闘を始めたのだ！

「……ったく、なにやってんだ！大元のベヒモスを倒さないと、グノームはいくらでも出てくるってのに……！」

『おいおい相棒、この世界は相棒のいた世界とは違う世界なんだぜ？あいつの生態や戦い方なんて、誰も知らねえよ』

「そう、だよな……でも！」

……オレは知ってる……！

その瞬間、オレは地面に降りてベヒモスの方に駆け出していた！

オレには、まだ出来ることがある！

……まぁ、空を飛ぶなんて芸当はまだ無理だけどな……

だが、その時……

――――ドクン――――

「なっ……」

心臓が跳ね上がるような感覚に襲われて、オレは足を止めた……

いや、まるで足を縫い付けられたみたいに動かなくなった……

――――力を求めるか？――――

頭の中に声が響く、これは一体……

――――この世界で、マスターがいない……ならば、新たなマスターを探すのみ――――

マスター？何のことだ？一体何が起こって……

――――マスターと共に戦い抜いた戦士よ！お前に騎士の資格があるかどうか、証明して見せよ！――――

ちょ、まっ……

反論する暇もなく、オレの意識は暗闇の中に沈んだ……

～～～？～～～

「こっのぉ！邪魔すんじゃねぇ！」

あたしは相棒のハンマー型デバイス『グラーフアイゼン』で、茶色い魚もどきを吹っ飛ばしながら叫んだ！吹っ飛ばした奴らはすぐに消えちまったけど……

「チッ！次から次にぞろぞろと！」

すぐに次の奴が、後ろのでっかいのから出てきやがる！これじゃあキリがねぇ！

「なぁ、シグナム！やっぱ後ろの奴たたかねぇとダメだぜこりぁ！」

「分かっている！」

シグナムが珍しく焦ったように言い返してくる。シグナムは剣型デバイス『レヴァンティン』で魚もどきを斬ってくけど、まったく数が減らねーッ！

「これでは、本体へ向かうことができん！」

周囲の魚どもを殴り飛ばしてるザフィーラの声にも、焦りが混じってるのがわかる……っていうか、あいつのまともな声聞いたのいつぶりだ？

「しっかし、これじゃあ本当にジリ貧だ！……ん？」

その時、あたしの視界の端に何か映った……そっちを見てみると、どっから迷い込んだのか、子供が一人で佇んでいた……

でも、そいつはただの子供じゃなかった……

「……なんだ、あいつ……」

そいつからあふれてる蒼い魔力……まるで、誇り高い騎士のようなその魔力に、あたしの中の『何か』が惹きつけられた……

「どうした、ヴィータ……あれは……」

「むっ……？」

シグナムとザフィーラも、魚もどきを斬り払いながらそいつに目を向けて動きを止めた……

胸の奥から、何かがこみ上げてくる……まるで何かに惹きつけられるかのように、あたしたちはその場から動けなくなった。

そしてその瞬間、そいつは目を開いた———。

（つづく）

第二話　ヴォルケンリッター、その名に懸けて！（後書き）

シンナイトを登場させ……られませんでした！ごめんなさい！

いやぁ、小説って難しいですね……皆さんに楽しんでもらえたら、幸いです。

では、次回こそシンナイト登場します！させます！させてみせます！なので楽しみに待っていてください！

感想、お待ちしております！ではまた～♪

第三話　白騎士、覚醒！

「……どこですか、ここは？」

……目を開けてみると、そこは不思議な空間だった……

周りは星空のような風景で、ところどころに遺跡のガレキのようなものがプカプカ浮かんでいる……

オレは今、その中でも結構大きな欠片に立っている……まるで、廃墟になった遺跡みたいだ……

「誰もいない……のか？」

『あらまぁ、どうしたのボクちゃん？迷子かしら～？』

腰の鞘に収まっているクロニクルがおばちゃん口調で話しかけてきた。……うん、こいつがいたな……

「そうだ、お前がいたんだ……でも、全然うれしくないッ！」

心の底からッ！本気でッ！

『ツレナイこと言うなよ相棒～！ボケにはしっかりツッコミを入れるのが相棒ってもんだろ？』

「漫才コンビか！？」

『ナイスツッコミ！』

「しまった！ツッコんじまった！」

……と、こんなことやってる場合じゃなかった……

「ま、それはそれで置いといて……ここはどこだって話だ。クロニクル、分かるか？」
『ああ、分かるぜ』
「即答ッ！？」

聞いてみると、意外なほどあっさり答えが返ってきた！……こいつ、エルドアのおっさん以上に物知りかも……

『ここは試練の空間……シンナイトの中に眠る意思が、自分のマスターにふさわしいかどうかを試す場所さ』
「シンナイトの意思……」

そういえば、そんな話も聞いたな……確かレナードやユウリも、会ったことがあるって言ってたような……

「で？なんでオレ達、そんなところにいるんだ？」

確かにアークは持ってるけど、オレはシンナイトの契約者じゃないから、まったく無縁の場所……のはずだけど……

『さぁな？まぁ、それはオレ達をこっちに引き込んだ『あいつ』に聞けば分かるだろ』

「あいつ？……って、うわッ！？」

シュピンッ！

首をかしげたその瞬間、オレの目の前で突然光がはじけた！オレがとっさに、飛び退くように後ろに跳ぶと、はじけた光はそのまま

光の球になって、ゆっくりとオレ達の前に降りてきた。

「な、なんだぁ！？」

『ほぉら、おいでなすったぜ！』

「？、だれが？」

だが、オレの疑問にクロニクルが答えるより先に光が収まり、その中から人影が出てきた。

『……久しいな、ソード・ホワイトナイト……』

「……あんた、誰だ？」

光の中から出てきた『そいつ』に、オレは思わず聞き返していた。

『そいつ』は、人の形はしているが、人じゃない……白と黒がまじりあって揺らめく姿はまるで、光が無理やり人の形を作ったような姿だった……

ただ一つ、こっちを見つめる鋭い目だけが、あいつに自我があることを示していた。

『……そうか、この姿では初めてだな……私はウィゼル、君たちが『白騎士』と呼ぶモノの意思だ』

「白騎士の……意思ぃっ！？」

それを聞いて、オレは思わず声を上げてしまった！って、ことはこいつか！レナードが白騎士と契約するときに戦ったってやつは！

『それで？オレ達に一体、何の用なんだ？』

『簡単な話だ……ソード、君に私の契約者になってもらいたい……』

「……はい？」

クロニクルの質問に、ウィゼルはあっさりと答えた。でも……

「ちょ、ちょっと待てッ！確か騎士との契約って、前の契約者が死なないとダメなんじゃ……」

こいつが白騎士の意思だっていうなら、絶対無理だ。だってレナード生きてたもん！ピンピンしてるはずだ！今頃はシズナ姫とあま～いラブラブモードにひたっているに違いない！

だけどウィゼルは、ゆっくりとうなずきながらこう告げてきた。

『本来は……な……』

「？、どういう意味だ？」

意味深なその言い方に、オレは首をかしげた。すると、ウィゼルは少し考えるぞぶりを見せると、ゆっくりと説明を始めた。

『まず、私たちシンナイトは一度、マドラスに吸収され一つになったのは知ってるね？私たちにとってあの状態は、君たち人間にとっての『死』と同じ状態になるんだよ……』

まぁ、吸収されて一つになったわけだから、死んだといえばそう

なるのかな？

『そして、マドラスが君に倒されて時空の穴に落ちた時……その時、私たちは新たなシンナイトとしてマドラスから切り離された……つまり、私たちシンナイトの方が『死んだ』ことによって、契約は白紙に戻ってしまったというわけだ……』

「つまり、今は全部のシンナイトに契約者がいない状態ってことか？」

『そういうことになるな……君は、長い間前のマスターたちと旅を続けてきた立派な勇者だ。今の君には、十分に私の契約者になる資格がある……』

「……」

『……どうする、ソード？』

頭に浮かぶのは、変身したレナードたちの事……あの力、怖くないと言えばウソになる……

でも、その力で救える命が、目の前にあるなら……

「……ウィゼル、お前の力を貸してくれ！」

そう言って、オレはウィゼルの手を握り返した。その瞬間、オレ達の体を青い光が包み込んだ……

『いいでしょう……新たなるマスターよ……この力、すべてあなたに捧げましょう！』
「ああ、頼んだぞ！」
オレが笑ってうなずいた瞬間、視界は青い光でいっぱいになった……

〜〜〜？〜〜〜

目を開くと、そこにはさっきの光景が広がっていた……
焼け野原になった大地、建物の上で『グノーム』を量産しているベヒモス、それと戦う三人組……
だけど、その三人組は、なぜかこっちを見ながらポケ〜っとしてる……どうしたんじゃんいな？
『相棒ッ！あいつらの後ろ！』
「ん？……げっ！？」
クロニクルに言われて目を向けると、三人組の背後で数体のグノーム達が攻撃魔法の詠唱を始めていた！いくらなんでも、あれを一度にくらったらまずい！
でも、どうする！？ここからじゃ距離がありすぎて間に合わない！声も、多分届かない……そうだ！
「ウィゼル！ぶっつけ本番だけど、やれるか！？」

『無論、いつでも大丈夫だ！』

頭の中に答えが返ってくると、オレの右腕が輝きだした！

「いくぞぉ！」

パシュゥン！

オレが声を上げて走り出すと右腕に集まっていた光がはじけ飛び、中から白銀のガントレットに包まれたオレの右腕が現れた！これが、白騎士の契約者の証、変身用装備『アーク』だ！

「古の剣を携えし、白き勇者ウィゼルよ……」

起動のカギである短剣をセットしたままのアークを構えて、オレは変身の呪文を詠唱する……頼む、間に合ってくれよ！

「我に力を……」

グノームの詠唱が終わり、魔方陣から攻撃が放たれようとしている……三人組は、そこでようやく後ろの状況に気づいたが、対処するには遅すぎる！

「……変身ッ！！！！」

次の瞬間、オレは地面を蹴って跳び上がった！そして同時に、グ

ノーム達の攻撃魔法が一斉に放たれた！

〜〜〜？〜〜〜

……うかつだった……そうとしか言いようがない……

目の前の少年の異様な雰囲気に飲まれ、背後の魔物たちの動きに気を配れなかった……うかつどころか、これではただの阿呆だ！

突然、こちらに向かって駆け出してきた少年の視線を追って振り返れば、そこにはすでに攻撃を打ち出す直前の魔物の群れ……

ヴィータとザフィーラも、一瞬遅れて気づいたが、このタイミングでは対処できない！

……目の前で魔物たちの攻撃が放たれた瞬間、私は背後で何かが光ったのを感じた……

ドッガアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！！！！！

「ッ……？、な、なに……？」

「あれ？」

「ぬっ……」

鼓膜を震わす爆発音、魔法の衝撃……それは確かに攻撃が放たれた証拠だが、その攻撃は私たちに届いていなかった……

私はゆっくりと顔を上げる……すると、目の前に煙に包まれた『巨大な何か』が立っていた！

「な……ッ！？」

「ッ……」

「なんじゃこりゃあーーーーーーーーーーッ！？」

絶句する私とザフィーラに代わって、ヴィータがあらん限り全力で声を上げた……実際、私もそう叫びたい気分だ……

しかし、どうやら『それ』が私たちを攻撃から守ってくれたらしい……『それ』がゆっくりと振り返ると、姿を包み込んでいた爆煙が吹き飛び、その姿がはっきりと見えた。

『おい、大丈夫か？』

「「「……！」」」

……そこに立っていたのは、五メートルを超える巨大な『人』だった……白銀の鎧と青いマントに身を包み、左手には丸い盾、右手には装飾も美しい剣（つるぎ）が握られている……

その姿は、まるで巨大な聖騎士だった……あまりの美しさに、私

たちは思わず見惚れてしまった……

『おい、どうした？大丈夫か？』

「ッ！あ、ああ……こちらは大丈夫だ……だが、お前は一体……」

『オレか？オレの名前はソード！ソード・ホワイトナイト！でも、この姿の時は……はぁッ！』

白い騎士は自己紹介の途中で、おもむろに手に持った剣を振り向きざまにふるった！

ズッガアアアンッ！！！！

『……白騎士だッ！』

「な……ッ！？」

今度こそ、私は本当に言葉を失った……彼、白騎士の名乗りながらの一撃は、彼の後ろで攻撃準備をしていた小さな魔物たちを一気に消し飛ばしてしまったのだ！

……そう……一撃、たったの一撃で、あの騎士は後ろにいた十数体の魔物たちを倒して見せたのだ……

「す、すげぇ……」

ヴィータが思わず素直な言葉を口にした。だが、私も同意だ……大きさの問題もあるだろうが、あいつが剣をふるった瞬間に生じた魔力衝撃もすさまじい……

その時、白騎士が剣を魔物に向けながら、こっちに視線を向けてきた。

『動けるなら下がっててくれ、あのモンスターはオレが片づける！』

「あ、ああ……」

有無を言わせない口調でそれだけ言うと、白騎士は剣を構えて大元の魔物へと向かって駆け出して行った！

『……ッ！』

あの魔物は、人の言葉を有さない……しかし、それでもその気配が動揺しているのが手に取るように分かった。突然、あんな強敵が現れたのだ、無理もない

『はぁあああああああッ！！！！』

その強敵、白騎士は、大元を守るように立ちはだかる小さな魔物たちを、剣を振るうだけで蹴散らしていく……

圧倒的……そうとしか言いようのないパワーで、白騎士はあっという間に大元の魔物の所に行きついた。

しかし……

……コメットブレイク……

「なに……？」

突然、頭の中に何かの声が響いた気がした……その瞬間、大元の魔物の目の前に魔方陣が展開された！

「ッ！あれは……攻撃魔法か！？」

出現した魔方陣を見て、ザフィーラが声を上げる。奴の魔法のすさまじさは、さっきの戦いで十分に分かっている！

しかし、さらにとんでもないことが起こった！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ……

展開された魔方陣と繋がった次元の奥から、巨大な隕石が姿を見せたのだ！

「なぁッ！？」

「攻撃魔法ってレベルじゃねぇよ！？やべぇ！」

そのあまりの大きさに、私もヴィータも戦慄した。

少なく見積もっても、魔方陣を見上げている白騎士よりも二回りほど巨大だ！

「あんなものが落ちたら、余波だけで結界は壊れ、町は壊滅するぞ！」

「ッ！？ウ、ウソだろ……おい！白騎士ッ！なんとかしてくれぇーーーーーッ！！！！！」

自分達ではどうにもできない……我らヴォルケンリッターの力をもってしても、あの隕石を止めるのは不可能だろう……それが分からないほど、ヴィータも子どもではない……

だからこそ、この場で唯一、その可能性を持つ者に自らの望みを託した……そして、願いを託された白騎士は、自らの剣を構えながら答えた。

『まかせとけーーーッ！』

ゴォオッ！！！！！

「ッ！」

その瞬間、白騎士からすさまじい魔力があふれ出した！

『集え！すべてを砕く雷鳴の歌声！』

そして、彼が剣を天にかざすように持ち上げると、雷のような魔力が刀身に宿り、一瞬で巨大な刃となった！

『帝王降臨ッ！雷ッ！帝ッ！けーーーーーーーーーーんッ！！！！！！！』

ズッガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！！！

白騎士が振り下ろした雷の刃は、扉になっている魔方陣もろとも、大元の魔物を真っ二つに叩き切ったッ！

……一刀両断……まさに、その表現がふさわしい一撃だった……

『ッ！？！？！？！！！？？！！？？？？！！！！』

パリィイイイイインッ！！！！

白騎士が、魔力の刃を消した剣をゆっくりと引き抜くと、魔方陣が音を立てて砕け、その向こうに見えていた巨大隕石も、その姿を消した……

「や……やったぁーーーーーーーーッ！！！！！！」

魔方陣の消滅を見たヴィータが、まるで子供のように飛び上がる。だが、そんな私も態度には出さないが、言い表せぬ昂揚感で心躍った！

しかし、次の瞬間……

キュイイイイイイイ……

『ん？』

突然、耳の奥を刺激するような不快な音が聞こえてきた。私たちも白騎士も、怪訝な表情であたりを見回す……

その時、私の目にとんでもないものが飛び込んできた！それは、今にも爆発しそうなほど膨れ上がった、さきほどの魔物だった！

「ッ！みんな、伏せろッ！」

「ぬっ！」

「うわぁっ！」

……そう叫ぶのが、精いっぱいだった……

『……え？』

ドッガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！！！！！

……白騎士の間の抜けた声を最後に、私の五感は、魔法爆発の音と光に満たされた……

（つづく）

第三話　白騎士、覚醒！（後書き）

ついに白騎士登場！しっかし、戦闘シーンは難しいですね……苦労しました……

白騎士の技の一つ『雷帝剣』ですが、かっこ良かったので今作の白騎士の得意技兼必殺技にしました！かなりアレンジ加えてます！何気に、後半はシグナムの視点の話になりました……どうだったでしょうか？

このお話で、白騎士がかっこよく見えてくれたら幸いです……では、また次回をお楽しみに～♪

エピローグ～夜の終わり、月姫の鼓動～

……時空航行艦『アースラ』……地球以外にいくつもある次元世界を管理する『時空管理局』の艦……

……魔法が存在し、モンスターと戦うこともある世界で活動してる私たちにとって、魔法のない『管理外世界』である地球に、謎のモンスターが現れたのは驚きだった。

……だけど……

「「「「……」」」」

ここ、『アースラ』のブリッジでは、さっきまで私達のいた結界の中の映像がリアルタイムで巨大なスクリーンに映し出されている。

その映像を見て、私、フェイト・テスタロッサを含めたこの場にいる全員が、あまりの出来事に言葉を失った……

「な、なんなんだ……あれは……」

そんな沈黙の中、ようやく私の隣に立つ黒づくめの男の子、クロ

ノ・ハラオウンが声を絞り出した。でも、誰もそれに答えることはできない……

今、スクリーンの中には、さっきまで私たちと戦っていた人たちを守るように立つ、白い騎士の姿が映っていた。

「エ、エイミィ！すぐに解析をお願い！」
「りょ、了解！」

緑色の髪をポニーテールにした女の人、この艦の艦長でもあるリンディ・ハラオウンさんが指示を出すと、すぐに髪の短い女性、エイミィがコンソールを操作し始めた。

モンスターの存在は何とか理解できるとしても、あんな巨人は見たことがない……その時、スクリーンの白い騎士が、剣を構えて小さいモンスターと戦い始めた！

「うわぁ……」
「す、すごいの……」

私の後ろでそれを見ているユーノとなのはがそう呟いた。その気持ちは私にも分かる。

あの白い騎士は、剣の一振りで小さなモンスター達を何匹も一度に吹き飛ばしているんだから……

「ボク達も、もしあの場にいたら巻き込まれてたかもしれないな……」

「そうだねぇ……そう考えるとゾッとするよ……ブルブル……」

ユーノの言葉に、私の使い魔であるアルフがうなずきながら身を震わせた。

……あの時、巨大モンスターがあの辺り一面を追うほどの攻撃を放った瞬間、私たちは『アースラ』に強制転送されて、難を逃れた……

もし、転送が少しでも遅れていたら、私たちはみんな命を落としていたかもしれないほど、すごい攻撃だった……

「ッ！モンスターから、超巨大な魔力反応！測定魔力ランク……SSS＋ッ！？」

「「「「ッ！？」」」」

「なんだと！？」

エイミィさんの報告に、クロノが声を上げた。それを聞いた私たちも、あまりの事態に驚きを隠せない……

「ふぇ？」

……ただ一人、なのはだけは状況がよく分かってないみたいだけど……

「……えっと……なのは、魔力にランクがあるのは知ってるよね？」
「う、うん……」
なのはの隣いるユーノが、魔力の事を簡単に説明してる。
魔力には、F～SSSまでランクがあり、それは純粋な魔力や魔法の強さを示している。私やなのははAAAクラスの魔力を持つ魔道士、これでも人としてはかなり優秀な方なんだけど……
「SSSクラスの魔法となると、もはや天変地異のレベルだ……このままでは、結界どころか海鳴市そのものが消滅してしまう！」
「ッ！そ、そんな！」
クロノの言葉を聞いて、なのはが悲鳴に近い声を上げた。自分の故郷が危ないんだ、無理もないよね……
スクリーンを見ると、モンスターの前に魔方陣が展開されていた。それは異空間にでも繋がっているらしく、そこから覗く謎の空間の奥から、巨大な隕石が迫っていた！
「な、なんだあれはッ！？」
「むちゃくちゃだよッ！こいつはやばいね……」
クロノが声を上げ、アルフもこぶしを強く握りしめる……
でも、それを見た瞬間、なのははブリッジにある転送装置に駆け出した！
「ちょっと待って、なのはッ！」

「ッ！フェイトちゃん！？」

私はあわててなのはの手をつかんで止めた。まさか、なのは……

「はなしてフェイトちゃん！あたしがあれを止めるの！」

「い、いくらなんでも、それは……」

「無理だよなのは！君のスターライトブレイカーでも、あれを止めることは、多分できない！」

「ユーノ君……」

反対側のなのはの手をつかんでいたユーノが断言した。スターライトブレイカーは、なのはの最強砲撃魔法……でも、それでもあの隕石は止められない……

絶対に……

「でも……でもッ！」

それでもじっとしてられないのか、なのははすがるような涙目で私とユーノを見つめる……でも、私たちには、どうすることもできない……

でも、その時……

『まかせとけーーーーッ！！！！』

「「「えッ！？」」」

スクリーンに映る白い騎士が、なぜかそう叫んだ……その瞬間、白い騎士の体から青いオーラが噴き出した！

「な、なにこれ！？魔力ランク……ＥＸ！？測定不能！」

「ＥＸッ！？本当なの！？」

「はい！間違いありません！」

真剣な顔のリンディさんに、エイミィも真剣な表情でうなずく……

ＥＸ……ＳＳＳを超えた、測定不能の領域……人には決して越えられないと言われた魔力限界の壁……

それを、あの白い騎士はあっさりと打ち破った！

『集え！すべてを破壊する雷鳴の歌声！』

白い騎士がそう叫ぶと、彼の剣に雷の魔力が宿り、一振りの大きな剣になった！

「ッ！……きれい……」

それを見て、私は思わずつぶやいていた……

強く、美しく、気高い……そんな白い騎士の姿が、物語の中の王

子様みたいに見えた……

『帝王降臨ッ！雷ッ！帝ッ！けーーーーーーーーーーーーーーんッ！！！！！！！』

ズッガアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！！！！

次の瞬間、白い騎士は雷の剣を振り下ろして、魔方陣ごとモンスターを切り裂いた！

「な…………」

「……う……そ……」

それを見たブリッジのみんなは、今度こそ完全に絶句してしまいました……私も、あまりのすごさに声が出せない……

「や……やったーーーーーーーーッ！！！！」

ただ一人、状況を飲み込めてないなのはだけが、うれしさのあまり声を上げてバンザイした。

色々謎はあるけど……まぁ、町も無事だし、なのはもよろこんでるから、いいかな……

とりあえず一件落着のような雰囲気のブリッジ……でも……

ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！

「ッ！？　どうしたの！？」
「待ってください！……ッ！　モンスターの魔力反応が急速に上昇しています！」
「なんですって！？」

「「「ッ！？」」」

突然鳴り響いたアラームとエイミィの報告に、私たちは顔を見合わせます。スクリーンを見ると、頭から真っ二つにされたモンスターの体が、光で膨れ上がっていました！

白い騎士と謎の襲撃者たちは、周りを見回すばかりで気づいていません

「魔力エネルギー、さらに上昇！　でも、この反応は……」

コンソールを操作していたエイミィが何か言いかける。でも、その瞬間……

ドッガアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！！！！

「きゃあッ！」
「ッ！？」
「な、なんだ！？」

すごい爆発音が聞こえたと思ったらスクリーン一面が、真っ白な光に包まれた！

「くっ……状況報告！」
「は、はい！」

リンディ艦長が指示を出すと、エイミィ達があわててコンソールを操作して、何が起こったのかを調べ始めた。

「艦長、おそらくさっきのモンスターが、自身の魔力で魔力爆発したようです！」

「爆発！？結界と町への被害は！？」

「大丈夫です！結界も何とか持ちこたえました！町への被害はありません！」

その報告に、私たちはホッと胸をなでおろした……魔力爆発は、通常とは比較にならないほど強力になることがある、結界内に収まってよかった……

やがてスクリーンを覆っていた光が収まると、中の様子が映し出された。爆発が収まったみたいだ……

様子を見てみると、結界内は一面ただのクレーターになっていた……

「うわぁ……ひどいありさまだね、こりゃ……」

「それだけ、あの爆発の威力がすごかったってことだよ」

アルフとユーノがその状況を見て難しい顔をしている。でもそんな中、私はあることに気づいた。

「……さっきの白い騎士は？」

……クレーターの中には、さっきまでいた白い騎士と襲ってきた人たちが消えていた……

「あっ！」

私のつぶやきを聞いたエイミィがあわててコンソールを叩くと、スクリーンにいろんなデータが浮かんでくる。

「……ダメです、反応ありません……でも、爆発に巻き込まれたような痕跡はないので、おそらく逃げたんだと思います」

「そう、分かったわ……」

エイミィの報告を聞いたリンディ艦長は、そのまま自分の席に座ると、溜息を吐くように呟いた。

「波乱の幕開け……ね……」

「……」

その呟きは、近くにいた私にしか聞こえていないみたいだった……

〜〜〜?〜〜〜

ここは、さっきの場所からかなり離れた場所にある公園……そこで私は、自分の指輪に軽くくちづけしてつぶやく……

「みんなの傷を癒して、クラールヴィント……」

『了解』

指輪型のデバイス『クラールヴィント』は、私の声に答えて魔法を発動してくれた。目の前には、傷だらけで座り込む仲間たち……

「すまないシャマル……助かった……」

「いいのよ、これが私の仕事だもの」

緑色の治癒の光に包まれながら謝るシグナムに、私はにっこりと笑い返す。……本当に、なんでも気負っちゃうのは、うちのリーダーの悪い癖ね……

……あの時、魔物の爆発の瞬間、魔力の本流で結界の一部に隙間ができた。私はとっさに転移魔法を発動して、三人と自分をこの公園に転移させて難を逃れた……

「それにしても、あの白騎士ってなんなのかしら？」
「さぁな……なんか別の名前も名乗ってたけど……忘れた……」
「……実は私もだ……あの白騎士という名前が、あの姿にあまりにも似合いすぎていて、本名が記憶に残っていない……」
「あらら……」

治療が終わって、すっかり元気になったヴィータちゃんとシグナムが答える。……かくいう私も、聞いてたはずなのに白騎士さんの本名、覚えてないわ……ごめんなさい、白騎士さん……

「でもあいつ、ギガすごかったな……おかげで助かったけど……」
「そうね……でも、敵なのか味方なのか……」

あの力、できれば敵に回したくないけど……

「……今の状況では判断材料が少なすぎる……」
「そうだな……とりあえず、今は早く家に帰ろう。主が心配しているやもしれん……」
「そうね……」
「おう！」

とりあえずの結論を出したシグナムの言葉に、あたしとヴィータちゃんはうなずくと、みんな一緒に歩き出す。

優しい主の待つ家へ……

「そういえば、結局蒐集できなかったわね……」

「「「あっ……」」」

私の言葉に、三人がちょっと間の抜けた声を出した。……すっかり忘れちゃってたみたい……

その後、三人はしばらくの間、がっくりと肩を落としたままだった。

〜〜〜?〜〜〜

ドガアアアンッ!!!!

「ひゃっ!」

突然、外からすごい音が聞こえてきて、私――月村すずか――は目を覚ました。

「な、なに?今の音……?」

驚いて飛び起きた私は、部屋をキョロキョロ見回してみる……いつも通りの自分の部屋……

――――キィン――――

「ッ!?」

その時、頭の中に何かが響いた……なに……？

――キィン――

「そっちに……いるの……？」

頭に響く何かは、まるで私を読んでいるように感じた……

私は、パジャマの上にカーデガンをまとうと、頭に響く何かに従って、部屋を出た……

～～～？～～～

――キィン――キィン――――

何かに呼ばれるように外に出た私は、屋敷の中庭方に足を向けた。

頭に響く音も、心なしか強くなってきてる……

「こっち？……きゃッ！」

中庭を覗き込んだ私は、思わず声を上げた。

……そこには、私と同じくらいの男の子が目を回して倒れていた

……

「た、たいへん！だ、大丈夫ですか！？」

男の子に駆け寄って顔を覗き込むと、息をしているのが分かった。

……どうやら、気絶してるだけみたいだ……

私はホッと胸をなでおろすと、じっと男の子を観察してみる。

……髪は金色、着てるのは白と水色の法衣っていう服みたい……

まるで、ゲームのキャラクターみたいな服装だね……

だけど、それ以上に驚いたのは、男の子の近くに刺さっているきれいな剣だった……

「どうして、こんな剣が……」

不思議に思った私は、その剣を手に取ってみようと手を伸ばした

……すると……

『お嬢ちゃん、オレに触るとやけどするぜ？』

「ひゃわっ！？」

突然、剣の柄にはまっていた赤い宝石が光ると、そこから男の人の声が聞こえてきた！

……えっ！？い、今の一体……

『そんな驚くなよお嬢ちゃん～！そんな怯えなくても、オレは人畜無害なただの剣だぜ？』

驚いて後ずさる私に、不思議な剣はちょっと傷ついたようにそう言った。でも……

「……じ、人畜無害な剣って、意味がないんじゃ……」

『……OK、なかなかクールなツッコミをありがとう……』

心なしか、きれいな剣はさらに落ち込んだような声を出した。……これ、私が悪いのかな？

「あ、あの……ごめんなさい……」

『ああ、いやいや！気にすんな！それよりお嬢ちゃん、名前は？』

「すずか……月村すずかです……」

剣さんの質問に、私は素直に答えた。……まぁ、いいよね？悪い人じゃなさそうだし……

『すずかちゃんか……OK、すずかちゃん！実はちょっと頼みがあるんだが……』

「は、はい！なんですか？」

『そこに倒れてるオレの相棒、助けてくれない？』

「え……？」

そう言われて、やっと私は倒れてる男の子の事を思い出した！相棒って、この子の事かな……？

『頼む！代わりに、オレ達が何者なのか、一体なんなのか、ウソ偽りなく教えるからさ！』

「ええっと……」

……倒れてる子はほっとけないし、助けるのは当然だから、そんなお願いされても困っちゃうんだけどな……

「分かりました、とりあえず、誰か家の人を呼んできますね」

『恩に着るぜ、すずかちゃん！』

「いえいえ」

ノリの良い変な剣さんの言葉に少し笑いながら、私は屋敷に戻った……

「……それにしても、頭に響いてきたアレはなんだったんだろう？」

……小さな一つの疑問を、一つだけ残して……

〜〜〜?〜〜〜

『おいおい、落ち着けよ……』

すずかちゃんが屋敷に戻るのを確認すると、オレは相棒の道具袋の中で反応してる『そいつ』に話しかけた。

『お前のわずかな波動を追ってここまで来たのか……確かにお前と相性はバッチリみたいだな……』

あの子がここに来たのは偶然じゃねぇ……それはよく分かってる……

『だがよ、あの子はまだ何も知らない……だから、もうちょっと待ってろ……』

それを聞いて納得したのか、『そいつ』の反応はようやく元に戻った……

『おやすみ……『ルティウス』……いや『月姫』……』

オレはそれだけ言うと、空に浮かぶ満月を見ながら、すずかちゃんが戻ってくるのを待った……

……こうして、長かったこの世界での初めての夜は……終わった

……

（つづく）

エピローグ～夜の終わり、月姫の鼓動～（後書き）

クロニクルーーーーッ！

なぜだ！？なぜクロニクルの方が目立ってしまう！？

キャラが濃いのか！？そんなにキャラ薄いか主人公！？

今回主人公、目を回してるだけでセリフなし！なんてこった……

すずかの家に転がり込むことになったソード、これからどうなることやら……

ちなみに、主人公の名前はソードです。みなさん、覚えてくれてますか……？

それでは、また次回にお会いしましょう！

プロローグ～予言、希望の騎士たち～

「ん……んん……？」

オレは気が付くと、見たこともない白い天井がそこにあった……

「どこだ……ここ……？」

周りを見回すと、どうやらどこかの部屋みたいだ……しかも、バランドール城ほどではないにしても、十分に高級そうな部屋……

たとえるなら、そう……『自由都市グリード』にあったシーザーの館と同じような感じだ。

「なんでオレ、こんなところに……？」

ここにいる理由が全く分からない……とりあえず、昨日の事を思い出してみよう！

ガチャ……

「ん？」

「あっ、気が付いたんですね！よかったぁ……」

そう考えて思い出そうとした瞬間、部屋のドアが開いて、今のオ

レと同じくらいの女の子が入ってきた。

髪は紫色で、おっとりした雰囲気の女の子だ……

そして、そんな女の子が大事そうに抱えているのは……

『よう、相棒！お目覚めかい？』

「クロニクルッ！？」

それは、この世界で突然しゃべりだすようになったオレの愛剣『時空剣クロニクル』だった！なにやってんのあいつ！？

「ちょっ！？あれ！？一体どうなって……！？うぐっ！」

寝ていたベッドからあわてて降りようとした瞬間、全身にとんでもない痛みを感じてオレは膝をついた！な、なんだこれ……！？

「あっ！ダメですよ！まだケガが治ってないんですから！」

『そうだぜ相棒、落ち着けって……ちゃんと説明してやるから』

「……あ、ああ……」

どうにも状況が理解できないけど、今はクロニクルから話を聞いた方がよさそうだ……そう思って、オレが女の子に助け起こされながらベッドに腰かけると、また部屋のドアが開いた。

「あら、どうやら目が覚めたみたいね？」

「お姉ちゃん！」

「お姉ちゃん？」

部屋に入ってきたのは、目の前の女の子を大きくしたようなきれいな女の人だった。その人は、オレを見るとにっこりと笑った。

「はじめまして、この館の主、月村忍と申します。この子は妹のすずか……」

「……ど、どうも……オレはソード、ソード・ホワイトナイトです……」

相手、忍さんの丁寧な自己紹介に、オレも思わずかしこまってしまう……だけど、そんなオレを見て忍さんとすずかはなぜかおかしそうにクスリと笑った。

「知ってますよ、あなたの相棒さんから、大体の事は聞いてますから」

「……なっ！クロニクルッ！？」

『相棒を助けてくれたのに、何も話さないわけにはいかないだろ？』

「うぐっ……」

クロニクルの正論に、オレは何も言えなくなる……そんな時、忍さんの後ろから誰かが現れた……

「忍……」

「あら、恭也……どうしたの？」

「ああ、ちょっと……ん？」

後ろから出てきたのは、短い黒髪の男だった。恭也と呼ばれたその男は、忍さんに何か言いかけてオレに気が付いた。

「やぁ、目が覚めたのか！大丈夫か？」

「あ、はい……とりあえずは……」

「そうか……とにかくよかった！オレは高町恭也、ここにいる忍のクラスメイトで……」

「恋人よ♪」

「えッ！？」

「ぬがぐっ！」

忍さんの突然の発言に、オレはあっけにとられ、恭也さんは思わずこけそうになった！……恋人って、初対面の人間に言うか！？

「お、おい忍！？」

「別に隠すようなことでもないでしょ？」

「そ、それはそうだが……」

悠然とした忍さんに対し、恭也さんは顔尾を赤くしてオロオロしている。……ああ、もう尻に敷かれてるよ、この人……

「うふふ……相変わらず、お姉ちゃんも恭也さんも仲良くていいなぁ……」

「……う～ん……」

近くに立ってるすずかのつぶやきに、オレは忍さんと恭也さんを観察してみる。

……少なくとも、お互いの事を大切に思いあってる……その気持ちは、初対面のオレにも十分伝わってきた……

「……確かに、な……」

「でしょ？」

思わず漏れたオレのつぶやきに、すずかはウィンクしながら答えた。……なんか、かわいい……

『おいおいお二人さん！いちゃつくのは構わねえけどよ、なんか用があるんじゃねぇのか？』

「だ、誰がいちゃついて……いや、まあいい、それよりもギドさん

が呼んでたぞ」

「ギドさんが……？なにかしら？でもちょうどいいわ、彼にも話を聞いてもらいましょう」

忍さんが名案！とばかりに手を叩いて提案した。いやでも、オレケガでまともに動けないんですけど……そういえば、なんでケガしてんだっけ？

『そうだな、相棒にも関係ある話だし……いろいろ話さないといけないしな！』

「でも、ソード君はケガで動けないよ？」

クロニクルの言葉に、すずかが心配そうな表情でオレを見ながら言った。面目ない……

だけど、それを聞いた忍さんは、少し「ん～……」と考えてから、また「よしッ！」と手を打った。

……なんか、嫌な予感がする……

～～～？～～～

「うう……め、面目ない……」

「ケガ人が何を言ってるんだ？これくらい、遠慮なんかするな」

男の子……ソード君は、今恭也さんにおんぶされながら私たちと一緒にリビングに向かっている。

でも、やっぱり男の子なのかな？おんぶされてる顔はすごく恥ずかしそう……

……なんか、ちょっとかわいいと思っちゃった……

「ところでさ、さっき言ってたギドさんって誰なんだ？」

恥ずかしさを紛らわすためか、ソード君は私に視線を送りながら聞いてきた。私は、少し昔を思い出しながら答える。

「……う～ん……一年くらい前からかな？家の近くに倒れてたのを、デート中のお姉ちゃんと恭也さんが助けて、そのまま家に居候してるおじいさんなの」

「……ふ～ん……」

ソード君は、何か興味深かそうに視線を泳がせてる。何か気になることでもあるのかな？

『ま、相棒もすぐに分かるさ』

「「？」」

突然、そんなことを言ったクロニクルさんに、私とソード君は首をかしげる。だけど、クロニクルさんはそれ以上は何も言わなかっ

た……

〜〜〜?〜〜〜

長い廊下を抜けると、そこにはきれいなリビングがあった。そして、そこには三つの人影が……

「あっ！すずかお嬢様、忍お嬢様、恭也様！その子、目が覚めたんですね！」

「ファリンさん、お待たせ」

メイド服を着た、少し薄い紫色の髪の女の人が嬉しそうにこっちを見る。どうやら、ファリンという名前らしい……

「こらファリン、お客様の前なのだから、もう少し落ち着きなさい」

「あっ！ごめんなさい、ノエルお姉さま」

その後ろにいる、ファリンさんと同じメイド服だが、少し背の高い女の人が呆れたような静かな口調でいさなめる。こっちの人はノエルさんか……お姉さまってことは、ファリンさんと姉妹なのか？

ノエルさんは、ファリンさんに視線を送ると、オレに向かって深々と頭を下げた。

「申し遅れました、ソード様……わたくし、この月村家のメイド長を務めております。ノエル・K・エーアリヒカイトと申します」

「同じく、月村家のメイドを務める。ファリン・K・エーアリヒカイトです。よろしくお願いします」

「よ、よろしく……」

二人のメイドに、オレもソファにおろしてもらいながら返事を返す。でも、名乗る前に向こうがこっちの名前を知ってるのは、なんか妙な感じだ……

「ようやくお目覚めか……白騎士の契約者よ……」

「ッ！？」

突然かけられたその言葉に、オレは驚いて振り向いた！

そこにいたのは、このリビングで待っていた最後の一人……長いヒゲを蓄えた優しそうな瞳のおじいさんだった……

……でも、なんで白騎士の事を……

「……まさか……」

オレは一つの可能性を浮かべて、すずかに抱かれてるクロニクルにじと～っと視線を向けた。

『……相棒、言っとくけどオレから話はしてないぜ？』

「……だったら、なんで……！？」

「落ち着け、まずはそれから話そう……」

「……」

おじいさんにそう言われたオレは、何とか落ち着きを取り戻すと、ソファに座りなおした。

すずかはオレの隣に、忍さんと恭也さんも、各々の場所に座る。

おじいさんはオレの正面、ノエルさんとファリンさんはそれぞれ忍さんのとすずかの後ろに立った。

「では、話を始めようか……ワシの名はギド、ギド・カンタラベ……お前さんの持つ『シンナイト』と『アーク』を作った者じゃ……」

「ッ！？シンナイトを作った……？」

それを聞いたオレは、少し混乱したてしまった。ちょっと待て……

……シンナイトって、作られたのは確か数千年以上前のはず……それを作った人ってことは……

「まさか、エルドアと同じ……」

「そっちではそう名乗っていたか……そう、ワシはエルダス、お前らがエルドアと呼ぶ男と同じ、ドグマの時代の人間だ……」

「……」

あまりに衝撃的なその言葉に、オレは開いた口がふさがらなかった……隣では、オレを見たすずかがクスクス笑ってるが、それどころじゃない！

「ちょっと待てくれ！その話が本当として……どうしてドグマの時代の人間であるあんたが、この世界にいるんだ！？」

ここは、ドグマの時代からはるか未来（だと思う）……しかも別世界だ！

オレが叫ぶように聞くと、ギドさんは少し考えるような仕草をすると、腰をソファに深く落として話し出した。

〜〜〜？〜〜〜

「それについてはまず……ドグマの時代での予言から話さなくてはならない……」

「……」

目の前に座る少年は、じっとワシの事を見つめてくる。ワシもその瞳を見つめ返す……

この少年を……見極めるために……

「ドグマの時代には、予言者と呼ばれる魔術師が存在し、それが時折未来を予言する……」

「ああ、知ってるよ……確かエルドアも、その予言に導かれてオレ達の時代に来たんだ……」

少年、ソードは何かを思い出すようにうなずく……

「そう……その予言で、ワシらは倒されたイシュレニアの皇帝、マドラスが未来で復活し、アスヴァーンの女王ミューレアスの生まれ変わりと対決する……というものじゃったが……」

「……だった？」

少年は、ワシの言葉に隠された不審な部分に気づき、問いかけてきた。

「そう、『だった』じゃ……この予言には、続きがあった……」

「なんだって！？」

それを聞いて、少年は声を上げた。すずかや忍、恭也は何も言わずに聞いている。

「予言の続きは……マドラスは未来でも倒されず、この世界とは別の世界に現れ、暴虐限りをつくし、やがて世界を破滅させる……というものだった。しかし、最後の希望も予言には残されておった……」

「……最後の希望？」

希望……その言葉を聞いて、少年の瞳に何か光が宿ったような気がした……

「うむ……白き騎士の戦友、時と世界を超え、新たな騎士たちと共に、暴虐の皇帝を打ち倒す……これが予言だ……」

「白き騎士の戦友……」

『まさに、相棒の事だ！』

そこで、初めてクロニクルが声を発した。だが、少年はその言葉に目を丸くした。

「……オレ！？」

『そうさ、白騎士だったレナードの戦友で、時と世界を超えてこの世界に来た……まさにピッタリの状況じゃねえか！』

「……確かに、そうだけど……」

まだ実感がわかないのか、少年は視線をさまよわせている。

「……話の続きだ、その予言を偶然聞いたワシは、その結末を見届けるためにエルダスと同じ禁呪を使って、同じ時代へと赴こうとした……だが、それはかなわなかった……」

「？、どうして……」

「……失敗しちゃったんだって……」

「えっ！？」

そこで言葉を続けたのは、少年の隣に座るすずかだった。その話を聞いて、少年は驚いたように声を上げる。

「……そう、ワシは禁呪に失敗し、時空の穴に飲み込まれた……そこで、ワシは対マドラスに用意していた魔法剣を無くしてしまい、気が付いたらこの世界にいた……」

『……で、その魔法剣ってのがオレ様ってわけだ！』

「「えっ！？」」

付け加えられたクロニクルの言葉に、少年と一緒にすずかまで驚いた声を上げた。そういえば、これは忍たちにしか話してなかったか……

「そう……クロニクルは、ワシがドグマの時代の知識を詰め込み、シンナイトの技術を応用して作った。いわばシンナイトの武器バージョンなのだ……」

「武器バージョンのシンナイト……？」

『おう！相棒が魔法を使うなら、それをフォローしたり、シンナイトに変身した時の力の制御、魔力による肉体強化の補助なんかが、オレ様の役目だな！……あと、無知な相棒の道案内も！』

「最後のは余計だろ！つうか、そういうこと知ってたなら先に言えよ！」

『いやいや、話せるような状況じゃなかっただろ！？』

少年の言葉に、クロニクルがツッコむように言い返す……まるで長い時を共に過ごした戦友のようだ……

「大体、元からしゃべれるなら、どうして向こうの世界でしゃべらなかったんだよ！？」

『時空の穴に放り出されたときに、機能がマヒしちまったんだよ！マドラスと一緒に相棒が時空の穴に引き込まれた衝撃で、ようやく直ったんだ！』

「まぁまぁ、二人とも……ケンカはダメだよ？」

言い争いを続ける二人（一人と一本？）を、すずかが間に入って止めた。やれやれ……

「……話を続けてもいいか？」

「「『どうぞ』」」

少年、すずか、クロニクルが同時に言った。なんだか、とてもいいチームに見えた……

「では……ワシも当初は目的をあきらめて、この世界で生きていくことを考えた……しかし、そんな時にこの世界に異常が起こった……」

「異常……？」

その言葉に、少年はすずかと目を合わせた。

「……さよう、君も知っているはずだ……わしらの世界にいたモンスターが、この世界に現れるようになった……」

「ッ！？」

さすがにこのセリフは予想外だったらしい……少年は息を飲んだ。

「幸い、今までは『ジャイアントビー』や『コグモ』などの小型モンスターしか確認されていない……御神流剣術の使い手である恭也君と、戦闘能力の高いノエルさんたちのおかげで、何とかしのいでこれたのだが……この現象を見て、私は確信した！この世界こそ、予言にあったマドラスの復活する世界だと！」

「マドラスが……復活だってッ！？」

……少年は分かりやすいくらいに戦慄した……無理もない、実際に対峙した事のある彼だからこそ分かるのだろう……

……あの男の恐ろしいまでの邪悪な力と……執念を……

「そ、そんなにすごいの？その、マドラスって……」

「……ああ、自分を復活させてくれた部下をためらいもなく殺し、禍々しいほど邪悪な力で世界を征服しようとした……正真正銘、最悪の敵だ……」

「「「……ッ！」」」

マドラスの事を語る少年の言葉に、質問したすずかはもちろん、恭也君やノエルさんも動揺している……

「……ソード君……マドラスを倒すには、シンナイトの力が不可欠だ。すべてのシンナイトの力を終結させなければ、この世界は終幕を迎える……」

「……」

今まで以上に真剣な少年の瞳……その奥には、確かに闘志が見えた……

間違いない……この少年なら、きっとあの暴君を倒すことができる！

そう確信したワシは、少年の瞳をじっと見つめながら言った。

「すでに『白騎士』の契約者である君に頼みたい……ワシらと協力して、希望の予言を実現させてほしい！」

「……ッ！」

ワシの言葉に少年は驚いたように息をのんだ。周りを見ると、すずかも忍も、恭也君も……みなが少年の答えを待っている。

「……」

少年は、少しの間、目を閉じて考えた後、しっかりとした表情でうなずいた！

「……分かった！オレも『白騎士』として、この世界でみんなと一緒に戦う！そんで、あのいけ好かない最悪の暴君を、今度こそ叩きのめす！」

「ソード君……」

「元の世界の、仲間のためにもな！」

「うん！ありがとう！」

すずかが嬉しそうに笑いかける。恭也君も忍も、口には出さないが強力な味方の登場に嬉しそうな表情をしている。

「決まったな……では、改めて自己紹介だ！オレは御神流の高町恭也だ。一緒に前線で戦うことになる、これからよろしくな」

「私は月村忍、この館の主であり、あなた達の衣食住のお世話と、武器やシンナイトのメンテナンスなんかのバックアップをするわ、よろしくね！」

「月村家メイド長、ノエル・K・エーアリヒカイトです。前線での援護などをさせていただきます……よろしくお願いします」

「同じく、月村家メイドのファリン・K・エーアリヒカイトです！前線で戦う皆さんを射撃で援護します！背中の守りは、まかせてください！」

「ギド・カンタラベ……忍と共に、シンナイトのメンテナンスやバージョンアップを担当しよう……よろしく頼む……」

「私は月村すずか、えっと、戦ったりはできないけど、精いっぱい応援するから……よろしくね、ソード君！」

「ああ！オレはソード・ホワイトナイト！元バランドール王国の騎士で、白騎士の契約者だ！これからよろしくな、みんな！」

リビングに集まった面々は、それぞれ自己紹介を済ませ、笑顔を交わし合った……

……これが、この世界にとっての希望……未来を切り開く、騎士たちの誕生だった……

（つづく）

プロローグ～予言、希望の騎士たち～（後書き）

はい、というわけでソードは月村家にお邪魔することになりました！

今回からは章仕立てで行こうと思います！

感想、どしどし送ってください！待ってまーす！

第一話　お泊り会、予期せぬ再会！

「お泊り会……？」

その日、ひょんなことから耳に入ってきた一言に、あたしは思わず聞き返していた。

「そうなんよ～、なんでもすずかちゃんのお家に、新しく住む人がいるらしくてな？その人の歓迎会を兼ねて、みんなですずかちゃんの家にお泊りせえへん？って話なんやけどな～」

そこにいたのは、車いすに乗ったショートカットの髪の女の子……あたしの大好きな主、八神はやてだ。

車いすに乗って、すんげぇテキパキと夕飯を作りながら、はやては嬉しそうにその事を話してくれた。

「嬉しそうだね、はやて？」

「ん？まぁな～、初めてのお泊りのお誘いやで？すっごいうれしいわ～」

「そっか！」

嬉しそうなはやての笑顔に、あたしも笑顔を返す。この笑顔を、本気で守りたいって思う……

……闇の書……破壊と死を振りまく呪われた魔道書……

それは、破壊しても無限再生と転生機能を使って、別の主のもとへと転生する……

あたしたちは、そんな闇の書と主を守る守護騎士プログラム……つまり、人間じゃない……

「ところで、みんなはどうや？いっしょに行けそう？」

はやてはそう言いながら、リビングに集まってる全員に目を向けた。はやてはそのお泊り会に、あたしたち全員と行きたいらしく、誰か一人でもいけないなら断るっていう……でも……

「……はい、私は大丈夫です」

ソファで『レヴァンティン』の手入れをしていたピンク髪のおっぱい魔人シグナムが最初にうなずいた。

「私も、特に急ぐ用事はありませんから」

次に、台所ではやての手伝いをしてた短い金髪の女、シャマルがうなずいた。

「我も……特に何かしているわけではありませんから……」

今度は、リビングの床に寝そべってた青い犬、ザフィーラがそう答える。……確かにこいつ、いつも犬モードだから、散歩くらいしかしてねぇな……

「ヴィータはどうや？」

「え？」

そう言って、はやてはあたしに笑顔で聞いてきた。

……はやては、今の闇の書の主だ……

……でも、はやては闇の書の完成を考えず、あたしたちを家族として迎えてくれた……

……あったかい家……あったかいごはん……そんな優しい時を、はやてはあたしたちにくれた……

……だから……

「もちろんＯＫ！みんなで行こうぜ！」

「よっしゃ！そんなら決まりやな！」

「おう！」

全員でのお出かけが決まって、はやては一層嬉しそうな笑顔を向けてくれた。

この笑顔を、今の生活を守りたい……生まれて初めて、主の命令ではなく、自分の意思でそう思えた……

それもこれも、全部はやてのおかげだ……だから、はやての全部を守るために……

……あたしは……あたし達ヴォルケンリッターは戦うんだ！

～～～？～～～

「よかった！はやてちゃん、家族みんなで来れるって！」

「そっか！にぎやかになりそうだな！」

「うん！なのはちゃんとフェイトちゃんが用事で来れないのは残念だけど……アリサちゃんも来るから、きっと楽しくなるよ！」

ついさっきまで使っていた電話の受話器を置いて、すずかは嬉しそうに笑いながらピースをした。

なのは、フェイト、アリサっていうのは、どうやらすずかと仲の良い友達らしい……今日は、その内の二人が用事で不参加……

ちなみに、なのはっていうのは恭也さんの妹らしい……でも、ど

うして来れないのか、それは恭也さんにも分からないとか……なんでだ？

「それにしても別に居候なんだから、パーティーなんていいのに……」

「ダメだよ！居候でも、ソード君は大切な家族になったんだから！お祝いはしなくちゃ！」

「そっか……ありがと」

「うん！」

そんな会話を交わしながら、オレはすずかと一緒に月村家の廊下を歩き出した。

……オレがこの月村家についてから三日が経った……この世界について聞かされたことは二つ。

一つ、この地球という世界では、魔法が存在しないのが一般的であり、屋敷の外で剣を持ち歩くことも『ホウリツ』というものに引っかかるからダメらしい……

そして二つ目は、この世界でもオレ達の世界の魔法が使えるということだ……

そして、その結果……

「うふふ……それじゃあソード君、ご教授お願いします！」

「いいけど……オレも専門じゃないから、詳しくは教えられないぞ？」

「うん！大丈夫だよ！」

すずかは元気良くうなずくと、オレと一緒に裏庭に出た。

……オレ達の世界には『精霊魔法』と『神聖魔法』の二種類の魔法があり、魔法は精霊や天使たちの力を借りて発現していた。

そしてこの世界には、オレ達の世界と同じように精霊や天使の力が存在している。だから、やり方を覚えれば魔法を扱うことができる……

「よし！そんじゃあ始めますか！」

「はい、よろしくお願いします！」

オレが肩を回しながら言うと、すずかも向かい側に立って頭を下げてきた。

この家でのオレの役目……それは、すずかを守り、魔法を教えるボディーガード兼教育係だ。

いくら前線に出ないといっても、関わり合いになる以上は多少なりとも護身術を身につけておいた方がいい……というのが、忍さんの説だ。

この世界でオレ達の魔法が使えるとは信じられなかったので最初は渋ったが……忍さんはギドに習った神聖魔法でオレのケガを治療してそれを証明してくれた。

そのおかげで、オレはここに来た翌日には動けるようになった。

魔法も剣術も独学のオレが教えるのもなんだと思ったが、『実際に戦いを経験したことのある人の方が、的確に色々なことを教えることができるでしょ？』と言われ、ついに昨日、折れた……

「それじゃあ初めは……簡単な模擬戦闘からいきますか！どんな方法でもいいから、かかってきな！」

「はい！」

こうして、オレ達の朝の訓練は開始された……

～～～?～～～

「ふふ、やってるわね……」

私は、窓から見える裏庭で訓練を始めた二人を見ながらつぶやいた。部屋には、私のほかにギドさんがいて、外の様子を見てる。

「ふむ、あの少年は独学で魔法をマスターした魔法剣士らしいから少し不安じゃったが……いやはや、なかなかうまく教えるもんじゃ……」

「そう、よかった……でも、本気なの？すずかを前線に出すって……」

私は、少し眉をひそめてギドさんに聞いた。

ソードに頼んで、すずかに訓練をさせている理由……それは、ギドさんの目の前に置かれている五つの『アーク』内の一つが原因だった。

そこには、幻想的な光を不定期に発している美しい弓があった……

「……仕方あるまい……あの子は選ばれたのじゃ、五体の騎士の力を合わせなければならない以上、いずれは前線に出ることになる……」

「……そうね……」

そう、すべてはこの世界を守るため……すずかには強くなっても

らわなくちゃいけない……

「それに、他の『アーク』の契約者も早急に探さなければならない……モンスターの出現する頻度も増えている以上、あまり時間はない……」

「……ええ、分かってる……」

残る三つの『アーク』には、いまだに契約者のめどが立っていない……できれば、早いうちに残りの契約者をそろえて、こちらの布陣を整えたいところだけど……

「『シンナイト』は、それ自身が自分のマスターを選ぶ……これば かりはどうしようもない……」

「分かってる……それじゃあ『アレ』はどうなってるの？完成しそう？」

「あれか……」

私の質問に、ギドさんはあごヒゲを手で撫でながら、部屋の隅に置いてある机に視線を向けた。

……そこには、一本の小太刀が置かれていた……

普通の小太刀よりも一回り大きく、装飾も施されたその小太刀は、まるで騎士の剣のような雰囲気を持っている……

……私たちの奥の手、第六のシンナイトと、その『アーク』だ……

「オリジナルのシンナイトが戻ってきたからな……近いうちに完成するじゃろう……」

「そう、できるだけ急いでね……」

「……分かった……」

ギドさんはそう答えると、すぐに机に向かって何やらいじりだした。

私は、そのまま中庭に視線を戻した。すずかが氷の魔法を操り、ソード君を驚かせているのが見えた……

あ、ソード君が氷漬けになったわ……

「あらあら……がんばってね、二人とも……」

この世界の未来を背負う二人の姿を見ながら、私は小さくつぶやいた……

〜〜〜?〜〜〜

「す、すずか……お前、魔法使えたんだな……」

月村家のテラスで毛布にくるまり、あったか～い紅茶で暖を取りながら、オレは隣で同じく紅茶を飲んでるすずかに恨みがましい視線を送った。

「うん、ギドさんにちょっと習ってたから……でも、こうして実戦に近い形で使ったことなかったから……」

「手加減きかなかった……と？」

「……ごめんなさい……」

オレの視線に耐えきれなくなったのか、すずかはしょぼんと肩を落としながら謝ってきた。

さっきの戦闘訓練中、突然追い詰められたすずかに氷の魔法『ブリザード』をぶっ放された……魔法が使えるとは思ってなかったオレは、攻撃を避け損ねて氷漬けになったのだ……

「まぁ、いいけどさ……実戦で味方にこれやったらとんでもないことになるから、これからは気をつけろよ……へっくしょん！」

「あっ！ごめんね！このままじゃ風邪ひいちゃう……もう少し毛布を……」

『いやいや相棒、ここはすずかちゃんのひと肌で温めてもらうのが一番だろ！』

「はっ！？／／／」
「えっ！？／／／」

クロニクルの一言に、オレ達は声を上げた。……こいつ、なんつうことを……

『いやぁ、役得だねぇ！うらやましいぜあいぼ……相棒？なんでそんな怖い顔して……頭から煙のように水蒸気ぃっ！？』

「……クロニクル、近くに底なし沼があるって、知ってるか……？」

『……恥ずかしさのあまり暴走してらっしゃるッ！？わ、悪かった！とにかく話し合おうか、相棒！』

「クロニクル君……少しお仕置きだね♪」

『すずかちゃん！？笑顔でなにとんでもないこと言ってんの！？それはお仕置き通り越して処刑だよ！？』

クロニクルが何かわめきたてるが、オレ達は聞く耳持たない……

さぁ、お仕置きだべぇ～……

『ちょっ！待って！誰か助け……ご、ごめんなさーーーーーーーーーいッ！！！！！ゆるしてぇーーーーーーーッ！！！！』

……その後、必死に謝り倒すクロニクルの態度を見て、とりあえず底なし沼に放り込む刑は見送ってやった……

でも、今度やったら躊躇なく放り込んでやる！

〜〜〜?〜〜〜

その日の夕方……オレはすずか達と一緒にこれからやってくるお客さんを待って玄関の近くにいた。玄関にいるメンバーは、オレ、すずか、ファリンさんの三人だ……

『ふぅ……口は災いのもとって言葉の意味を、今日は身をもって知ったぜ……』

「アホなこと言うからだろ……今度あんな恥ずかしいこと言ってみろ、叩き折ってやるからな」

『そんなこと言って、相棒も一瞬くらい期待したんじゃ……』

「ファリンさーん、金づちお願いしまーす」

「はーい♪」

『調子のってすいませんでしたぁッ！』

速攻で謝るクロニクル……こいつは反省って言葉をどこに忘れてきたんだろう？

その時、扉の外で車が止まる音が聞こえた……

「はいはい二人とも～、お客様が到着しましたから、おしゃべりはそこまでですよ～♪」

「『は～い』」

ファリンさんが口元に指を当てて『静かに』のポーズをとりながら言った。性格が子供っぽいせいか、妙に様になっている……

バァンッ！

その時、玄関の扉がすごい勢いで開き、一人の少女が入ってきた！

「すずか！遊びに来たわよ！」

「いらっしゃい、アリサちゃん！」

入ってきたのは、金色の長い髪を左右で小さく結んだ元気な少女だった。すずかは、その少女と手を合わせて笑いながら挨拶している。

なんか、すずかとはかなりタイプが違うように見えるけど……いやでも、むこうの世界でも活発なユウリと物静かなミウが仲良くし

てたな……案外、こういうタイプ同士って気が合うのか？

オレがそんなことを考えていると、すずかと笑いながら挨拶をしてたアリサと呼ばれた少女が、オレに気付いて視線を向けてきた。

「ふ～ん……あんたがすずかの言ってた新しい居候ね……」

「あ、ああ……名前はソード、ソード・ホワイトナイトだ。よろしくな」

自己紹介して手を差し出すと、少女はにっこりと笑って答えた。

「へぇ、少しは礼儀が分かってるじゃない、気に入ったわ！私はアリサ・バニングス、すずかの親友よ！これからよろしくね！」

「ああ、よろしく！」

オレ達は笑い合いながら握手を交わした。クロニクルは、しゃべれることを知られるわけにはいかないので、お口にチャックの状態だ。

……それにしても、こいつは結構さっぱりした性格みたいだな……

握手をしながらアリサの目を見ると、なかなかに強い意思の光が灯っているのが分かった。傲慢な口調も嫌味に聞こえないのは、彼女のこの人柄だろか……

性格といい、この瞳の強さといい、好感の持てる相手だ。

「それじゃあアリサちゃん、先にリビングに行っててくれる？私は

もう一人のお友達を待たなきゃいけないから……」

「ああ、例の車いすの子ね？そんな顔しなくても、あたしは気にしないわよ！」

友達を案内できないことが心苦しいのか、すずかはアリサに『ごめんね』と手を合わせてる。しかし、当のアリサは気にせず、歩き出そうとした。

その時……

ピンポーン♪

「おっ！」

「あっ、来たみたいだよ！」

「は～い♪」

家のチャイムが鳴って、オレとすずかが顔を見合わせる。すると、なぜかアリサが足を止めて、オレの隣に戻ってきた。

「？、どうしたんだ？」

「別に……ちょうど良いタイミングだし、一緒にあいさつしとこうと思っただけよ」

「そっか」
「うふふ……」

そうしてオレがうなずくと、すずかも嬉しそうに笑った。インターホンに出たファリンさんが相手を確認して、門を開けた。

そして少し経つと、再び玄関が開き、そこから車いすに乗った少女が入ってきた。

「いらっしゃい、はやてちゃん！」
「すずかちゃん、お招きしてもろうてありがとうな～！」

車いすの少女（はやてという名前らしい）は、すずかと笑顔であいさつを交わす。すると、その後ろから女性二人と少女が一人、そして犬一匹がゾロゾロ入ってきた。

「こんばんわ、シグナムといいます……」
「ヴィ、ヴィータです……よろしく……」
「私はシャマル、お招きいただきありがとうございます」
『……』
「みんなもいらっしゃい！どうぞゆっくりしていってくださいね」

三人と一匹があいさつすると、すずかは笑顔で答えた。

……だが、オレは笑顔になれなかった……そこにいたのは、オレも見覚えがある面々……

「あたしはアリサ・バニングス、すずかの友達よ！アリサでいいわ」
「あたしは八神はやてっていいます。よろしくなアリサちゃん」
「うん！」
そんなオレに気づかず、アリサとはやてが笑顔で握手を交わしている。その時、近くにいたピンク髪の女の人……シグナムとオレの視線がぶつかった。
「……ッ！」
「……」
向こうもオレに気づいたのか、口元をひくつかせている……オレも同じ気持ちだ……
……なんせ、ここには何も知らないアリサがいる……はやてはどうか分からないが、すずかから『彼女たちを巻き込みたくない』と懇願されている以上、下手に動くことができない……
……どうしよう……
だが、その時……とんでもないことが起こった！

『あーーーッ！お前らこの前の突撃トリオじゃねぇか！なんでこんなところにいやが……る……』

……オレの腰に刺さっていたクロニクルが、シグナム達を見つけるとすごい勢いで騒ぎ立てた……

……止める暇も、なかった……

……シ～ン……

……一瞬、その場の空気が凍りついた……

……そして……

「「け、剣がしゃべったーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ！？」」

『しまったーーーーーーーーーーーーーーーッ！！！！！』

最初に声を上げたのは、こういうことに耐性のないアリサとはやてだった……つづいて、クロニクルがまた叫び声を上げる……

……クロニクル、お前ってやつぁは……

「……たははは……」

「あ、あはははは……」

ギャアギャアと騒がしくなる玄関で、オレはすずかと顔を見合わせて、一緒に苦笑したのだった……

……本当に、笑うしかなかった……

（つづく）

第一話　お泊り会、予期せぬ再会！（後書き）

アリサ、はやて、ヴォルケンリッターズが月村家に集合！なんかとんでもないことになったけど、これからどうなる？

次回、事態を知ったアリサとはやて達の決断とは？

次回！『もう一つの魔法、騎士と魔法剣と御神流！』

お楽しみに！

第二話　もう一つの魔法、騎士と魔法剣と御神流！

「あらら……バレちゃったのね……？」

月村家のリビングには、パーティー用に装飾された雰囲気とは似つかない不穏な空気が漂っていた……

その理由は、招待された面々にオレ達の事がバレてしまったせいだ。そのせいで、メンバーの間の空気がギスギスし始めている……

「すいません……このバカ剣のせいで……」

『あいたた、相棒！オレの体はそっちには曲がらないぞ☆って、ごめんなさい折れる折れるマジで折れる～～～～～～～ッ！！！！』

ため息をつく忍さんに謝りながら、とりあえず反省の色のないバカ剣を限界まで折り曲げる……すでに柄と刃の部分がくっつきそうだが、そんなこと知ったことじゃない！

ソファに目を向けると、ギドさんが頭を抱えている。

「……どこで設定間違えたんじゃろうか……？」

……うん、ギドさん……オレもそれは知りたいわ……

「まぁ、いいわ……知っちゃった以上は仕方ないものね……すずか、いいわね？」

「うん……」

「……う～……」

すずかはアリサを見つめながらうなずいた。そのアリサはというと周りの面々とすずかを見ながら唸ってる……どうも今の状況を理解しきれてないらしい……

……さて、このカオスな状況をどうおさめるかね……？

オレが周りの雰囲気を感じながらそう考えだしたとき、不意に『パンパン』と手を打つ音がリビングに響いた。

「はいは～い！とりあえず、みんなにらみ合うんはおしまいや！」

それは、リビングの入り口でずっと静観していたはやてだった。その瞬間、リビングの空気が若干だが和らいだのを感じた。

「主はやて……」

シグナムが何か言おうとするが、はやては笑顔でそれを止めると、車いすを押して

一歩前に出た。

「なんやよぉ分からんけど、こんな暗い雰囲気で話しても良いことなんかないで！もうちょっとお互いに心開こう！」

「はやてよく言ったわ！その通りよ！ちょっとすずか！あたしはあんたが何を隠してるのかは知らないわ！でもね、それがどんな秘密でも受け止めるつもりよ！だって、その……と、友達なんだから！」

「ッ！……アリサちゃん……」

はやての言葉に便乗したアリサの言葉に、すずかは一瞬、驚いた後ににっこりと笑った。それを見て、アリサが真っ赤になる。

「ッ！……まったく、もう少し友達を信用しなさいよ！」（／／／）

「うん、ありがとう！」

赤くなるアリサと笑うすずかのおかげで、この場の雰囲気も少し和んだ。いやぁ、結構かわいらしいところもあるなぁ……

「あははは！そうだな、あんま暗い雰囲気で話しても良いことなんてあるわけないよな！」

「やろ？そういうわけやから、ええっと……誰やっけ？」

ズゴッ！

はやてのあまりのセリフに、オレは思わずその場でずっこけた！
そういえば、はやてには自己紹介してなかったなぁ……

「っいつつ……じ、自己紹介が遅れたな、オレの名前はソード・ホワイトナイト。この家でお世話になってる……にしても、さっきのセリフはないだろ……」

「あははは、ごめんな～！でも、なかなかええリアクションやったで！ナイスやソード君！」

「うれしくないッ！心の底からうれしくないッ！」

「あはははッ！」

オレの反応がよほど面白かったのか、はやては車いすに座ったまま器用におなかを抱えて笑いやがった……

……このやろう、覚えてろ……

「あはははッ！はふぅ……それでやね、そろそろソード君たちの事教えてくれるか？代わりに、あたしもこの本の事、教えるから……」

ようやく笑い終えたはやてが見せたのは、装飾の施された黒い本だった。題名はなんて書いてあるのか分からないけど、その本が魔力を内包してるのは分かる……

「……？何かの魔道書……か？」

前の世界で大賢者ユグラに借りた、過去に干渉する力を持った魔道書『回帰の書』と似たような感じがしたのだ……

だけど、それに反論する奴らがいた。

「あ、主はやて！？さすがにそれは軽率では……」

「そうだよ！あたしはまだ、こいつらを信用してねーよッ！？」

「そうですよ、はやてちゃん！」

反論したのは、シグナム、ヴィータ、シャマルの三人だった……

一緒にいるザフィーラも、何か言いたげにはやてを見つめる……

だが……

「みんな、さっきも言うたやろ？心開いてもらうためには、こっちから心開かなあかん……不安なんも分かるけどな……」

「……で、ですが……」

はっきりと告げるはやての言葉に、シグナムたちも何も言えなくなった。それを見たはやては、苦笑しながら「それにな……」と続ける……

「ここにおる人たちは、みんなの事きっと受け入れてくれる……そ

んな気がするんや……」

「「「「「……」」」」」

そんなはやての言葉に、三人一匹は顔を見合わせる……しばらく沈黙が続いた後、シグナムが前に出て口を開いた。

「……話を、聞かせてほしい……」

オレ、すずか、アリサ、はやては、その言葉に視線を合わせると、誰からともなく微笑んだ……

〜〜〜?〜〜〜

それから、立ったまま話すのもなんだからって言われて、あたしたちはリビングの適当なところに座った。そしたら、メイドさんたちが飲み物を出してくれて、そこから話は始まった……

……正直、信じられないくらいに驚いた……でも、ソードたちの話を聞いて驚いたのは、何もあたしだけじゃなかった……

シグナムたちもはやても、アリサってやつも、みんな信じられないって顔してる。

あたしたちが知らない魔法があることや、目の前にいるソードやギドのじいちゃんが別次元世界の人間だって事にも驚いたけど、一番驚いたのは皇帝マドラスってやつの事だ……

腐った支配者や、邪悪な魔道士なら何人も見てきた……だけど、魂の形までゆがませるほどの邪悪な存在なんて、あたしたちでも見たことがない！

しかも、そんなやつが復活して、世界を破壊しようとしてるなんて……

「……にわかには、信じられんな……」

「そうかもね……でも、実際にモンスターは現れ始めているのは事実よ……」

シグナムの言葉に、すずかの姉ちゃん……忍が答える。それを聞いたはやてとアリサが顔を見合わせる。

「「全然知らなかった……」」

二人の言葉に、あたしたちも同意した。半年も前からあんなモンスターたちがこの街をはい回ってたのかと思うと、ゾッとするぜ……

「そして、それに対抗するための切り札が……白騎士……」

「確かに、あれはすさまじかったもんなぁ……切り札ってのも納得いくぜ……」

シャマルのつぶやきに、あたしは白騎士の力を思い出してうなずく……すげぇなんてもんじゃねぇ、あれは次元が違った……

「正確に言えば白騎士だけじゃない、白騎士を含めた五体の『シンナイト』……それが、オレ達の切り札なんだ」

「あんなとてつもない力を持った騎士が、あと四体も存在するのか！？」

壁に背中を預けてる男、恭也のとんでもない言葉に、思わずシグナムが叫んだ！それに、ソードが笑いながらうなずく。

「まぁな！ちなみにお前たちを助けた白騎士は、オレが変身してたんだぜ！」

『ま、最後にベヒモスの自爆連鎖に巻き込まれて変身解けて、この家の中庭まで吹っ飛ばされたわけだけどな～』

「黙れ、クロニクル」

ソードはそれをバラされて恥ずかしいのか、少し頬を染めながらしゃべる剣……クロニクルを折り曲げ始めた……

……そっか、あの後どこ行ったのかと思ったけど、吹っ飛んでたのかこいつ……

そう思うと、ちょっとおかしくて笑いが込み上げてきた……意外とまぬけだな～！

「ん？……ねぇ、ソード、助けたってどういうこと？」

「シグナムさんたちと知り合いだったの？」

「そういえば、玄関でクロちゃんが叫んどったなぁ……それと関係あるんか？」

「ん？ああ、まぁな」

『ぎゃあああッ！人の体折り曲げながら平然と話をするなッ！何この子達、将来が恐ろしい！』

話を聞いていたアリサ、すずか、はやての三人がソードに質問すると、ソードはクロニクルを折り曲げながらうなずいた。……つうか、いい加減許してやれよ……

……でもこのとき、あたしは自分たちの痛恨の失敗に気づかなかった……

「三日前の夜、この世界にたどり着いたばかりの時にな、街中で誰かと戦ってるこいつらがいてさ……いきなりの事で頭抱えてるうちに、オレ達の世界のモンスター『魔像王ベヒモス』が出てきた……で、無我夢中で白騎士の契約者になって、ピンチになってたあいつらを助けたってわけだ……」

「「へぇ……」」

すずかとアリサはその話に納得したのかうなずいてる。でも、はやてだけは違った……

「……三日前の夜……？」

……？、どうしたんだろ、はやて……三日前に何かあった……あああああああああッ！！！！

あたしたちをじ～っと見つめるはやての視線を感じた瞬間、あたしは自分たちのとんでもない失敗に気づいた！何やってんだ！うっかりにもほどがあんだろ、あたしッ！！！！

それはシグナム達も同じみたいだ……みんな顔をひきつらせてはやてと顔を合わせようとしねぇ……

「なぁ、シャマル……確か三日前の夜って、隣町のスーパーに買い物に行って、夜遅ぉにみんなで帰ってきた日やったよね？」

「……そ、そうでしたっけ……？」

シャマルが血の気をひかせて明後日の方に視線をそらす……バカッ！それじゃあ自白してるのと同じじゃねぇか！！！

案の定、それを見たはやての目が光った！キラーンって！

「……なんかおかしいと思っとったけど、最近、夜にみんなで出かけとるのと、なんか関係あるんか……？」

「「「「ッ！？」」」」

そのはやての一言に、あたしは心臓をわしづかみにされたような気がした……シグナム達も、同じように表情を曇らせる。

……バ、バレてる……！？はやてにバレてる！？

そんなあたしの動揺に気付いたのか、はやては申し訳なさそうな表情で答えた。

「いやなぁ、みんなの主やからか分からへんけど……夜にみんなが出かけとるのは分かっとったんや……けど、みんなそれぞれの用事もあるし、出かけるタイミングもバラバラやったから、無理に聞くのもなぁって悩んどったんよ……」

「なっ……なっ……なあっ！？」

はやての言葉はあたしたちにとっては衝撃的だった！いや、はや

ての気遣いや優しさはうれしいけど……けど、これじゃあ……

「けどな……ソード君の話がほんまなら、みんなはなんか危ないことしとるんちゃうんか？それなら、これ以上ほっとくわけにはいかん！」

「そ、それは……」

何とかしなくちゃいけない……はやてに知られるわけにはいかない……

「ッ！？」

……でも、そんな気持ちははやての目を見た瞬間に打ち砕かれた……

……その眼はあたしたちを心配そうに見つめていた……必死に涙をこらえてるような、そんな表情で……

「ッ……」

そんなはやての顔を見てられなくて、あたしは思わず目をそむけた……

……そうだよ、はやてが知ってて心配しないわけがない……

……今までだって、家で一人きりにして、きっと寂しい思いをしたはずだ……

……なにやってんだよあたしたちは！はやてのためって言いながら、結局はやてに心配かけて、寂しい思いまでさせて……ッ！

自分たちの失態に涙が出てくる……でも、その時……

ぎゅっ……

「あっ……」

唐突にあったかいぬくもりに全身がつつまれた……気が付くと、はやてがあたしをぎゅと抱きしめてくれていた……

「ごめんな……きっとあたしのせいや……あたしのために、いっぱい迷惑かけたんやろ……？」

「ッ！ち、違う！」

それを聞いた瞬間、あたしはどうしようもなくなった……はやてを自分から引きはがすと、その眼を見ながら真剣に叫んだ！

「違うよ、はやてッ！はやては悪くない！これは、あたしたちが勝手に……」

「ヴィータッ！」

あたしが本当のことを言いそうになると、シグナムが怒鳴ってそれを遮った！振り返ると、シグナムもシャマルもザフィーラも、つらそうに目を伏せてる……

分かってる……きっと本当のこと知った時の方が、はやてを傷つける……でも！

「シグナム、もう限界だ！これ以上は隠し通せないだろッ！」

「ッ……だ、だが……」

何か言いかけて、シグナムは顔をそむける……

あたしも何を言って良いのか分からない……ただ、どうしようもない沈黙がリビングにおりた……

その時……

「……何を話してるか知らないけど……ここまで来たら、隠さずに全部話したらどうだ？」

「……なに？」

割り込んできた声……それは、あの間抜けな白騎士、ソードだった……

何のためらいもなく話に入ってきたソードを見て、あたしはなぜか安心していた。それが沈黙を破ってくれたからなのか、それ以外の何かなのかは分からないけど……

シャマルやザフィーラも、表情から緊張はしてるけど敵意はないのが分かる……けど、シグナムだけは違った……

まるで、怒りに燃えるてるみたいな目でソードをぎろりと睨みつけると、すごい勢いで怒鳴った！

「何も知らぬものが口を出すなッ！私たちの事など、何も知らぬお前に……ッ！」

「ちょっ、シグナ……」

はやてがシグナムを止めようとするけど、そのあまりの剣幕に何も言えなくなった……それほど、今のシグナムは感情的になっていた。

いつもの冷静なシグナムらしくない……でも、そうなってる理由は分かってる……

あたしたちの行動が、はやてにバレてた……それだけでも、シグナムは相当動揺していた。

それに加えて、今度ははやてのあの言葉だ……感情的になるなって方が無理だよな……

でもソードは、そんなはやてですら話しかけることができないシグナムの言葉を真正面から受けて、平然と口を開いた。

「確かに、オレはお前たちの事は何も知らない……何の話をしてるのかもさっぱりだ……でもな……」

「ふにゃっ！？」

そう言いながら、ソードははやての頭に手を置いた。はやてがそれに驚いて顔を上げると、その眼には涙が溜まってた……

「これだけは分かる！お前たちが今ここで何かを隠し通して成し遂げたとしても、この子は本当の笑顔にはなれないってことだ！」

「「「「ッ！」」」」

その言葉は、あたしたちの核心を突く言葉だった……

あのことを隠し通して、はぐらかして、やり遂げて……最後にはやては本当に笑ってくれるか？

ケガして、ボロボロになって、そんなあたしたちを見て、はやては笑ってくれるか？

……そんなわけがねぇ……！

はやてが笑ってくれなけりゃ意味がねぇ……なんでこんな簡単なこと忘れてたんだ！？

ここまで来たら、話すことに迷いはない！振り返ると、シャマルも同じように苦笑しながらうなずいた。

シグナムも、目を閉じて息を整えてる。その後ろ姿からは、さっきまでの感情的な気配はない……

……いつもの、冷静なシグナムに戻ったみたいだ……

……だけど……

「……レヴァンティン！」

『了解！』

「「「ッ！？」」」

シグナムは、突然レヴァンティンをセットアップして騎士甲冑の姿になると、剣の切っ先をソードに向けた！

「な、なによこれ！？」

「これ……魔法！？でも、私こんな魔法知らないよ！？」

あたしたちの魔法を知らないアリサやすずかは、突然姿の変わったシグナムに驚きの声を上げる！そんな中、シグナムに剣を向けられたソードは、じっとシグナムの目を見つめ返してる……

「ホワイトナイト……お前の言うことは正しいのかもしれん……だが、それでも私には、お前たちに話すべきかどうか、信用できるのかどうか分からない……だから……」

言いながら剣を引くと、シグナムはその場で高々と叫んだ！

「私と戦え！お前たちに、真実を知るだけの資格があるのかどうか、それを証明して見せてみせろッ！」

「……なるほど、ね……よしっ！」

そう言ったシグナムを見つめ返しながら、ソードは不意に口の端を釣り上げて笑った！

「分かりやすくていいぜ！その勝負、受けたッ！」

『それでこそ相棒！』

言い返すと、ソードはクロニクルを引き抜いてシグナムとにらみ合った！

……どっちも戦う気満々、もう止められねぇな、こりゃ……

「では、我も参加させてもらおうか……」

パァッ！

その時、犬モードだったザフィーラが、突然人間の姿になった！
あいつまで、どうしたんだ……？

「いいのか？ザフィーラ……」

「我とて、無関係ではないからな……」

「……すまん……」

「気にするな……」

ザフィーラと短い会話をすると、シグナムは少し笑って剣を構えた！

「ザ、ザフィーラさんが人になっちゃった……」

「もう、なにがどうなってんのよ！？」

「……もう、むちゃくちゃや……」

すずか、アリサ、はやての三人はこの状況について行けずに唖然としてる……うん、あたしもちょっとついて行けないもんな……

ただ、忍やギドの爺ちゃんなんかの大人たちは、この状況を止める様子もあわてる様子もない……あの辺が何考えてんのかよく分かんねぇな……

「それなら、オレも参加させてもらおう……これで二対二だ」

『おお、恭也か！』

ザフィーラの参加で二対一になった決闘に、いつの間にか近くにきていた恭也が加わって二対二のダッグマッチになった……これには、さすがにソードも驚いたような顔を向けるけど……

「なんだ、オレじゃ不満か？」

「……いや、頼もしい限りだ！よろしく！」

『向こうも強敵だ！油断すんなよ！二人とも！』

「「ああ！」」

二人は短い会話を交わすと、シグナム、ザフィーラの二人とにらみ合った。

こうして、闇の書の真実を賭けて、ソード&恭也ＶＳシグナム&ザフィーラの戦いが始った……

（つづく）

第二話　もう一つの魔法、騎士と魔法剣と御神流！（後書き）

ようやくできた……本当なら、戦いの決着まで書きたかったのですが、ここまでが限界でした……

今回はどうでしたでしょうか？半分以上がヴィータ視点の話でした！なぜこうなったのか、オレ自身よく分かりません……

しかも、タイトル全然関係ねぇ……前回のあとがきをここまで後悔することになるとは……

今回も、皆さんに楽しんでもらえたら幸いです！いただく感想を糧に、これからもがんばりますので、どしどし感想送ってくれるとうれしいです！

ではでは、また次回！

第三話　通じ合う心、炎の獣王襲来！

「はい、では両者とも、武器を構えて！」

シグナムとの勝負を受けた後、さすがに室内で戦うわけにはいかないので、オレ達は中庭に出た。シャマルの声に合わせて、オレとシグナム、恭也とザフィーラが向かい合うようにして構える……

今、周りの風景の色はくすみ、水の音も風の音も聞こえない……

これは、シャマルの使う魔法の一つで、結界魔法というものだ……

……なんでも、結界内と現実世界との時間をずらす魔法で、この結界の中でなら、どんなに暴れても現実世界に被害は出ないらしい……いわば、魔法で作ったバトルフィールドだ。

そんな見たこともない魔法に感心しつつ、オレは目の前の相手……シグナムに笑って見せた。

「……約束は覚えてるよな？オレが勝ったら、はやての知らないことまで一切合切しゃべってもらうぞ？」

「分かっている、私も騎士の端くれ……戦いでの約束をたがえることはしない！」

力強く宣言すると、シグナムは長剣『レヴァンティン』を構えた。

あれは、デバイスという武器……シグナム達『魔導師』が使う武器で、剣でありながら魔法を補助してくれるらしい……今の『クロニクル』と同じようなものだ。

オレも、クロニクルの切っ先を下に向けてゆっくりと構える……見ると、恭也も二本一組の黒い小太刀（名前は知らない）を構えており、ザフィーラも拳を握ってファイティングポーズを取っている……

「「……」」

「「……」」

オレ達四人の間に、緊張した空気が流れる……それを交互に見ていたシャマルが、手を上にあげる……

「……それでは……はじめッ！！！！」

「守護騎士、ヴォルケンリッターが将！烈火の将シグナム、押して参るッ！！！！！」

「白騎士、ソード・ホワイトナイト！いっくぜえええええええええッ！！！！！」

ガキィンッ！！！！

……その手が振り下ろされた瞬間、オレ達は声を上げて、自分の剣をぶつけあった！

～～～？～～～

ガキィンッ！　ギィンッ！　ガガガァッ！

「うわぁ……すごいなぁ……」

目の前の繰り広げられるシグナムとソード君の戦いを見ながら、あたし……八神はやては思わず呟いた……

戦ってる四人以外の人たちは、みんな危ないからっていわれて、リビングの窓から戦いを見とる。

……唯一、審判兼結界役のシャマルだけは、外で二組の戦いを見守っとるけど……

いやでも、ソード君ってすごいなぁ……

シグナムはヴォルケンリッターたちの中でもリーダーのポジションやったはず……そのシグナムと、ソード君は互角に戦っとる！

……見た目はあたしたちと同じ年齢やけど、中身は年上ってだけはあるわ……

「リアルコナ〇君は伊達やないな……」

「あんた、あれを見てよくネタに走れるわね……」

隣で戦いを見とる金髪の女の子……アリサちゃんが、呆れたような表情で言ってきた。その表情にさすがにあたしは苦笑するしかない……

「たはは……ちょっと不謹慎やったかな？」

「本当よ……あんた、あれ止められないの……？」

そう言いながら、アリサちゃんは庭で戦ってる四人に視線を移す

……外での戦いは、さらに激しさを増しとった。

でも……

「それはちょっと無理やな……これは騎士の決闘やし……」

「騎士の決闘？」

「それって、どういう意味よ？」

逆隣りのすずかちゃんの疑問に、アリサちゃんも便乗する。その顔には「納得できない」とはっきり書いてある……

……でもなぁ……

「前にシグナム自身から聞いた話やけどな……シグナム達『騎士』にとって、決闘いうんはな、自分と相手が誇りをかけてぶつかりあい、お互いを理解し合うための神聖な儀式のようなものなんやって……せやから、それを邪魔することは誰にも許されへん……って……」

「……戦って分かり合うって……」

「なんか、熱血ドラマみたいだね」

ちょっと呆れ交じりなアリサちゃんに対してほんわか笑って済ましたすずかちゃん……そんな二人を見ながら、あたしはうなずいた。

「せやね……でも、シグナムはまじめで良い子や……そんなシグナムが、決闘を持ち出したっちゅう事は、なんかソード君に思うところがあったんやろうな……ちょっと素直じゃないところもあるんよ……」

「そうなんだ……」

すずかちゃんは、それについて何か思うところがあるんやろうか、何か複雑な表情でソード君たちに視線を戻す……それを見て、アリサちゃんがこっそりとため息を漏らした。

「……なによ、あたしだけ蚊帳（かや）の外なわけ？……上等じゃない、こうなったら、何が何でも……」

不満そうに何ブツブツつぶやき始めた……まぁでも、悪いことではないやろうなぁ……

そしてあたしは、そんなアリサちゃんの横顔に微笑むと、視線を中庭の四人に向けた。

……シグナムは、ソード君に『自分から』決闘を申し込んだ……その考えは分からんけど、きっとソード君に……何かを感じたんやろうな……

……ソード君、がんばってや……

真剣な表情でシグナムと戦う不思議な男の子を見ながら、あたしは心の中で静かに呟いた……

〜〜〜?〜〜〜

ガガガガガァッ！

「ハァッ！」

「ヌゥンッ！」

オレは武器の二刀流の小太刀『八景（やかげ）』を構えながら、目の前の男から距離を取る！

……強い……ッ！

自分の技を受け切った目の前の男の強さに、オレは内心驚いていた。

……この家に来たときは、妙な雰囲気の犬としか思っていなかった……だが、それは今、俺よりも大きな男に姿を変えて、オレの目の前に立っている……

「なかなかの速さだな……これほどのスピードを、我も見たことが

ない……」

「そりゃどうも……」

よく言う……さっきシグナムという女性が見せた魔法も使わず、生身で御神流の『神速』すら見切ってみせたくせに……

だが……

「悪人の目じゃないな……あんた、澄んだ瞳をしているよ……」

「……ふっ、それは、お前も同じだ……」

「ッ！」

目の前で拳を構える大男は、そう言いながら口の端を楽しそうにつり上げた事にオレは驚いた……なんだ、無愛想な奴かと思ったが、そんな表情もできるんじゃないか……

「ふふふ……面白いな！改めて名乗ろう！オレは御神流小太刀二刀流、高町恭也！」

「……オレは、闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターが一人！盾の守護獣ザフィーラ！」

オレ達はお互いに名乗りあうと、どちらともなく走り出した！

「おおおおおおおおおおおおッ！！！！！！！」
「はあああああああああああああッ！！！！！！！」

そして、オレとザフィーラはお互いの獲物をぶつけあった！

……その時、心が充実感に満たされたのは……きっとオレだけじゃなかっただろう……

～～～？～～～

「はぁッ！！！」
「おっとぉッ！」

私が振るった剣を、目の前の少年、ソードは即座に横に跳んでかわす……

……強い……

目の前で剣を構える異世界の少年の力量に、私は驚きを隠せなかった。

只者ではないことは理解していた……それでも、この強さは予想外だった……

魔法を使っていないとはいえ、剣技で私を互角に渡り合う者がいるとは……

これは、数多の修羅場を乗り越えた者の実力だ……奴の中身の年齢は十六のはず……その年齢でこれほどの力量を身に着けるために、一体どれほどの戦いを経験してきたのだろうか……

「やるな……私と互角に渡り合うとは……」

「まだまだ……お互いに、まだ切り札はきってないでしょ？」

「ふっ……それもそうだ……なッ！」

ガギィンッ！

「なッ！ぐっ……ッ！」

少年の言葉に、私も思わず笑いながらうなずくと、もう一度駆け出し剣を振るった！少年は、そんな私の攻撃に驚きながらも、何とか剣を受け止める……だが、いかんせん体格が違う分、踏ん張りがきかない！

ガギィンッ！

「おうわあッ！！！！」

攻撃に耐えきれずに吹き飛ぶ少年……だが、彼は空中で体勢を立て直すと、うまく着地してダメージを抑えた！

うまい！だが……！

私は着地した少年に一気に近づくと、剣を振り上げて斬りかかる！

「おっと！そりゃあッ！」

「むっ！」

だが、これは読んでいたらしく、少年はあっさり攻撃をよけると、お返しとばかりに斬り込んできた！

ガギィンッ！ギギィンッ！

そして、私たちはまた剣を振るい合い、ぶつかり合う……

……こんなに気分が高揚したのは、三日前にテスタロッサという金髪の少女と戦ったとき以来……いや、それ以上だ！

そんな心地よい高揚感を感じながら、私たちは二度、三度と斬り合い、またお互いに距離を取る……

「ふふふ……本当に楽しませてくれるな！お前は！」

「そりゃどうも！こっちも負けるわけにはいかないもんでね！」

「それは、私とて同じだ！」

そんなことを言い合いながら、私たちはお互いに笑い合う……おかしな少年だ……

……三日前……危機に陥っていた我々を、白騎士に変身して救った少年……再会した時は驚いたが、それは向こうも同じだったようだ……

そして、先ほどの奴の言葉……奴は、感情的になっていた私から目を背けず、本当に主はやての事を考えて行動してくれた……

それは、奴の瞳を見ればすぐに理解できた……

悪意のない澄んだ瞳……あんな目をできる者はそうそういない……

……だからこそ、冷静さを取り戻したときに、奴の真意が知りたいと思った……

「……おかしなやつだ……主の事を心配したと思ったら、私との戦いをあっさり了承する……お前の真意はどこにある？なぜ、そこまで私たちの事を知りたがる？」

「は？」

私が自分の疑問をぶつけると、少年は目を丸くすると、次に呆れたような視線を向けてきた。……なんだ？なぜ私をそんな目で見る……！？

その視線に若干の怒りを覚えたが、それを口にするより早く、少年がその疑問に答えた。

「なぜって……目の前で泣いてる女の子がいるんだぞ！？オレはただ、それを助けたいと思った……で、助けるための話を聞くには、お前と戦わなくちゃいけない……だから戦う！それだけだ！」

「……は？」

その答えに、今度は私が言葉を失った……少年を見ると、真剣な目を私に向けている……その目を見て、私はつぶやいた……

「ウソはない……ようだな……」

「？、当たり前だろ？ところで、どうしてそんなこと聞くんだ？」

「あ、いや……」

『シグナム、相棒はこういうやつだ……底抜けのお人よしで自覚なし、だから周りがいろいろ苦労することに……って、いでででッ！！！』

「……なぁ～んか悪口にしか聞こえなかったんだがなぁ、クロニクル？」

『あはん♪、相棒……そんなはげし……って、ぎゃあああッ！折れる折れる折れる～～～～～～ッ！！！』

なにか、妙なことを口走ったクロニクルが刃と柄が引っ付くのではないかと思ってしまうぐらい折り曲げられていた……しかし、私はそんなことを気にする余裕はなかった……

当たり前……奴はそう言った……

目の前で涙を流す少女を助けたい……ただそれだけのために、彼は剣を構え、自分と戦っているのだと……

「ふっ……ふふふっ……」

そんな少年を見て、私は思わず笑みをこぼしていた。

……幾多の戦場を駆け抜けた私でも、こんなにまっすぐで、こんなに澄んだ心の者は初めてだ……

……見ると、少年はすでに剣を構えて、私を見ながら首をかしげている。その瞳は、確かに強い光を持っていた……

……ああ……この少年は、本物の『騎士』なのだな……

……私は心の底から、そう思った……

……戦う瞳は強く、心は優しく、愚直なぐらいにまっすぐで……こんなの少年と戦えることに、私の心は不謹慎ながら歓喜した！

「レヴァンティン……カードリッジリロードッ！！！」

『了解！』

ドンッ！ドンッ！

「ッ！？」

私の声に答えて、レヴァンティンが魔力を込めた弾丸を二発ロードする……すると、弾丸に内包されていた魔力が私の体にみなぎりレヴァンティンの刀身を炎が覆った！

「……ホワイトナイト……お前ほどの騎士と戦えること、誇りに思うぞ……ゆえに、私も本気を出そう！」

「……つまり、それがお前の本気ってわけね……ッ！」

私のレヴァンティンに宿る魔力を見て、少年も表情を引き締めて剣を構えなおすと、刀身に手を添えた……

「だったらこっちも本気を見せてやる！……我が剣（つるぎ）に宿れ！ライトニングボルトッ！」

バヂィッ！

「なにっ！？」

その瞬間、少年の刀身に緑色の雷が宿った！刀身から感じる強大な魔力に、私も心踊り、柄を握る手にも力がこもる。

「……なるほど、それが異世界の魔法か……面白いッ！」

「こっちも負けるわけにはいかないんでね……悪いけど、次で決着つけるよ！」

その言葉に、私はまたも感嘆した……他人のために、ここまで必死になれるとはな……

……ソード・ホワイトナイト……お前ならば、本当に何の犠牲もなく、主を救えるかもしれない……

……だから……

「証明して見せろ！お前の剣で、お前の力を……お前の心をッ！」

「おうッ！！！」

少年が力強くうなずくと、その剣に宿る魔力が高まっていく……間違いない、これが奴の全力！

私もそれに答えるように、魔力と気迫を高めていく……

「……私の最高の剣技を送ろう……受け取れッ！」

「こぉいッ！！！！！」

少年……いや、ソードも雷の宿る剣を構える……そして、次の瞬間……

「はあああああああああああッ！！！！！」

「せいやあああああああああッ！！！！！」

私たちは同時に走りだした！お互いに自分の技の間合いまで踏み込むと、ほとんど同時に剣を振るった！

「紫電一閃ッ！！！！！」

「ストームレイドォッ！！！！」

ズガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！！！！

次の瞬間、身を裂く様な衝撃と光にすべての感覚が埋め尽くされた……

～～～？～～～

「……大丈夫？」

「ああ、問題ない……」

「だ～い～じょ～う～ぶ～……」

お互いの必殺技を放った後、クレーターになった地面に黒焦げで倒れてる二人に回復魔法をかけながら私がつぶやくと、シグナムとソード君は同時に答えた。

シグナムはいつも通りの口調で、ソード君は仰向けに倒れたまま、手をひらひらさせて……

「まぁ、見た目ほどケガは大したことないからいいけど……」

「お～い！」

「ちょっとぉ！二人とも大丈夫！？」

「あら……」

そう言って私が治療を終えると、屋敷の方からはやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんが走ってきた。後ろの方には忍さんやギドさん、ヴィータちゃんの姿もある。

「シャマル、二人は大丈夫なんか！？」

「ええ、大丈夫ですよ。ケガの方は大したことありませんし、治療もさっき終わりましたから♪」

心配そうな三人に笑いながら言うと、三人とも「ほ～……」って言いながら、肩の力を抜いた。そんな三人の様子をほほえましく思いながら、私はシグナム達の方に視線を向ける。

「あ～……これって引き分けってことになるのか……？」

「そうだな……」

呆然と呟くソード君に、シグナムは淡々とした口調で返した。すると、ソード君は上を見上げるような形でシグナムに視線を向ける。

「それで……話は聞かせてくれるのか……？」

「……」

ソード君の問いかけに、シグナムは無言……その態度に、はやてちゃん達も何とも言えない空気になる……

だけど、シグナムはふいに立ち上がると、黙って自分のレヴァンティンをソード君に見せた。

……その刀身には、もう少しで折れそうなほどのひどい亀裂が入っていた……

「これって……」

「……お前の技の威力を相殺しきれなかった……私の技の威力が、わずかに及ばなかったのだろう……」

「それじゃあ！」

その言葉に、はやてちゃん達が顔を輝かせる……ソード君も立ち上がり、シグナムと向かい合うと、どちらからともなく笑った……

「……ああ……ホワイトナイト、お前の力を認め、すべてを話そう……」

「「「「ッ！……いやったーーーーーッ！！！！！」」」」

シグナムの言葉を聞いた瞬間、ソード君、すずかちゃん、アリサちゃん、はやてちゃんが飛び上がってハイタッチを交わしながら喜んだ！はやてちゃんなんか、うれしさで目に涙を浮かべている。

そんな子供たちの様子を見ながら、シグナムは私の隣で、他のみんなには聞こえないように呟いた。

「……シャマル……」

「ん？なぁに？」

「……私は、少々気負い過ぎていたのかもしれんな……」

「うふふ、いまさら気づいたの？」

「……ああ、あの少年に教えられた……」

……理由など必要ない……ただ、助けたい……それだけでいいの

だと……

そう言ったシグナムの表情は、どこかさっぱりした表情だった……

「あんた結構やるじゃない！最後のあれが魔法？あたしにも教えなさいよ！」

「もう、アリサちゃんったら……でも、ひどいケガもなくてよかったぁ」

「迷惑かけてごめんなぁ！でも、戦ってる時のソード君は、ちょっとかっこよかったで？」

「あははは、さすがに強かったな、シグナムは！でも、戦って分かったこともあるぞ！」

「ん？なんだ……？」

そんなソード君の言葉に、シグナムが反応した。戦いの中で、何かを感じたのは、なにもシグナムだけじゃないみたい……

「ん～……真面目すぎるほどまっすぐな性格だとか、戦うことが好きみたいとか……あと……」

そこでソード君は言葉を切ると、どこか意地悪そうな笑みを浮か

べてつづけた。

「はやてを、すんげえ大事に思ってること……とか？」

「んなッ！？／／／」

それを聞いて、シグナムは顔を真っ赤に染めた。守護騎士としてじゃない、家族としてはやてちゃんを大事に思ってる……当たり前の事なんだけど、誰かに指摘されると応えるわよね～……

「そ、それは……主を敬愛するのは、騎士として当然で……／／／」

「いやぁ、つばぜり合いの時の目を見る限り、そんなレベルのもんじゃなかったよ……もっとこう、シスコンな姉が妹のために命を懸けてる！……って、感じ？」

「シ、シスコンッ！？／／／」

ソード君の言葉に真っ赤な顔をさらにトマトみたいに染めるシグナム……なんか、見ててちょっと可愛いわ……

「あ～、そうなんよ！シグナムったらあたしのことになると過保護で……いや、うれしいんやけどね？」

「うんうん、大事にされてるっことだもんね！」

「でも過保護なのはちょっとねぇ……程度によるけど……」

「程度っていうけど、シグナムの過保護はすげぇぞ？」

「ヴィータッ！貴様もかぁッ！！！／／／」

その話に割って入ったヴィータちゃんに、シグナムは真っ赤な顔で怒鳴った……でも、それを気にせずにはやてちゃん達の話は続く……

それにともなって、シグナムの顔もこれ以上ないくらいに赤くなっていく……リビングでの殺伐とした空気はどこへやら……

見ると、忍さん、ギドさん、ノエルさんにフェリンさんも、その光景をほほえましそう眺めて笑っている……

……もしかすると、この人たちと一緒なら、もっと別の方法ではやてちゃんを救うことができるかもしれない……

この光景を見ていると、なぜかそんな気がしてきた……あら、そういえば、ザフィーラと恭也君はどこへ……？

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「えっ……？」

姿の見えないザフィーラを探してあたりを見回していると、突然

結界内の空気が変わった……そして次の瞬間、とんでもない振動が私たち全員に襲いかかってきた！

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！！！！

「「「きゃあッ！」」」

「うわッ！な、なんだぁッ！？」

「じ、地震ッ！？」

「いいえッ！結界内に地震なんてありえません！」

忍さんの言葉を、私は即座に否定する！結界内は、現実と隔絶された空間……そこで地震が起きるななんてありえない……

でも、それならこの揺れは一体……！？

『おい、相棒！どうやら、結界内の空間自体が、何らかの影響を受けて振動してるみたいだ！』

「それって、空間が振動するほどの何かが起こるっていうのかッ！？」

「その可能性は大きいじゃろうな……見ろッ！来るぞ！」

「「「「ッ！？」」」」

ギドさんが杖で空間の一点を指していた……見ると、空中に白い亀裂が入っていた！

そして次の瞬間、亀裂は『ビシッ……バシッ……』と、音を立ててどんどん広がっていき……ついに……

バリイイイイイイイイインッ！！！！

……空間がガラスのように砕けると、そこから緑色の空間がこちらをのぞいていた……

それと同時に、空間の揺れは収まった……けれど、私はその空間を見てあることを思い出した……

「……シ、シグナム……あれって……」

「……ああ、間違いない……！」

私の問いかけに、シグナムも真剣な表情でうなずく……その表情には、若干の焦りが浮かんでいた……

「あれは……あのでっかい化け物が出てきたときと同じ……ッ！」

ヴィータちゃんも、いつの間にか赤いドレスの騎士甲冑姿になって、ハンマー型アームドデバイス『グラーフアイゼン』を構えてる。

そして……

ズドオオオオオオオオオオオオオンッ！！！！！！！！

「うわあッ！？」

「きゃあああああッ！！！！！」

ヴィータちゃんの言葉が終わった瞬間……緑色の空間から、巨大な『なにか』が降って来た！

『ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！』

「「「ッ！！！」」」

「な、なによあれッ！？」

その巨大なモンスターを見て、アリサちゃんが声を上げた……私たちも、そのモンスターの咆哮に息をのむ……

……それは、形だけ見れば大きな犬だった……でも、それとは明らかに違っていた……

……頭部についてる顔は三つ、それぞれがバラバラに動き、周りを威嚇するように唸っている……

……そして肩からも、同じように二つの首が伸びていて、その先についてる口から空に向かって大きな咆哮を上げている……

……体長は軽く五メートルを超えていて、その巨体からにじみ出る威圧感は、私たちの動きを止めるには十分だった……

「あ、あいつは……ッ！」

「知っているのかッ！？」

そのモンスターを見上げながらつぶやくソード君に、シグナムが叫ぶように聞く……すると、ソード君は剣を構えながら、重々しくうなずいた……

「ああ……オレ達の世界にいたモンスター……五つの顔を持つ炎の獣王……ケルベロスだッ！」

『ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！！！！！！！』

その瞬間、空間が避けるような咆哮が、結界内に響き渡った……

（つづく）

第三話　通じ合う心、炎の獣王襲来！（後書き）

シグナム達と和解！そして、直後にまさかのケルベルス出現！

実は、最後までフェンリルとどっちにしようか迷いましたが……やっぱりこっちにしました！

魔法は……いろいろとご都合主義！自分勝手に改造してるんで、どうかきにしないでください！……ごめんなさい……

ではでは！皆さんどしどしご感想送ってください！待っています～！

次回もお楽しみに！

第四話　月と竜、友情の覚醒！

「うわっ……す、すごいことになってるわね……」

あのでっかいモンスターが現れたを見たあたし達が急いで外に出ると、あたりを威嚇しまくるケルベロス（っていう名前らしい）が周りの木を縦横無尽に壊しまくっていた……なによあれ、躾がなってないわ……

そんな我ながらのんきなことを考えていると、目の前に立つソードの腰に刺さってる剣が叫びだした！

『ん？おい相棒、ケルベロスの近くに生命反応がある！数は二百だ！』

「二百ッ！？それは虫やアリまで計算に入れてんじゃ……ん？」

クロニクルの言葉に驚きながら、ソードが森の方に視線を移す。あたしもその視線を追ってケルベロスの足元の森に視線を移すと……いた……

人と同じぐらいの大きさで、白い毛並みのオオカミの群れが……じっとこっちをにらんでたッ！

「げっ……なんだよ、あの白いオオカミは！？」

「……あ、あれもオレたちの世界にいたモンスター……ジャッカルの群れだ！」

「まずいのぉ……どうやら、群れごとこっちに来てしまったようじゃ……」

いつの間にか赤いドレスに着替えてた女の子、ヴィータの言葉に、ソードとギドさんが答える。それを聞いて、一緒に外に出てきたシグナムさんやヴィータにシャマルさん、それに忍さんやノエルさん、ファリンさん、すずかにはやても……みんなが息をのんだ……

「なんて数なの……でも幸いなのは、ここがシャマルさんの結界の中だってことね……」

「そうですね、周りに被害を出すわけにはいかへんし……シャマル、結界は大丈夫なんか？」

「ご心配なくはやてちゃん♪『湖の騎士』の称号は、伊達じゃありませんよ！」

心配そうなはやてに、シャマルさんがウィンクを返す。……それってつまり、ここで暴れられても現実世界には影響ないってことよね！

「それじゃあ、シャマルさんは結界の維持で……戦いに行くのはオレと……」

「我々も同行しよう」

「えっ！？」

役割を整えるソードの前に、戦闘メンバーとして名乗りを上げたのは、シグナムだった。でも、我々ってことは……

「当然、あたしも行くぜ！」

みんなの疑問に気づいたのか、ハンマーのような武器を肩に担いだヴィータがうなずいた。見た目では信じられないけど、この子もシグナムと同じくらい強いってことか……

……なんか、羨ましいわね……

「シグナム……ヴィータ……」

いつの間にか、車いすを押して前に出てきたはやてが、二人の事をじっと見つめてた。その目は、子供を心配する母親のような、不思議な目……

「主はやて……」

「はやて……」

「……」

その目を見て、二人は何とも言えない顔でうつむく……でも、シグナムが意を決したように顔を上げると、はやての目を見つめながら答えた。

「この身勝手な判断……お許しください、主はやて……ですが……」

「あたしたちも、はやてと一緒に過ごしてきたこの街が大好きなんだ！だから……だからッ！」

「……シグナム……ヴィータ……」

二人の言葉を聞いて、はやては少しの間目を閉じると、何かを決意したように顔を上げた。

「……分かった……二人がそこまで言うなら、あたしは止めへん……ただしや！」

ぎゅっ……

「「あっ……」」

そう言いながら二人に近づくと、はやては二人をそっと抱きしめながらつぶやいた……

「……絶対……絶対無事に帰ってきてな！絶対やで……ッ！」

「主……」

「はやて……」

若干涙声のその言葉に、シグナムとヴィータは微笑みながらうなずいた！

「はい！必ず……！」

「絶対帰ってくるよ！だから、待っててはやて！」

「……うん！約束やで！」

「はいッ！」

「おうッ！」

少しだけ涙を浮かべるはやての言葉に、シグナムとヴィータは力強くうなずいた！これで、準備はいい……

……でも……

「……ねぇ、あんたも行くの？」

「ん？」

あたしは思わず、目の前の男の子にそんなことを言っていた……

……見た目はあたし達と同じくらい……でも、中身は年上で、いくつもの戦いを経験してきた男……

……その背中は、確かに頼もしかった……あたしがまったく動け

なかったほどの威圧感を放つシグナムにさえ、真正面から意見をぶつけ、あまつさえ打ち勝った……

……それが分かっていても、やっぱ目の前の相手を見たら、不安にもなった……

そんな不安が顔に出てたのか、ソードはこっちを振り返ると、困ったような笑顔を浮かべた。

「ったく、そんな心配そうな顔すんなって！すぐに勝って、帰ってくるからさ！」

「ソード君……」

「で、でも！相手はあれよ！？」

すずかが心配そうな顔をしてる横で、あたしはケルベロスを指ししながら叫んだ。

……全長五メートルを超える巨大なモンスター……あれを相手に、どうやって戦うってのよ！？

そんな思いを込めてにらみつけると、ソードは苦笑いを浮かべながらひらひらと手を振った。

「まぁ、見てろって♪……それにしても、最初はとっつきづらいと

思ったけど、ちゃんとオレたちの事心配してくれるなんて、いいとこあるな♪」

「なッ……／／／」

そう言われて、あたしは言葉を失った……そ、そんなストレートに言われたら、なんか、とんでもなく恥ずかしい！

「あ、あ、当たり前でしょ！あんたはすずかの友達なんだから！あんたがいなくなったらすずかが悲しむじゃない！そんなの絶対許さないからね！べ、別に心配してるわけじゃないんだから！」

「もう、アリサちゃんったら……」

あわてて言い訳をまくし立てるあたしを見て、すずかがため息をついた……ううっ、自分でもなんでここまで素直じゃないのか……情けないわよ……

「うふふ……ごめんね、ソード君。アリサちゃんったら、素直じゃないから……」

「ちょっ！すずか！？」

「そうらしいな♪」

「なんであんたまで笑いながら肩をすくめんのよ！？」

すずかの言葉に、呆れるよう笑いながら肩をすくめるソード……その反応にあたしが食らいつくと、二人とも「ごめんごめん」って言いながら笑った。

その笑顔に、私も思わず笑顔を返した……

「……絶対、無事に帰ってきなさい！じゃないと、許さないからね！」

「ああ、絶対……だ！」

ソードはしっかりとうなずくと、シグナムさん、ヴィータと一緒にケルベロスの方へと駆け出していった……

……それを見送りながら、あたしは確かに実感した……

……自分自身の、無力さを……

～～～？～～～

「気を付けてねーッ！」

「絶対帰ってくんのよーッ！」

後ろから聞こえてくるすずかとアリサの声に苦笑しながら、オレはシグナム達と一緒にケルベロス達に向かって走った！

「ふっ……絶対に戻るか……簡単に言うものだな……」

「ん？」

近くを飛んでいたシグナムが、そう言いながらオレの横で苦笑した。どうやら、さっきの話を聞かれてたみたいだな……つうか、こっちの魔法は空まで飛べるのか……うらやましいな……

「それはお互いさんだろ♪……っと、そういえばお前の剣は大丈夫なのか？」

ふいに思い出して、オレはシグナムに聞き返した。彼女の剣、レヴァンティンは、さっきの戦いでひびが入っちまったはずだけど……

しかし、オレの疑問にシグナムは微笑みながら答えた。

「心配はいらん、レヴァンティンには自己修復機能がある。さっきの破損も、すでに修復済みだ」

『その通りです、ご心配には及びません』

「おお～……」

そう言って突き出されたレヴァンティンには、確かにキズ一つなかった……これはすごいな……

「そんな機能まであるのか……それじゃあ、思いっきり頼りにさせてもらうぜ！」

「ふっ……まかせておけ！」

笑いながらそう言うと、シグナムは「にやり」と笑い返しながらうなずいた。そして、そのまま元の高さまで舞い上がると、そこからケルベロスたちをにらみつける。

「ソード！ジャッカルたちは私とヴィータが相手をする！」
「てめぇは白騎士になって、さっさとあのでかいのを片付けろ！」
「分かった！」
オレが叫んでうなずくと、シグナムとヴィータは空からジャッカルの群れに向かって飛んで行った！
「さて、そんじゃあオレも行くか！ウィゼル！」
シュピンッ！
叫んで手をかざすと、右腕に白銀のガントレットが装着された状態で現れた！
『マスター、いつでも行けます！』
「よしッ！」
ガントレットから聞こえてきたウィゼルの声にうなずくと、オレは左手に発動キーの短剣をもって、呪文を唱える……
「古の剣を携えし、白き勇者ウィゼルよ……我に力を……ッ！」

……唱えながら、右腕のガントレットに短剣を差し込んで叫んだ……

「変身ッ！！！！」

……次の瞬間、まばゆいばかりの光がオレを包み込んだ！

～～～？～～～

「……あ、あれが……ソードの白騎士……？」

「うん、そうみたい……」

初めて見た白騎士の姿に唖然としながらつぶやくアリサちゃん……それを横目に見ながら、私はうなずいた。

そういう私も、実は初めて見たから驚いてる……

……すごい……それ以外の言葉が浮かばないほど、その存在感は圧倒的だった……

「忍お嬢様、わたくしたちも武装を整え、すぐにシグナムさんたち

の援護に向かいます！」
「ええ、お願いするわ、ノエル、ファリン！」
「はい！行きますよ、ファリン！」
「は、はい～ッ！」

そんな私たちの後ろでは、ノエルさんとファリンが屋敷に駆け戻っていく……だけど……

『うりゃあッ！！！！』

ドガアアアアアンッ！！！！！

その間に、白騎士は足元のジャッカルたちを蹴散らしながらケルベロスさんを盾で吹っ飛ばしてた……そういえば、ジャッカルの方は……

「シュランゲフォルム！」
「いっけぇ！シュワルベフリーゲンッ！！！！！」

ドドガアアアアアアアアアンッ！！！！！

シグナムさんの剣が連結剣になってジャッカルさん達を吹き飛ばし、ヴィータちゃんの放った赤い光の弾がジャッカルを打ち貫く……

そうして倒されたジャッカルたちは、金色の光の粒になって消えていった……

「すごいなぁ……ヴィータもシグナムも、あんなに強かったんや……」

後ろで戦いを見てるはやてちゃんも、二人の強さに唖然としてる。

「……ふぅ、なんだ……意外とあっさり終わりそうじゃない！」

「そうやね！」

「……うん……」

アリサちゃんとはやてちゃんが安心したように笑い合った。

……ソード君もシグナムさんたちも強い……確かにこのままいけば、あっさりと勝てちゃいそうだけど……

（……なんだろう、すごく嫌な予感がする……）

胸の奥にとぐろを巻かれているような……そんな嫌な感じが私の心を不安にした。

それに……

「……まったく、心配して損したわね……」

「……」

隣で戦いを見ながらそんなことをつぶやくアリサちゃん……でも、その表情にはいつもの元気がないように見えた……

（……これから、どうなっちゃうんだろう……？）

そんな言いようのない不安を抱きながら、私はケルベロスに向かって剣を振り上げる白騎士を見つめた……

〜〜〜？〜〜〜

『いよいしょおおッ！！！！』

ズガァンッ！！！

『ヴォオオオオオオオオオオッ！！！！』

白騎士に変身したオレは、気合と共に剣を振り下ろしてケルベロスを攻撃した！

意外と頑丈な皮膚のせいで、切り裂くことはできなかったけど、その衝撃でケルベロスは吹き飛んだ！これで、相当のダメージを与えたはずだ……

『ヴォオ……ウオオ……』

『よしッ！』

思った通り、ケルベロスの勢いが目に見えて衰え始めた！これなら、一気に仕留められる！

『これでとどめだ！集え！すべてを破壊する雷鳴の……』

オレはとどめの『雷帝剣（らいていけん）』を放つために、剣を空に掲げて呪文を詠唱する……だが！

『キキャアアアアアアアアアアアッ！！！！』

『ッ！？』

呪文が終わろうとした瞬間、耳をつんざくような甲高い咆哮があたりに響き渡った！とっさに盾を構えたまま後ろに跳ぶと、その場所を『何か』が高速で通り過ぎて行ったッ！

『な、なんだッ！？』

目で追い切れないほどの速さで飛ぶ『何か』に、オレは思わず声を上げた。すると、その『なにか』は空中で旋回すると、ケルベロスの近くにゆっくりと降りてきた……

『なッ！？こ、こいつは……』

その姿を見た瞬間、オレは思わず声を上げていた。

……そこに現れたのは、真っ赤な皮膚を持つドラゴンだった……

……だが、それは翼が足のように異常発達した『ワイバーン』と呼ばれる飛龍……

……パワーはもちろんだが、その飛行速度も普通のドラゴンとは比較にならないほど早い……

……風属性を持つモノや物理攻撃しかまともに効かないモノなど、種類も様々いるけど、今、目の前に現れたのは、その中でも炎の属性を持つワイバーン……

『……イグニスワイバーン……ありゃりゃ、ずいぶん厄介なおまけがついてたもんだな……』

多分、ケルベロスたちとは別のところから召喚されたんだろう……その証拠に、ケルベロスたちを召喚しても消えなかった時空の穴が、今は影も形もなく消えている……

『一回で一匹……なんて都合よくはいかないわけか……やれやれ……』

オレはそんなことを考えながら、目の前に苦笑した……さて、どうしたもんかね、この状況……

目の前には二体の巨大モンスター……しかも、どちらも炎属性をもつモンスターだ。同時に戦うとしたら、技やブレスの威力も上がる最悪の組み合わせ……

勝てない相手じゃないけど……かなり苦戦することは間違いない……ケルベロスはともかく、イグニスワイバーンのパワーとスピードはかなりの脅威だ……

『せめて竜騎士がいりゃ、かなり楽なんだがな……』

元の世界での仲間が変身していたシンナイト、竜騎士……自由自在に空を舞う翼を持ち、手にした大きな槍から繰り出される必殺の一撃は、ワイバーンやドラゴン相手の時はこれ以上ないほど頼りになったもんだ……

だけど、今はそれも頼りにはできない……

『……ま、ないものねだりしても仕方ないよな！』

『ヴォオオオオオオオオオオッ！！！！！』

『キキャアアアアアアアアアアッ！！！！！』

ゴオオオオオオオオオ……ッ

オレが呟きながら改めて剣を構えると、二体のモンスターが咆哮を上げながら口にエネルギーをため始めた！

『これは……ブレス攻撃ッ！？』

ケルベロスは正面を向いた顔と肩から生えた二つ顔から、ワイバーンはケルベロスより強烈そうな火球を口の中につくりだし、それを撃ち出そうとしていた！

そして、その二体の攻撃が向けられてる先は……

『ッ！！まずいッ！！！！』

それに気づいたオレは、あわててその場所に駈け出した！だが、その瞬間に二体の口から火炎弾が撃ち出された！その先には……

「えっ！きゃあああああああああッ！！！！！」

「きゃあああああああああああああッ！！！！！」

「うわわわあああああああああああああッ！！！！！」

「むぅッ！？」

「ッ！！！！！」

その場所にいたのは、アリサ、すずか、はやて、ギドさん、忍さんの五人だった！二体のモンスターは、そこに立つ五人をこの場で一番弱いと判断して、真っ先に排除しようとしてきた！

そうさせてるのは、おそらくモンスターとしての本能だろう……だけど、そんな事させるわけにはいかない！

『こっの……ッ！フォートレスシールドッ！！！！』

ドガァッ！ドガァッ！ドッガアアアアアアアアアアアンッ！

！！！！！

一瞬早く五人の前に立ったオレが手に持った盾を構えて光の防御壁を展開した瞬間、二体の火炎弾の直撃してとんでもない衝撃が襲いかかってきた！

『ぐぅうううううッ！！！！……ゲッ！』

なんとかそれに耐えきって顔を上げると、そこにはもう一度火炎弾を放とうとしている二体の姿！あいつら、フォートレスシールドを砕くまで撃つつもりかッ！？

ドガァッ！ドガァッ！ドガアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！

『くんぬうううううううううッ！！！！！』

再び襲いかかってくる衝撃……それに耐えながら、オレは内心焦りを感じていた！

（このままじゃ、動けないままなぶり殺しだ……でもだからって、ここを引くわけにもいかねぇ！どうすれば……）

だが、そんな考えに答えも出ないまま、二体のモンスターの砲撃は一時もやむことなく続く……

〜〜〜?〜〜〜

「ソ、ソード君……」

私たちの前に立って、二匹の攻撃から私たちを守る白騎士……でも、その声には余裕はない……

「な、なにやってんのよあんた！どうして反撃しないのよ！」

「お、落ち着きアリサちゃん！」

「落ち着いてられるわけないでしょ！あいつなんで黙って攻撃を受けてるのよ！？」

それを見て、怒りと焦りが混じったように叫ぶアリサちゃん……それを止めようとするはやてちゃんも、同じことを思ってるのか強く止めようとしない……

……すると、そんな私たちの前に、ずっと黙ったままだったギドさんが進み出た。

「落ち着くんじゃアリサ……ソードがなぜ動かないか、分からんのか？」

「ッ！わ、分からないわよ！このまま、盾を構えたまま突っ込んで反撃することもできるでしょ！なのになんで……」

「わしらを守るためじゃよ……」

「「「ッ！！！！」」」

静かに放たれたギドさんの言葉に、私たちは思わず動きを止めた。それを見て、ギドさんが話を続ける……

「確かのお前の言うとおり、白騎士だけなら強行突破も可能じゃろう……だが、わしらはそうはいかん！この光の盾が消えて、あの攻撃を一発でも受けたらそれまでじゃ……だから……」

「そんな……」

……自分たちのせいでソード君が……友達が苦しんでる……

それを聞いた瞬間、私は自分がとても嫌いになりそうになった……

……なんで私は弱いんだろう？どうして、ソード君を助けてあげることができないんだろう……？

「うっ……ぐっ……うう……」

「ッ！ア、アリサちゃん……？」

不意に聞こえてきた声に、私は振り返る……

……すると、そこには悔しそうな顔でボロボロと涙を流すアリサ

ちゃんがいた……

「また……まただわ……」

「アリサちゃん……？」

スカートのすそを握る手が震えてる……そのまま、まるで何かに耐えてるみたいに言葉を続ける……

「なのはの時だってそうよ！友達が悩んで、苦しんでるのに何もできない……どうして、あたしはこんなに弱いのよ……」

「アリサちゃん……」

親友の口からあふれてくるのは、偽りのない彼女の本心だった……

アリサちゃんは、元々強気な性格だけど、それ以上に友達思いで優しい性格をしてる……

友達はもちろん、知り合って間もないソード君の事でも本気で心配できるほど、アリサちゃんは優しくて、強い……

だからこそ、今この状況はアリサちゃんには耐えられないほど悔しいものなんだろう……

……友達が苦しんでいるのに、自分は何もできず、あまつさえそ

の友達に守ってもらうしかできない……

それが悔しくて……そんな弱い自分がイヤで……

……でも、それは……

「アリサちゃん……私も、同じだよ……」

「ッ！すずか……」

ハッとした表情で顔を上げるアリサちゃん……いつの間にか、私も涙を流していた……

「……ソード君を助けたい……みんなを助けたい……でも、私にはそんな力がなくて、くやしくて……」

「……す、すずか……」

アリサちゃんはそのまま私に近づくと、優しくぎゅっと抱きしめてくれた……

「……ごめん、何も知らず弱音なんかはいて……すずかの事も考えないで……」

「ううん……私も、アリサちゃんと同じ気持ちだから……大丈夫だよ……」

私も、アリサちゃんの体を抱きしめる……その体は、いつもよりもずっと弱々しく感じた……

でも、アリサちゃんの考えてることは分かる……私も、同じことを考える……

……友達を、仲間を、全部助けて、守れる力がほしい……ッ！

強く、強く願った……

何度も……何度も……何度も……

……その友情、認めよう……

……その優しさ、認めよう……

「「ッ！？」」

その時、確かに私の頭に何かが聞こえてきた……でも、この感じを……私は知ってる……

（あの時と同じだ……ソード君たちが倒れてる中庭まで私を呼んでくれた……あの感じ……）

「ちょっ、ちょっと！誰なのよいきなり！？」

「ア、アリサちゃん！？どないしたん！？」

突然聞こえてきた声に、泣くのも忘れて叫びだすアリサちゃん……そんなアリサちゃんに、はやてちゃんがあわてて声をかけるけど、それに返事をしてる余裕はない……

「あなた達は……誰……？」

「すずか……」

その声に聞き返す私に、アリサちゃんが何か言いかけたけど、思うところがあったのか黙って目を閉じた……帰ってくる声に意識を集中してるみたい……

「答えて……あなた達は……」

「一体、だれなのよ……？」

もう一度聞き返すと、今度はちゃんと答えが返ってきた……

……オレの名は、赤き翼竜ラーヴェイン……

……私の名は、白銀の女神ルティウス……

「ラーヴェイン……」
「ルティウス……」

その名前を、私たちは呟く……どこかで、聞いた名前だけど……

「なかなか、かっこいい名前じゃない……」
「きれいな……良い名前だね……」

私たちがそう言うと、向こうは一瞬だけ黙った……でも、なんだか微笑まれたような、そんな優しい感じがした……

……友を思う心を持つ者……お前の名を……

……友のために涙を流す優しき者……あなたの名を……

「……」

「……」

その言葉に、私はアリサちゃんと顔を合わせる……でも、それは一瞬だった……

「私の名前は、月村すずか……」

「あたしの名は、アリサ・バニングス！」

……次の瞬間、私たちはうなずき合うと、同時に名前を名乗った……

……すると……

……友を思う者……アリサ・バニングス……

……優しき者……月村すずか……

……お前の友情を認め、この力を……

……あなたの優しを認め、私の力を……

パアアアアアアアアアアアアッ！！！！

「わっ！な、なんやこの光ッ！？」

その時、屋敷の一角……ギドさんの研究室の窓が割れて、そこからすごい光があふれ出した！

それを見て、ギドさんもお姉ちゃんも唖然としてる……

「まさか……あの光は……」

「……間違いない、契約の光じゃ！」

パリィイイイインッ！

次の瞬間、研究室から赤と紫、二つの光の球が飛び出してきた！

それは、迷いなく私とアリサちゃんの前まで下りてきて、まるで手に取ってと言ってるみたいに、私たちの目の前に止まった……

「な、なによ、これ……」

アリサちゃんの前に降りてきたのは、蛇みたいな赤い龍のベルト……

「これ……」

そして私の前に降りてきたのは、白銀に輝く神秘的な弓……

……あなた達に、我ら騎士の力を……

……さあ、手に取ってみてくれ……

「騎士の力……」

「手に……」

私たちは、もう一度顔を合わせる……目の前に浮かぶ二つのアイテムからは、すごく強い力が感じられた……

……でも、同時に、すごく優しい気持ちも感じた……

「アリサちゃん……」

「すずか……！」

私たちはうなずき合うと、同時にそれぞれのアイテムを手に取った！

パアアアアアアアアアアアッ！！！！

「きゃあッ！」

「な、なにッ！？」

その瞬間、アイテムが強い光を放った！そしてその一瞬で、私の頭に色々なことが流れ込んできた……

……前の月姫の契約者……ユウリさんの事……

……白騎士の契約者だったレナードさん……ギドさんと同じ時代にいたエルドアさん……

……竜騎士として戦ったシーザーさん……帰ってきたカーラさん……

……そして、そんな彼らと一緒に、新生イシュレニア帝国と戦った……ソード君……

……激しい最終決戦……シンナイトに変身できなくても、それでも自分にできる精いっぱいをやって戦ったソード君とエルドアさん……

……つらい目にあって、戦う力はなくても、それでも絶望せずに一緒に戦ったシズナ姫……

……そして……みんなを、仲間を守るために精いっぱい頑張って戦った、ユウリさん……

……今まで、月姫が見てきた事、経験してきた事全部が、私の中に流れ込んできた……

……

……すべてを見終えて、私はそっと目を開けた……

「……すごいな、ソード君も……みんなも……」

「……そうね……この程度で弱音を吐いてた自分が、情けないわ……」

私のつぶやきに、アリサちゃんも竜のベルトを持ったまま、答えた。

……さっきの光景を、アリサちゃんも見たんだね……

「……あたし達、追いつけるかな……？」

アリサちゃんが、自信なさそうに私に視線を向ける……

前の契約者さんたちに……ソード君の仲間たちに……実力でも、心でも……

そんなアリサちゃんに、私は自信を持ってうなずいた！

「できるよ！私と……アリサちゃんなら！」

「すずか……うん！」

「ちょおい待ちぃ！」

うなずき合う私とアリサちゃんの間に、はやてちゃんが車いすで割り込んで来た。

そして、私たちを交互に睨み付けながら、ため息をついた。

「……もう、二人とも……なにを話とんのか分からんけど……勝手に二人だけで進まんでな！あたしもおるんやでッ！」

「は、はやてちゃん……」

「あんた……」

少しあっけにとられた私たちは、すぐに笑い合ってはやてちゃんの手を二人で握った。

「うん、行こう……二人だけじゃなく、みんなで！」

「そうね、あんた一人置いてったりなんかしないわよ！」

「二人とも……うん！」

すると、はやてちゃんは嬉しそうに私たちの手を握り返してきた……

……そう、一人じゃない……みんなで助け合って、進んで行こう……

ソード君も、はやてちゃんも、お姉ちゃんも、シグナムさん達も……もちろん、アリサちゃんも！

……だから……

「……待っててね、はやてちゃん……」

「ちゃっちゃとあのバカを助けてくるわ！」

「……うん！いってらっしゃいや！」

私の言葉に、はやてちゃんは少し寂しそうにしたけど、すぐに手を放して笑ってくれた。

そして、私たちは一歩前に出ると、それぞれ自分のアイテムに笑いかけた。

「行くわよ、ラーヴェインッ！」
『おうッ！』

「行こう……ルティウス！」
『はいッ！』

応えてくれた二人にうなずきながら、私たちは記憶の中に出てきた変身の呪文を詠唱する……

「古の大地を焦がす、赤き翼竜ラーヴェインよ……あたしに力をッ！」

「古の闇夜にきらめく、白銀の女神ルティウスよ……私に力をッ！」

アリサちゃんは竜のベルトを腰に巻いてバックルを叩き、私は白銀の弓を構えて弦を引く……

パシュウンッ！！！！

「「変身ッ！！！！！」」

……その瞬間、私たちはまばゆい光に包まれた……

〜〜〜？〜〜〜

『な、なんだ！？』

フォートレスガードを展開しながら二体の猛攻に耐えていると、突然、後ろからものすごい光があふれ出した！でもそれは、オレもよく知ってる輝き……

『これは、変身の光！？……うわッ！』

ドガアアンッ！！！！

オレが後ろの光に気を取られた瞬間、ケルベロスの放った火炎弾がフォートレスガードを突き抜けてオレに直撃した！

……しまった、油断したッ！

オレがバランスを崩して倒れたことで、フォートレスガードの効果が消え、光壁がなくなった……

すると、チャンスを逃すかとばかりにケルベロスたちが火炎弾を放った！

『このッ……ぐっ！』

すぐに立ち上がろうとしたが、体が思うように動かない……さっきのフォートレスガードで力を使い過ぎたか！？

その間に、放たれた火炎弾はすぐそこまで迫っていたッ！

『くっそぉ……』

……このままじゃ……みんなが……

……間に合わない……そう感じた瞬間、すべてが真っ黒になったような気がした……

……だが、その時……

シュピンッ……ズダアアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！！！

『ヴォオオオオオオアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！！』

『なッ……！？』

オレの後ろから放たれた光の矢が、火炎弾を貫いて爆散させた……そしてそのまま、火炎弾を放ったケルベロスの背中の首を貫いて消滅させたのだ！二つ同時にッ！

でも、オレはその光の矢を見て安心したような気分になった……なぜなら、その光の矢を前にも見たことがあったから……

……あれは……

『ソード君、大丈夫！？』

『あ……』

振り返ると、そこには思った通りの存在がいた……

……薄い紫色の体を幻想的な光で包んだ巨大な女性の姿をした騎士……

……手に持つのは、光の霊弓エルリート……

……オレの白騎士と同じ、ギドさんが作り上げたシンナイトの一体……

『つ、月姫……』

『えへへ……助けに来たよ♪』

オレが呆然としながらつぶやくと、月姫はかわいらしい仕草で答えた。

……でも、オレはその声に聞き覚えがあった……この仕草にも……まさか！？

『その声……すずかッ！？』

『うん、そうだよ！』

オレの言葉に月姫は同じ仕草で答えた……あのすずかが『月姫』の契約者……マジか？

あまりの衝撃に呆然としていると、すずか……月姫はケルベロスたちに背を向けたまま楽しそうに言った。

『見ての通り、私もシンナイトに選ばれたんだ！……でもね……』

『キキャアアアアアアアアアアッ！！！！』

『ッ！』

その瞬間、今度はイグニスワイバーンが動き出した！巨大な手と見間違うばかりの巨大な翼を広げ、空へと飛びあがった！

そしてそのまま、月姫に向かって突っ込んでくる！

『ま、まず……ッ！』

月姫は、そっちに背を向けていて気付いてない！オレも起き上がろうとするが、まだうまく動けない！

だが、イグニスワイバーンの爪が、月姫に届こうとした瞬間……

『ソニック……スピアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！』

シュンッ……ズガアアアアアアアアアアアアアンッ！！！！

『キキャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！』

『にょえッ！？』

後ろから、赤い何かがすごいスピードで飛び出すと、その『巨大な槍』を突き出して、イグニスワイバーンを粉々に粉砕した！

『シンナイトに選ばれたのは……私だけじゃないけどね♪』

月姫の言葉に唖然としていると、イグニスワイバーンを粉砕した『なにか』がオレの前に舞い降りてきた……

……赤い龍の装甲を身にまとい、手には魔槍シュマーグナを持った巨大な騎士……

……背中には、赤い翼を持ち、前の世界では、オレ達と共に戦ってくれた、頼れる仲間……

……そして、月姫と同じ、ギドさんが作ったシンナイトの一体……

『り、竜騎士まで……一体誰が……』

『あたしよ！あ・た・し！』

オレの呟きに、竜騎士は見た目に似合わない女の子の声でそう返

してきた……いや、この声って……

『ア、アリサァッ！？お、お前が竜騎士なのか！？』

『何よ、その反応は！？あたしが竜騎士じゃ悪いっての！？』

『いや、そんなことないけど……』

ただ、びっくりしただけで……それにしても、ラーヴェインは何を基準に契約者選んでるんだ？

『……また、なんか失礼なこと考えなかった……？』

『……か、考えてません……』

『ちょっとぉ！？今の『間』は何よ！？正直に白状しなさいッ！！！』

『ま、まぁまぁ……』

空中で地団太を踏む竜騎士を、月姫がなだめてる……なんだ、この光景……？

『ヴォオオオオオオオオオオオッ！！！！』

シュウウウウウウウ……ッ

『『『ッ！！！』』』

そんなコミカルな一面を展開する二体の騎士に向かって、ケルベロスが吠えた！見ると、月姫の矢で消滅した背中の首が再生した！二つともッ！

『なによあいつ！？頭が再生した！？』

『ケルベロスの背中の頭は、つぶしても何度も再生する！狙うなら本体だッ！』

『ヴォオオオオオオオオオオッ！！！！』

『『『ッ！？』』』

戸惑う竜騎士にオレが叫ぶと、そうはさせるかとばかりにケルベロスが口から火炎弾を放つ！オレはやっと動くようになった体を動かし、盾を構えてはやてたちの前に出る！

『フォートレスシールド！』

ドガァッ！ドガァッ！ドガアアアアアアアアアアンッ！！！

『ソード君ッ！？』
『ソードッ！』

その火炎弾を受け止めるオレを見て、月姫と竜騎士が同時に声を上げた！でも、さっきまでの攻撃に比べたら大したことない！

『こっちは大丈夫だ！だけど、このシールドも長くは持たない……悪いが、決めるなら一発で決めてくれッ！』

『『ッ！』』

さっきまでの防御で、ほとんど力を使い尽くしちまったからなぁ……けど、そんなオレの言葉を聞くと、二体はすぐに力強くうなずいた！

『分かったわ！』
『まかせて！』

そう言って二体は、オレの前にそれぞれの武器を構えて立った！……まったく、頼もしいことで♪

『ヴォオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！』

そんなオレの前に立つ二体に、ケルベロスが鋭い爪で襲い掛かるッ！

……だけど……

『これ以上は……やらせないわよッ！！！』

ドッガァッ！！！

『ヴォギャアッ！？』

襲いかかってきたケルベロスを、竜騎士は槍で受け止めて打ち返した！

『行きます！エナジーアローッ！！！！！』

カッ……ズダアアアアアアアアアアンッ！！！！

『ヴォオオオオオオオオオオオッ！！！！』

打ち返され着地した瞬間、ケルベロスに月姫の放った光の矢が襲いかかる！

それは、ケルベロスの右側の前足をとらえ、その動きを止めた！

『今だよ！アリサちゃんッ！』

『ナイスよ、すずか！』

いつの間にか空へ飛びあがってた竜騎士が、月姫にうなずいた。

『これで終わりよ！　必殺、天槍襲来ッ！！！』

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ……

竜騎士が天に向かって槍を掲げると、そこに巨大な魔方陣が現れた！　その中から、何本もの巨大な槍がケルベロスを狙う……

『いっけえええええええええええええええッ！！！！』

ドドドドドドドドドドドドドドドッ！！！！！！！！！！

そして、竜騎士が自分の槍を振り下ろしたのを合図に、巨大な槍が雨のようにケルベロスに降り注いだッ！

『ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！！！！！！』

槍の雨の中に消えたケルベロスが最後の咆哮を上げる……

……次の瞬間、ケルベロスは巨大な槍に全身を貫かれて、そのま

ま消滅した……

（つづく）

第四話　月と竜、友情の覚醒！（後書き）

更新遅れてすいません！長かった……ものすっごく長かったです……

やっぱ、戦闘描写は難しいですね……しかし、書いてて楽しいのも本当です！

今回は、アリサ＆すずかが騎士に変身！二人にソードを加えた三人が、今回の主役といっても過言ではありません！

これからもがんばりますので、どしどし感想ください！待ってま～す！

次回は、いよいよシグナム達が闇の書とはやてについて語る……どうなるのか、お楽しみに！

ではでは、また次回！

第五話　闇の書の形、ヴォルケンリッターの告白！

シュウウウン……

「よっと！」

ケルベロスが完全に消滅したのを確認すると、オレ、竜騎士、月姫は変身を解除して、元の姿に戻った。

「ふぅ……へ、変身って、結構疲れるのね……」

「うん……なんか、体中の力が抜けちゃった……」

「ふふっ……みんなお疲れ様♪」

変身を解除した瞬間、ぐったりと地面に倒れるように座り込むアリサとすずかに、忍さんが微笑みかけた。

「新たな月姫、竜騎士の誕生ね……おめでとう♪」

「あ、ありがとう……だけど、変身するたびに……こうなるの……？」

「いや、初めての変身だからだろ……何度か変身すれば、徐々に慣れていくさ……ふぅ～……」

レナードやシーザーも、最初は辛そうだったもんなぁ……ま、オレは鍛えてるからそんなにきつくないけど！

……と、言いたいところだけど……今回はさすがに疲れた……魔力も体力もすっからかんだ……

だけど、そうして座り込むオレを、アリサが疲れた顔でにらみつけてきた。

「……な、なによ、助けられたくせに……す、少しは感謝しなさいよね……」

「ん？……ああ……」

……そういえば、まだお礼を言ってなかったな……二人の変身に驚いて忘れてた……

「悪い悪い、二人とも助かった……ありがとうな……」

「うん……どういたしまして、だよ……」

「……ふ、ふん！まったく、お礼を言うのが遅いわよ、このバカ！」

すずかは笑顔でうなずいてくれたけど……アリサにはバカと言われてそっぽを向かれた……

……そ、そこまで言わなくてもいいじゃないか……くすん……

『おいおい、落ち込むな相棒！こいつは『ツンデレ』だ！思ったことを素直に口に出せない性質(たち)だ！さっきの言葉を直訳するなら『気にしなくていいわよ、無事でよかったわ☆』ってところ……あっ！あだだだだッ！！！！！』

「んなわけないでしょッ！何かってのこと言ってんのよ、このバカ剣が～～～～ッ！！！」

その瞬間、アリサはすごい勢いでオレからクロニクルを奪って折り曲げ始めた！……さっきまでの疲れた顔もどこへやら……

……あ～あ、顔が怒りで真っ赤になってるし……

『あ、相棒、見たか！これがツンデレだ！ツンデレの『ツン』の部分だ！もうじきあま～い『デレ』期が来る……ぎゃあああああッ！折れる折れる折れるーーーーーーーーッ！！！！！』

「来ないわよ！あたしに『デレ』期はないッ！！！」

『『ツン』しかないだと！？そんなはずはない！『デレ』期は必ず来る！……ああああああッ！折れる折れる！マジで折れるーーーーーーッ！！！！』

「……？、何言ってんだ、お前ら……？」

わけのわからない事を言いまくる二人を見ながら、オレは首をかしげた。そんなオレの隣では、すずかがその光景を見ながら苦笑している。

「もう、アリサちゃんッたら……ほんとに素直じゃないなぁ……」

「ほんまやで……『ツン』だけじゃあかん！時には『デレ』も必要やッ！」

「うわっ！いつ来たんだ、はやて！？」

いつの間にか現れたはやてに、オレは思わず声を上げた！……け、気配すらなかったぞ！？

「いや、ついさっきからやで？それにしても、みんなの変身した姿、かっこよかったで～！」

「えへへ……ありがとう」

そう言いながら笑うはやてに、すずかもにっこりと笑い返す……ああ、なんか和むなぁ……

そんな光景をほほえましく思いながら、オレも知らず知らずのうちに微笑んでいた。

……と、その時……

「主はやて！」

「はやて～！」

「あっ！ヴィータ、シグナム！お帰り～！」

空からシグナムとヴィータが戻ってきた。どうやら、向こうのジャカル達を倒し終えたみたいだ……

そんな二人にはやてが手をふると、二人も手を振りながら下りてきた。

「二人とも大丈夫か？ケガとかしてへん？」

「はい、大丈夫です」

「全然平気だって！あんな奴らなら、二百だろうが三百だろうが、問題ないよ！」

「あはは、それは頼もしいなぁ～」

そう言いながら、はやてはヴィータの頭を優しくなでた……すると、ヴィータも気持ちよさそうに目を細めて「はやて～♪」とか言いながら甘え始めた……

「うむうむ、こっちも和むなぁ……」

「和むねぇ～」

そんな光景を見ながら、オレとすずかが和んでいると、不意に屋敷の方から誰かの気配がした。

「……忍お嬢様……」

「ごめんなさ～い！遅れましたぁ！」

「あっ！ノエル、ファリン、なにやってたの？もう終わった……なにそれ？」

「？」

屋敷から来た気配は、ノエルさんとファリンさんだった……その声に振り返ってみると、いつも通りメイド服姿のノエルさんが、両脇に『何か』を抱えていた……

……それは、頭にたんこぶを作って気絶している恭也さんとザフィーラだった……

……そういえば、姿見えなかったな、あの二人……

「すいません、皆様……お二人を止めるのに少々手間取ってしまいました……」

ノエルさんはそう言って頭を下げると、二人を地面に下ろした……それにしても……

「……いや、それは別にいいけど……何があったのよ？」

「ええっとぉ……」

さすがに戸惑いを隠せない忍さんに、ファリンさんが苦笑いを返す……

その様子に、アリサ達やはやて達もどうしたのかと顔を見合わせる……

……そして、最初に口を開いたのは、ノエルさんだった……

「いえ……実はついさきほどまで、お二人とも中庭で戦闘行為を行っていたので……」

……はい？

その言葉に、オレは一瞬で言葉を失った……

いや、オレだけじゃない……はやてもアリサもすずかも、忍さんやギドさんまで目を丸くしていた……

だけど、そんなオレ達の様子に気づかず、ノエルさんは淡々と説明を続ける……

「武装をしに屋敷へ戻ったところ、お二人が外の様子にも気づかずに戦っていたため止めようとしたのですが……」

「話を聞いてもらえなくて……結局、お姉さまが力づくで……」

「「「……」」」

……言葉が、出なかった……

……いや、あれだけの事態に気づかない二人も二人だけど、そんな二人をノエルさん一人で倒したの！？何者なんだノエルさん！？

……だけど、オレとは違う感想を抱いたらしい人物が、約三名……

「そうなんかぁ～……ソード君もアリサちゃんもすずかちゃんもがんばっとったのに……」

「戦いに夢中で、まったく気づかなかったとはな……」

「……これは……少し、お仕置きが必要ね……」

「フフフフフ……」と笑うはやて、シグナム、忍さん……三人

の後ろには、何か黒いオーラのようなモノが見えたような気がした……

あの二人がこれからどうなるのかは分からないが……きっと、とんでもなく怖い目に合うのは容易に想像できた……

……でも……

「まぁ、自業自得よね……」

「うん……」

「おう……」

『だな……』

「そうだな……」

アリサの締めくくるような言葉に、すずかもヴィータもクロニクルも、そしてオレもきっぱりとうなずいたのだった……

そしてその後、二人は怪しい笑いを浮かべる三人に引きずられながら、屋敷へと消えていった……

～～～?～～～

「ホワイトナイト……まずは、主たちを守ってくれたこと、礼を言う……」

……ここは、月村家のリビング……戦いが終わって、改めて話をしようという事になったので、全員ここに集まっている。

そんな中、シグナムはオレにお礼を言いながら頭を下げた。

「……いや……それは、いいんだけどさ……」

……だけど、そこに集まったはやて、シグナム、忍さん以外のメンバーの視線は、すべて部屋の隅っこに向けられていた……

「……」（ガタガタガタガタガタガタ）

「……」（ブルブルブルブルブルブル）

……そこには、首に『反省中』と書かれた札をかけて、正座させられている恭也さんとザフィーラの姿があった……

二人ともどんな目に合わされたのか、顔を青くしてひたすら下を向いたままガタガタブルブルと震えている……

……その表情は、何かとんでもない恐怖を植え付けられたかのように凍っていた……

「……なぁ、どんなことしたら、あんな表情になるんだ……？」

「そ、そんなのあたしが知りたいわよ！何あの顔！？明らかに普通じゃないわよ！？」

「あ、あたし……初めてはやてが怖いって感じた……」

「そうかな？お姉ちゃんを怒らせた後の恭也さん、いつもしばらくああだよ？」

「「「うそぉッ！？」」」

すずかの言葉に、オレとアリサ、それにヴィータが声を上げた。それを当たり前のように話すすずかも怖いけど、それでも恋人関係続けてるというあの二人も別の意味で恐ろしい……

「う～ん……でも困ったな、これじゃ話が進まんわ……そや！シャマル！」

「は、はい！？」

突然、はやてに呼ばれたシャマルさんは、はやてとなにか「ごにょごにょ」と話すと、仕方ないとため息をつきながら、二人のそばまで行き……

「け、結界発動ッ！えいッ！」

シュピンッ！

「「「「えええええッ！！！！」」」」

その瞬間、緑色の光に包まれて、恭也さんとザフィーラの姿が消えた……まさか、結界内に閉じ込めた……？

そして、何とも言えない表情のオレ達を見ながら、シャマルさんは精いっぱいの作り笑いを浮かべた。

「ええっと……っみ、皆さん！今の光景は忘れましょう！」

「「「「おおいッ！？」」」」

『隔離だ！二人を隔離しやがった！』

あまりの事に、思わず声をそろえるオレ達四人＋クロニクル……

……だけど……

「さて、それでは約束通り……闇の書について説明しよう……」

「「「えええええッ！！！！」」」」

……なんと、シグナム達は何事もなかったかのような表情で話し始めた！

忍さんもはやても、それについて何もツッコまない……

シャマルさんとノエルさん達は……すでにあきらめたように視線をそらしてるしッ！

「ちょ、ちょっとぉ！？なんでさっきの事についてはノーリアクションなわけ！？」

「アリサちゃん……もうツッコむだけ無駄だと思うよ……？」

「こいつら、どうあってもあの二人の存在を無視する気みたいだな……」

「もう、こうなったらさっさと話を進めようぜ……」

もうツッコむ気力もなくしたオレ、すずか、ヴィータの言葉に、アリサも「そ、そうね……」と言ってしぶしぶうなずいた。

それを確認すると、シグナムは闇の書をはやてから受け取って、話を始めた……

～～～?～～～

「……この闇の書は、古代ベルカで作られた魔道書だ……魔道士のリンカーコアを蒐集することでページを増やしていき、６６６ページすべてが埋まると、所有者に強大な力を与える……」

「はい、しつもーん！」

「はい、許可しま～す！」

「シャマル……」

手を上げたアリサにかわいらしい仕草で応えるシャマルさん……それを見て、シグナムが思わずため息をついた。……シャマルさんも案外ノリがいいな……

一瞬、ツッコみそうになったアリサだが、それでは藩士が進まないと思ったのか、ぐっと耐えて許可された質問を続けた。

「……こ、『古代ベルカ』とか『リンカーコア』ってなんなの？少なくとも、あたしはそんなの聞いたことがないんだけど……」

「ああ、オレも知らねえな、それ……」

「私も……」

「そういえば、あたしも詳しい話は聞いたことないなぁ……」

「む……そうか……」

オレ達がそろってうなずくと、シグナムも何か考えながらうなずいた……

「ふむ……まずはそこから説明しなければな……シャマル」

「はいは～い！では、その質問には、私がお答えしますね♪」

シグナムに言われて前に出てきたシャマルさんは、指にはめた指輪からいくつかの画像を空中に映し出して説明を始めた。

そこには、緑色の空間に浮かぶいくつもの世界が映し出されてい

た……

「……まず、この世界ことだけど、この世界は『次元世界』と呼ばれる世界で、地球以外にもいくつも世界があるんです。古代ベルカは、はるか昔に滅んでしまった地球とは別の次元世界の一つなんですよ」

「「「へぇ〜……」」」

シャマルさんの分かりやすい説明に、オレ達は揃ってうなずいた。

「……ようするに、地球とは別の世界が、同じ空間にいくつも存在してるってことだよな……」

「はい、その通りですね」

一応確認のために聞くと、シャマルさんは笑顔でうなずいた。そして、そのまま説明を続ける。

「はい、では次は、リンカーコアについて説明しますね！」

「「「「はーい」」」」

「お、おう……」

オレ、すずか、アリサ、はやての四人で素直に返事を返すと、ヴィータも遅れてうなずいた。……一人だけ、仲間はずれなのは嫌だったんだろうな、きっと……

それを見て微笑みながら、シャマルさんは空中に浮かんだ画面を別の画面に切り替えた。

そこには、簡単な人の上半身の絵が映っていた。

……？、心臓の部分に、なにか印が付いてるけど……あれは……？

首をかしげていると、シャマルさんがその絵の心臓部分を指さしながら話し始めた。

「はい、リンカーコアっていうのは、私たち『魔道士』が体の中で魔力を作り出すための特殊な器官の事で、『魔道士』になるには、まずこのリンカーコアを持っていることが絶対条件になっています。でないと、魔力を作り出すことができないからです」

「へぇ……それって、生まれた時からあるかどうか決まってるんですか？」

「はい、そうなんですよ～、先天的な器官ですから……」

「ふ～ん、オレ達の世界とはずいぶんと違うんだな……」

すずかの質問に答えたシャマルさんの説明に、オレは思わずつぶやいた。

オレ達の世界では、やり方さえ覚えれば魔法は使えた……でもこっちの世界だと、生まれ持った特殊な能力がないと、魔法は使えないってことか……

全く違う魔法のありかたに、なんとなく首をかしげていると、また空中の画面が変わった。

今度は、はやてが持ってる闇の書が説明付きで映っている。

「次は闇の書についてです……この闇の書は、リンカーコアから魔力を吸い取って、使える魔法や知識を記録することでページを増やしていくんです……私たちは、これを『蒐集（しゅうしゅう）』と呼んでいます」

「なるほど……で、さっきの説明に戻るってわけね……」

「その通りだ……」

そこまで理解して、納得したアリサの言葉に、シグナムが重々しくうなずいた。

「……つまり、闇の書は人のリンカーコアを吸収してページを埋める……そのページが６６６ページになったとき、所有者に強大な力を得られる……」

「ああ……リンカーコアについては、人だけではなく別世界の魔法生物でも、持っているものはいるからそれでもいいのだが……それで間違ってはいない……」

怯えるように聞くすずかに、シグナムはもう一度うなずいた……

……なんか、聞けば聞くほどろくでもない物のような気がするんだけど……

『人の魔力を奪って力を手に入れるための魔道書、か……なんでそんなもんがはやてちゃんのところにあるんだ……？』

「闇の書には『無限再生』と『転生機能』が備わっているのだ……この機能のおかげで、闇の書はどんなに破壊されても元の姿に戻る

ことができる……」

「そして、前の主がいなくなると、次の主のもとへランダムで転生する……そうして、闇の書と私たちは生きてきました……」

そこまで言うと、シグナム達は言葉を切った……なにか思うところであったのかな……

……あれ？ちょっと待ってよ……

「闇の書と『私たち』ってどういう事よ？まるで、ずっと一緒にいるような言い方じゃない……」

「……」

オレが感じた疑問をアリサが聞くと、シグナム達は少しうつむきながら答えた。

「……ああ、バニングスの言うとおりだ……」

「え？」

重々しくうなずくシグナム……その説明を、シャマルさんとヴィータが引き取って続ける。

「……私たちは、闇の書とその主を待るために作られた守護騎士プログラムなの……つまり……」

「あたしたちは、闇の書の一部で……人間じゃねぇ……」

「……」

「……」

その事実を聞いて、オレとアリサは顔を見合わせて苦い表情を交わした……でも、お互いの顔に嫌悪や恐怖の感情はない……

シグナム達が人間でなくとも、彼女たちが悪人でないことはよく分かっているつもりだ……魔法や騎士、別世界の事まで知った今では、そのくらいのことは些細なことだ……

……でも、それをどう言葉にしていいのか分からないのだ……下手なことを言って、彼女たちを傷つけたくない……だから、オレ達は何も言えずにいた……

……だけど……

「……そっか……」

「「「ッ！？」」」

そんな中で最初にうなずいたのは、一番はやてとの付き合いが長いすずかだった。

でも、その顔に浮かんでいたのは、知らないものに対するは恐怖ではなく、知っている人間に向ける優しい笑みだった。

「話してくれてありがとう……でも、私はあんまり気にならないかな……だって、シグナムさんもヴィータちゃんもシャマルさんも……みんな良い人だって、私は知ってるから……」

「すずか……」

すずかの言葉を聞いて少し唖然とするヴィータ達、すると、それに続くようにアリサとオレも立ち上がった。

「ま、そういう事ね……あたしはあんた達と今日初めて会ったけど、悪いやつじゃないってことくらいは分かるわ……だから、その……あ、あんまり気にするんじゃないわよ！そんな事……」

「そうそう！オレも、剣を交えて戦ったからな。悪いやつなら分か

るさ……な？シスコンさん？」

「なッ！？ホ、ホワイトナイト！そのネタはもう引っ張るなッ！／／／」

オレの一言で真っ赤になるシグナム……そんな彼女の様子に、オレ達は思わず笑った。

そんなオレ達を見て、少しの間ポカーンとしてたシグナム達だが、はやてがつられて笑い出したのをきっかけに、ヴィータもシャマルも、それにつられて忍さん達まで笑い出した。

……ただ一人、からかわれたと分かったシグナムだけは、真っ赤になって怒ったような表情をしてたけど……

「あはははッ……な？言うたやろ、シグナム……すずかちゃん達なら、受け入れてくれるって……」

「……はい……どうやら、まったく杞憂に終わったようです……」

笑いかけるはやてに答えながら、シグナムも表情を緩める……だが、すぐにまじめな表情に戻ると、ヴィータやシャマルさんに目配せしてうなずいくと、その顔を上げた。

「みんな……こんな私たちを受け入れてくれたこと、感謝する……
だから話そう……我々の知っている、闇の書のすべてを……」

……そう前置きをして、シグナムは話し始めた……

……闇の書の呪われた機能……そして、それにむしばまれている
はやての体……

……そしてそれは、オレ達にある決断させたのだった……

……それは……

（つづく）

第五話　闇の書の形、ヴォルケンリッターの告白！（後書き）

はい、遅くなってごめんなさい！中途半端で終わってごめんなさい！

こんな終わり方でいいのか？と自分でも思いますが……これが精いっぱいでした……すいません！

ではでは、また次回！

エピローグ～謎の仮面、いきなりの再会～（前書き）

すいません！前の話でこの章を終わらせるはずだったんですが、書いてたらこっちの方がキリがよくなったので、勝手ながら変更しました！

戸惑った皆様、ほんとうにすいませんでした！

エピローグ～謎の仮面、いきなりの再会～

……シグナム達から話を聞かされた、その日の夜……

「はぁ～……お風呂上がりのコーヒー牛乳は最高ですたい～……」

……オレは、一足早いお風呂をいただいて、お約束のコーヒー牛乳を片手に、月村家のテラスに立っていた……

……すずかとアリサ、それにはやてとヴィータは、今頃お風呂で四人仲良く楽しんでいることだろう……

「……にしても、はやての足……何かあるとは思ってたけど……まさか……」

「あんな理由とは、考えなかった？」

「お？」

その声に顔を上げると、いつの間にか忍さんとシグナム、シャマルさんの三人がテラスにやってきていた。

「忍さん、シグナム、シャマルさんも……」

「ふふ、こんばんわ」

「邪魔したか？ホワイトナイト……？」

私服姿の三人は、口々に言いながら思い思いの場所に腰かける……オレも、テラスに置いてある椅子に座り、笑いながら答えた。

「いや、特に考え事してたってわけじゃないから……でも、シグナム……」

「ん？なんだ、ホワイトナイト？」

「ホワイトナイトって、呼びにくくないか？仲間になったんだから、ソードで良いぜ？」

「ふむ……」

オレがそう言うと、シグナムは少し考えるような仕草をした。そして、微笑みながらうなずいた。

「……仲間か……そうだな、ではソードと呼ばせてもらおう……」

「おう！」

「みなさん、お飲み物をお持ちしました……」

シグナムの答えに、オレが満足気にうなずくと、良いタイミングでノエルさんがみんなに飲み物を持ってきてくれた。

さすがに各々の好みは分かってるようで、忍さんとシャマルさんにはミルクティー、シグナムにはコーヒー……

そして、オレにはコーヒー牛乳が渡された……

「……オレ……今、合流したばっかだよな……？」

「？、なにか……？」

「……いや、別に……」

表情を変えずに首をかしげるノエルさんに首を振って答えると、オレはコーヒー牛を飲み始めた……

ノエルさんの不思議っぷりを気にしちゃいけない……オレがこの家に来て、初めて学んだことだった……

（それにしても、あの話には驚いたなぁ……）

……そんなことを考えながら、オレはあの時の事を思い出した……

〜〜〜?〜〜〜

「……はやてちゃんが……死んじゃう……？」

静かになったリビングに、すずかの唖然とした声が響く……

……すずかだけじゃない、オレもアリサも忍さん達も……そして、はやて本人も唖然としている……

……そんな中、シグナム達の説明が続く……

「闇の書は、発動する前……主のもとへ転生してから長い間、主はやてのリンカーコアから魔力を吸収……つまりは侵食していた……」

「でも、はやてちゃんの未熟な体じゃ、その負荷に耐えられなくて……結果として、足のマヒという形で身体に異常をきたしたの……」

「でも……闇の書が発動してあたし達が出てきたことで、あたしたちの存在を維持するための魔力が必要になった……それが、さらにはやてのリンカーコアに負荷を与えて……」

「……体のマヒが……進行しとるんやな……？」

「「「ッ！？」」」

はやての一言に、ヴォルケンリッター達が驚いた様子で顔を上げた。だが、それを見てはやてが「やっぱなぁ……」と続けた。

「……最近、妙に胸やその周りに痛みを感じることが時々あったんよ……おかしいなぁとは思っとったけど……さっきの話で納得したわ……」

「主……」

「はやてちゃん……」

「はやてぇ……」

そんなはやての言葉を聞いて、三人は申し訳なさそうにうつむいた……きっと、はやてのためを思って、言えなかったんだろうな……

「……申し訳ありません、主はやて……」

「ええよ……みんな、あたしのために黙っとったんやろ？だったら……ええよ……」

「……」

そう言って微笑むはやてに、その場の誰もがいたたまれなくなる……

……だけど、話を聞いたオレの中には怒りが湧いてきた……

……なんで、この子が死ななきゃならない……？

……闇の書に選ばれたから？運が悪かった？

……そんな理由で、涙を流さないといけないのか……？

……ふざけるな……

……ふざけるなよ……！

「ふざけるなぁあああああッ！！！！！！！」

ガッシャアアアアアンッ！！！！

「「「ッ！！！」」」

オレは怒りにまかせて目の前のテーブルに拳を叩きつけた！

それに驚いたシグナム達が、目を丸くしてオレを見る……そんな三人に、オレは言葉を投げた！

「なんで、はやてが死ななきゃならないッ！？そんなのオレは認めないッ！友達が死ぬかもしれないって聞いて、冷静でいられるほどオレは大人じゃないんだッ！」

「ソード君……」

「ホワイトナイト……」

「そうよ……そんなの当たり前じゃないッ！」

すると、次にアリサが勢いよく立ちあがって胸を張って続いた。

「確かに、あたしたちは今日会ったばかりだけど……それでも、あたしはあんたの事友達だって思ってる！簡単に死なせたりしないんだから！」

「なにか……何かないんですか！？はやてちゃんを助ける方法は……！」

アリサにつづいて、すずかも何か方法はないのかと祈るように手を組みながら聞いた。

「アリサちゃん……すずかちゃん……」

「……」

「……」

「……」

シグナム達は、オレ達を見ながら少し考えるように目を閉じると、代表してシグナムが口を開いた。

「……可能性が、ないわけではない……」

「「「ッ！？」」」

それを聞いた瞬間、少しの希望の光が見えた！オレ達は顔を見合

わせてうなずくと、シグナム達が続きを話し出した。

「それは……蒐集を行い、闇の書を完成させることだ……」

「闇の書を完成させて、はやてちゃんを真の闇の書の主にすることができれば……」

「リンカーコアへの負担も減って、はやては治るはずだ……」

それを聞いて、お互いに目を輝かせるオレ達……しかし、逆にはやては困り顔……

「せやけど……それって誰かのリンカーコアを奪うってことやろ……？さすがに、それは……」

「ですが、主はやて……」

「ほっといたら、死んじゃうんだ！はやて、お願いだから……」

「……」

懇願するヴィータを見ながら、はやてはそれでも決心がつかない

のか「う～ん……」と腕を組んで唸っている……

「……少し、聞いてもいいかの？」

「む……？」

「あ、はい……」

そこに、今まで黙ったままだったギドさんが口を出した。それに対してシャマルがうなずくと、ギドさんはあごひげを撫でながら質問した。

「闇の書はリンカーコアから、その生物の持つ魔法や知識を魔力と共に吸収してページを増やすといったな……？」

「ああ、その通りだが……」

「つまり、知識や魔法を有する魔力なら、必ずしもリンカーコアから蒐集する必要はないという事じゃな……？」

「？、ど、どういうことだよ！？」

「「「？？？」」」

……何が言いたいんだろう？

ギドさんの言いたいことが分からず、オレ達は首をかしげる……

すると次の瞬間、ギドさんは顔を上げてうなずいた。

「ならば……方法は、ある！」

「「「えッ！？」」」

その瞬間、オレ達とはやて達は、そろって声を上げたのだった……

～～～？～～～

「……どうかしたのか？ソード？」

「ん？」

気が付くと、ずいぶん回想に集中してたみたいだ……ぼ～っとしてたオレを心配して、シグナムが首をかしげている……

そんな仕草もするんだと思って少し笑いながら、オレは肩をすくめて答える……

「ん～？いや、ギドさんはすごいなぁって思ってさ……」

「ああ～、確かにそうですね……」

「……はい、あの発想と技術には驚きました……」

シャマルさんとノエルさんが感心したようにうなずく……確かに、あんな発想はあの人以外、できないだろうなぁ……

「まさか、オレ達の世界のモンスター達を倒した後、その魔力を結晶化させて蒐集するなんてな……」

……そう、ギドさんが提案した方法……それは、この世界に出現するオレ達の世界のモンスターを蒐集の対象にするものだった……

最初こそ本当に可能なのかと疑ったけど、オレが来る前に倒したモンスターの魔力を結晶化することには成功してたらしく、そのクリスタルを闇の書で蒐集してみた……

そして、それが見事に成功し、これからはヴォルケンリッター達と一緒にモンスター退治&蒐集を行うことになった。

もちろん、アリサやすずかも喜んで協力してくれる……

「ソード、みんな……本当に感謝する……」

「?、なんだよ突然……」

突然、シグナムにお礼を言われて、オレは困惑した……見ると、シャマルも同じようににっこり笑いながらうなずいた。

「もし……あなた達に出会わなければ、私たちはもっと取り返しのつかないことをしていたかもしれません……だから、ありがとう……」

そんなことを言いながら、シャマルさんはかしこまって頭を下げるもんだから少し照れる……まったく、そんな気にすることないってのに……

「……な、なんだそんな事かよ……オレはオレ自身が納得できないからやるだけだ！……それに、友達を見捨てることなんて、できないしな……」

「そうよ……だから、そんなにかしこまらないで……」

「我々は仲間です……お互いを信頼し合い、互いを守るために全力を尽くす……これは当然の事ですので、お気になさらず……」

「……すまん…」

「本当に……ありがとうございます……」

シグナム達はもう一度深々と頭を下げた……もうええっちゅうの……

オレは忍さんやノエルさんと顔を見合わせて、微笑みながら肩をすくめると、何気なく空を見上げたのだった……

〜〜〜?〜〜〜

「……せやけど、本当にあたしは幸せもんや……」

「え?い、いきなりどうしたのよ?」

唐突にそんなことを言い出すはやてに、あたしはびっくりして聞き返した。

……みんなでお風呂に入ったあと、それぞれ体にバスタオルを巻いている状態でそんなことを言われたら、誰だってびっくりすると思うわ……

……だけど、はやてはそう思わないのか、専用のいすに腰掛けてヴィータの髪を拭いてあげながら続ける……

「だって……アリサちゃんやすずかちゃん、ソード君……こんな良い人たちと友達になれたし、シグナムやヴィータみたいな家族にも恵まれて……ほんまに幸せや……」

「……はやて……」

「ふふふ……」

「……／／／」

ヴィータとすずかは微笑んでるけど、あたしは恥ずかしさで顔を背けた……

……まったくもう！どうしてこういう事を恥ずかし気もなく言うやつらばっかなのよ！？

だけど、そんなあたしを見て、すずかとヴィータがにやにやしてくる……

「……な、なによぉ……？」

「ふふふ……アリサちゃんったら照れてる！可愛い！」

「て、照れてなんかいないわよ！／／／」

「ほんとか～？でも、顔が真っ赤だぜ～？」

「あ、当たり前じゃない！今までお風呂入ってたんだから、顔が赤くなるのは当然……／／／」

「でも、ゆでダコみたいだよ？素直じゃないなぁ……」

「あはは～、アリサちゃんはツンデレやなぁ」

「ツンデレ言うな～～～～ッ！！！／／／」

あたしが大声で叫ぶと、三人とも「ごめんごめん」って言いながら謝ってきた……まったく！

「……ん？」

不意に三人に背を向けて振り返ると、脱衣かごに置かれた闇の書が目に入った……

……実はこれ、ギドさんに一時預けることになってたんだけど、なぜかふよふよとはやてについて来ちゃって、今はこの脱衣所に置かれている……

ヴィータが言うには、この闇の書にも意思があって、それで行動してるみたいなのよね……

（本にも意思が宿るなんて……やっぱ魔法ってすごいわね……）

……そんなことを考えながら、あたしが闇の書を見つめていると……

……ブァン……

「えっ！？」

……あたしは、思わず声を上げた……

「？、どうしたの、アリサちゃ……きゃッ！？」

「な、なんやこれ……」

すずかとはやても振り返って声を上げる……ヴィータは、驚きすぎて唖然としてる……その気持ちもよく分かる……

……なぜならそこには、闇の書が黒い雷のボールのようなものに包まれて浮かんでいたんだから……

「ちょ……どうしたのよ、これ……あッ！」

……ビュンッ！

闇の書の異変に驚いたあたしが手を出そうとした瞬間、闇の書は何かに引っ張られたみたいに脱衣所の外へと飛び出していった！……しまったッ！

「す、すずか！急いで追いかけるわよ！」

「う、うん！」

「えっ！？ちょ、ちょっと待って二人とも……」

はやての言葉を最後まで聞かず、あたしはすずかと一緒に闇の書を追って脱衣所を飛び出した！

……闇の書は、はやてを助けるためのカギ！絶対に見失うもんかッ！

「バ、バスタオル一枚やで～……」

はやてのそんな言葉も耳に入らないほど、あたしたちは必至で闇の書を追いかけた……

～～～？～～～

「待ちなさーーーーいッ！！！！」

「んえ？」

シグナム達と一緒に、それぞれの部屋へ戻ろうと脱衣所の近くを通った瞬間、そんな声がオレ達の耳に届いてきた……

……この声って……アリサか？

「一体どうした……んにゃあッ！？」

気になって曲がり角をのぞいてみると、そこには黒い雷のボールに包まれてこっちに飛んでくる闇の書と……

「待ちなさーーーーいッ！！！」

「待ってーーーッ！」

「んな……」

……バスタオル一枚を体に巻いた状態で廊下を疾走してくる、アリサとすずかだった……

……なにこれ？どんな状況！？

「あッ！ソード！ちょうどよかったわ！闇の書を止めて！」

「と、止めてって……ええい、もうッ！」

……状況はよく分からないが、とりあえず闇の書をこのままにしとくわけにはいかない……

……オレは迫りくる闇の書をつかもうと、手を伸ばした！

……だが……

バヂィッ！

「あぐっ！」

「ソードッ！くっ……こっの！」

伸ばしたオレの手は、闇の書を包む雷のボールにはじかれて届かなかった……なんだあれ！？

それを見たシグナムも、あわてて手を伸ばすが、結果は同じだった……

闇の書はそのまま、庭の方へ向かって飛んで行ってしまった……

「くっ……しまった！」

「追うぞ！ソードッ！シャマルッ！忍殿は、他のみんなにこのことを！」

「おう！」

「はい！」

「分かったわ！」

そう言って走り出すシグナムの声にはじかれて、オレはあわてて体を起こした……

……だけど、その時……

「あっ！ちょっと、急に立ち上がらないでって……きゃあああッ！」

「なっ……おうわあああああああッ！！！！！」

「きゃあああああああああああッ！！！！！」

……ドンガラガッシャーン☆ッ！！！！！

……起き上がったオレに、アリサがぶつかって転び、すずかもそれに巻き込まれる形で転んだ……

「あててて……」

「いったたた……ちょっと、なにやって……あ……」

……気が付くと、オレの上にアリサが馬乗りしてる状態だった……すずかも、オレの隣で転んでいる……

「お、おい！大丈夫か！？」

「きゃあッ！ちょっと、急に起き上がらないで……あ……」

「ア、アリサちゃ……ん……」

「な……」

……オレが起き上がろうとした瞬間、アリサの体を包んでいたバスタオルがはらりと落ちた……

……そして、それに驚いて立ち上がったすずかのバスタオルも……同じように落ちた……

「……」

「……」

（……き、きれいだな……）

二人のなめらかな白い肌が視界に入った瞬間、オレは思わずそんなことを考えた……

……だが、次の瞬間……

「き……／／／」

「あ……」

「きゃあああああああああああああああああッ！！！！！／／／」

「なぁに見てんのよ！このへんたーーーーーいッ！！！！！／／／」

「ちょ、ちょっと待てッ！ご、誤解だごぼおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！！」

すずかの悲鳴がとどろいた瞬間、オレが何か弁解するよりも先に、アリサの放った強烈なパンチが、オレの腹部に炸裂していた……

（……ああ、今までで一番痛いわ……この攻撃……）

内臓が破裂するような衝撃の中、オレはそんなことを考えながら、静かに意識を手放した……

〜〜〜?〜〜〜

……はるか後方ですずかの悲鳴とソードの断末魔が聞こえてきたが……今はそれよりも闇の書だ！

「ねぇ、シグナム……」

「何も言うな、シャマル……」

「う、うん……」

……すまないソード、後で弁護くらいはしてやる……

心の中でソードに詫びながら走ると、いつの間に闇の書は屋敷の外へ飛び出していた！

私たちも、それを追って屋敷の外へと飛び出す！

……すると……

「ふむ……なかなかの高純度……そろそろ絞り時か……」

……そこには、仮面をつけた一人の男が、空中で闇の書を片手に何かつぶやいていた……

この騒動は、奴の仕業かッ！？

「貴様、何者だ！」

「む……？」

私がレヴァンティンを突き付けながら叫ぶと、男はこちらに目を向けてきた……

「ほう……闇の書の守護騎士か……」

「ッ！私たちを知っているんですか！？」

「貴様、何をするつもりだ！？」

男の言葉に、シャマルと私は騎士甲冑を展開しながら声を上げる！

……我らを知っているということは、こいつは闇の書について知っているという事……

……一体、こいつは……

油断できない相手だということは、奴の全身から感じる気配で分かる……奴は並みの相手ではない！

……そんな中、不意に男が低い声で笑った……

「ふっふっふっ……そんなに警戒しなくてもよい……今宵の我の目

的は、この本の『闇』だ……」

「「ッ？」」

……男の言葉に、私とシャマルは首をかしげた……闇の書の『闇』……？

しかし、私たちのそんな反応を見た男は、おかしそうに笑いながら答えた。

「分からないかね？まぁいいさ……君たちには決して分からないだろうからねぇ……そこで見ていたまえ！」

ズゾゾゾゾゾッ……

「えッ！？」

「なにッ！？しまった……ッ！！！」

男が手をかざした瞬間、私たちの足元の影がツタのようにうごめきだし、実体をもって私たちを拘束した！

男はそれを確認すると、闇の書の表紙に手をかざした……

……すると……

ズゾゾゾゾゾゾゾゾッ！

「なっ……！？」

「あ、あれは……！？」

闇の書の表紙から、黒い影のようなものが立ち上り、それが男の手に吸収されていく……

……あ、あの禍々しい力は、一体なんだ！？

「クックックックッ……すばらしい……これほど芳醇な闇の力、予想以上だぁ……」

……一方、男は黒い影を吸収し終えたのか、恍惚とした声で呟いた……

……その声に私が感じたのは……狂気……

「く、狂っている……」

「……」

その男を見て、私は思わずつぶやいていた……シャマルなど、顔から血の気が引いている……

……かつて、壊れて狂った人間は何度も見てきた……

……しかし、見ただけで、雰囲気からそれを感じたのは初めてだ……

……私は、そんな人間がいたことに、生まれて初めて心底恐怖を感じた……

「さて……これで要件も終えた……あとは……」

「……そこまでだ！」

「ん……？」

……男が背を向けた瞬間、月村家の屋根から、何かが飛び出して男に襲いかかった！

「なッ……あれは……」

「恭也さんッ！？」

……それは、二本の小太刀を構えた恭也殿だった！彼は、屋敷の屋根から男に飛び掛かると、私の目にも捉えられぬ速さで小太刀を振りぬいた！

「御神流……『八咫烏』ッ！！！」

ズバァンッ！！！！

「ぐぬッ！」

恭也殿の放ったカラスの羽ばたきのような一撃は、男の右腕を少しかすめただけだった……男が、とっさに身をひねって回避したのだ！

しかし、その攻撃をかわした拍子に、男の手から闇の書が零れ落ちた！

「あっ！」

「闇の書が！」

「まかせろ！」

そう言って、私たちの後ろから飛び出したのは、ザフィーラだった！

ザフィーラは、落ちてくる闇の書を空中でつかむと、すぐさま男に油断なく攻撃姿勢を取った。

「……貴様、何者だ……」

「……」

恭也殿が小太刀を、ザフィーラが拳を構えて、男を前後から挟み撃ちにするような位置に移動する……それをどこか余裕の感じられる感じで見ながら、男は肩をすくめた。

「ふむ、仲間か……ここで皆殺しにするのは簡単だが、それでは面白くない……ここは退散するとしよう……」

「「「なにッ！？」」」

その一言に、私たちは全員声を上げた！

……この場にいるのは、恭也殿、ザフィーラ、シャマル、そして私だ……私とザフィーラはもちろん、シャマルも騎士の名を持つ以上は、かなりの実力を持っている。恭也殿も、さっきの技を見る限

り、かなりの手だれだろう……

……それを、簡単に皆殺しにできるとは……

……しかし、その身のこなしと魔力……それに男の放つ雰囲気が、それが間違いでないことを証明しているような気がした……

……そんな私たちを見ながら、仮面の男は片手を空に掲げた……

ピシッ……パリィィイイイイインッ！！！！

「「「なッ！？」」」

……片手を掲げた……ただそれだけで、男は空間を破壊し、その場に『時空の穴』を開けたのだ！

……その光景に、私たちが言葉を失っていると……

「では諸君……また会おう……」

シュウンッ！

……次の瞬間、男の姿は時空の穴の中へと消えた……

シュゥ……ン……

「あっ……」

「むっ……」

……同時に、私とシャマルを拘束していたツタも消え、庭には静寂が戻った……

～～～?～～～

『おい、急げ相棒！おいしいところ持って行かれちまうぞ！』

「うるさいぞクロニクル！これでも急いでる……うえ……」

必要以上にせかすクロニクルに文句を返しながら、オレは月村家の廊下を走っていた！

……アリサ達は、あれからすぐに脱衣所の方に戻っていたらしく、目を覚ました時にはいなかった……

それから、窓から庭で戦っているシグナム達を見て、あわてて部屋のクロニクルを引っ掴んで駆け出したのだが……

「……あのボディブローのせいで、気持ち悪くてうまく走れないんだよ……」

『大丈夫だ相棒！アリサとすずかの裸を見たなら、そのくらいの痛みを受ける価値はある！』

「オレはロリコンじゃないんだが……」

『ロリだろうと巨乳だろうと、この世界の美少女の裸体には無限の価値がある！ビバッ！ハーレームッ！！！』

「お前、ちょっと黙れッ！」

ゴンッ！

『きょにゅうッ！？』

……アホなことを絶叫するクロニクルを壁に打ち付けて黙らせた瞬間、ようやく庭へと続く扉が見えた！

「おーい！大丈夫……か？」

「あ、ソード君……」

扉を開けて庭に飛び出すと、そこには武器を収める恭也さんとザフィーラ、それに私服姿のシグナム達がいた……

……どうやら、もう戦闘は終わったみたいだな……

「……終わったみたいだな……どうなったんだ？」

「ん、ああ……」

オレがそう聞くと、シグナムは不機嫌そうに話してくれた……

……謎の仮面の男に出会ったこと……

……その男が、闇の書から『なにか』を吸収して去って行ったこと……

……そして、その力が明らかに規格外だったこと……

「あの男……いったい何者か知らんが、闇の書にの事を知って接触してきた以上、また現れる……お前も気をつけろ……」

「ああ……」

いつも以上に真剣なシグナムの言葉に、オレも真剣にうなずいた。

空を見上げると、そいつが開けたっていう『時空の穴』がまだ顔をのぞかせていた……これを片手でやったっていうんだから、確かに反則だよな……

……その時……

「うわあああああああああああッ！！！！」

「あああああああああああああですぅ～～～～ッ！！！」

「なっ……！？」

……空に開いた時空の穴から、二つの何かが落ちて来るのが見えた……オレはすぐさまその場を離れる！

……シグナム達もそれに気づいたらしく、すぐに全員がその場を離れた。

……そして……

ドシャアアアッ！！！

「うぎゃッ！」

「ふにゃあっ！」

……その二つの『何か』は、地面に激突して動かなくなった……

あれ？死んじゃいないよな……？

「お、お～い……大丈夫かぁ……？」

「……」

「……」

……ちょっと心配になって近づいてみると、その姿が月明かりに照らされて見えてきた……

……仰向けに倒れてる方は、ガスマスクのようなものを顔につけていて、頭には布で出来たウサギの耳のような帽子をかぶっている……体はヴィータと同じくらいだろう、かなり小さい……

……もう一方の方は、さっきの奴より小柄で、地面にめり込んだまま頭に生えているウサ耳がピクピク痙攣している……

……あれ？こいつらってまさか……

「ぷはぁッ！死ぬかと思った！」

「うわぁッ！」

ガスマスクの方が突然起き上がって声を上げた！オレは驚いて、思わずしりもちをついてしまった！

「ったく……いきなりわけのわからない穴に吸い込まれたと思ったら……どこだよ、ここは……？」

「……」

ガスマスクの方はオレに気づかず、キョロキョロとあたりを見回してる……どうやら、相当混乱してるみたいだ……

……いや、というかやっぱこいつ……

「オ、オズモンド……？」

「あ？」

そこでようやくオレに気づいたガスマスク……いや、オズモンドがオレに近づいてジロジロオレを観察する……

……そして……

「お前さん、誰だ？」

「はっ！？」

オズモンドは、そう言いながら不思議そうに首をかしげたのだった……

……こうして、アリサとすずかの騎士契約、謎の仮面の襲来、オズモンドとの再会など、様々なことが起こった波乱万丈のお泊り会の夜は、こうして幕を閉じたのだった……

（つづく）

エピローグ～謎の仮面、いきなりの再会～（後書き）

ソード「ソードと！」

アリサ&すずか「「アリサ&すずかの！」」

三人「あとがきコーナー！」

ソード「さて、今回はオズモンドとロッコが登場！この二人が後の展開に大きくからんでくることになるな……」

アリサ「そうなんだ……って、それよりもあんた、あたしたちの裸見たでしょ！」

すずか「……／／／」

ソード「い、いや、それはその……悪かった！」

アリサ「……」

すずか「……」

アリサ「……ふぅ、まあいいわ……あたし達も悪かったし、事故だもん……大目に見てあげるわ……」

すずか「わ、私も気にしないから……」

ソード「ふぅ……あ、ありがとう……」

アリサ「それにしても、あの仮面の男はなんなのよ！？闇の書からなにか吸収してたみたいだけど……」

すずか「闇の書の『闇』って言ってたね……なにか関係あるのかな？」

ソード「それは次回からの展開に期待だな！オズモンド達やノエルさん達も、これからどんどん活躍させていく予定だ！」

アリサ「逆になのはやフェイト達の出番がなくなりそうね……」

ソード「このお話じゃ脇役だしな、あいつら……」

すずか「あはは……なのはちゃん、ごめんね……」

ソード「それでは、このお話を読んでくれた皆さん！感想どんどん送ってください！待ってます！」

アリサ「それじゃあ、また次回もお楽しみに！」

すずか「次回は、みんなが加わってからの日常と謎の襲撃者のお話だよ！お楽しみに！」

三人「「「ではでは、また次回！」」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3204y/

白騎士物語～魔法少女と騎士たちの目覚め～

2011年11月20日02時08分発行